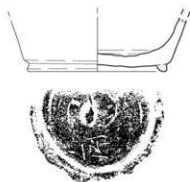


大道遺跡群6

大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 9

第21次 第28次 第31次

第34次 第36次 第37次



2013

大分市教育委員会

大道遺跡群6

大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 9

第21次 第28次 第31次

第34次 第36次 第37次

2013

大分市教育委員会

序 文

本書は、大分駅周辺総合整備事業に伴って、平成18・20・21年度に実施しました大道遺跡群第21・28・31・34・36・37次調査の成果を収録したものです。

駅周辺総合整備事業は、将来の50万都市を展望した都市基盤整備の中核となる事業であり、国・県・市が一体となり取り組んでいます。この事業により、鉄道により分断されていた大分駅南北市街地の一体化を図り、駅北・商業業務中核都心と駅南・情報文化新都心との役割分担の中で、ゆとりと潤いのある新都心を創出することを目的としており、後世に誇り得る県都「大分」の顔づくりをめざしています。

今回報告いたします大道遺跡群第21・28・31・34・36・37次調査地点は、複合文化交流施設「ホルトホール大分」の建設地になります。「ホルトホール大分」は人と文化と産業を育み、創造、発信する新都心拠点を基本理念に、文化・交流・教育・福祉といった機能の充実をめざし、平成25年7月に竣工予定であります。

大道遺跡群第28・31次調査では、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物跡群、井戸跡、大溝跡等が発見され、遺跡が立地する地理的環境などから、水上交通の要所となる遺跡として注目されています。また、第21次調査では、弥生時代後期に位置づけられる土器群が良好な状態で発見され、その中には瀬戸内地域の土器も含まれていることから、当時の地域間の交流を示す貴重な資料となりました。

本書が市民の皆様には駅周辺地区の歴史を今一度振り返っていただく機会となり、その一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本調査事業の実施にあたり、ご指導いただいた諸先生方、ご協力いただいた関係機関各位に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成25年3月15日

大分市教育委員会

教育長 足立一馬

例 言

- 1 本書は大分市教育委員会が大分駅周辺総合整備事業に伴って平成 18・20・21 年度に実施した大道遺跡群第 21・28・31・34・36・37 次調査の発掘調査報告書である。
- 2 調査担当は、第 1 表 調査地点一覧表のとおりである。
- 3 遺構の実測は、各調査担当者が行ったほか、有限会社九州文化財リサーチ (第 21 次)、大成エンジニアリング株式会社 (第 28 次)、株式会社九州文化財総合研究所 (第 34・36・37 次) が大分市教育委員会文化財課の委託を受けて行った。遺構全体図作成については、九州航空株式会社が大分市教育委員会文化財課の委託を受け行った。
- 4 遺構の写真撮影は、各調査担当者が行った。各調査区の全体の撮影については、大分市教育委員会文化財課の委託を受け九州航空株式会社が行った。
- 5 遺物選別は、佐藤道文・松浦憲治 (大分市教育委員会文化財課)、中西武尚 (大分市歴史資料館) が行った。遺物の接合・注記作業は、倉増美智代・敷島加代子・小野千恵美 (大分市教育委員会文化財課嘱託) が行った。
- 6 報告書に掲載した出土遺物の実測・製図は、第 21 次と第 28・31・36 次の一部を株式会社埋蔵文化財サポートシステム (業務責任者 古閑健一) が委託を受け行った。第 28 次の一部の遺物実測は佐藤、松浦が行い、第 31・34・36 次の遺物実測は佐藤・塩地潤一・小野知恵・敷島が行った。遺物・個別図・遺構図の製図を主に倉増が行い、小野知恵・佐藤良子・佐藤麻理子・松本晴美 (大分市教育委員会文化財課嘱託) の協力を得た。
- 7 遺物写真撮影は、大分市教育委員会文化財課の委託を受け、株式会社埋蔵文化財サポートシステム (業務責任者古閑健一) がデジタル写真撮影を行った。
- 8 本書の執筆は、以下のとおりである。
第 I 章 佐藤
第 II 章 佐藤
第 III 章 〔遺構〕佐藤・倉増・中西 〔遺物〕佐藤・中西
第 IV 章 佐藤
- 9 本書の編集は、倉増が行い、株式会社埋蔵文化財サポートシステム (業務責任者 古閑健一) の協力を得た。
- 10 本報告書巻末の写真図版及び掲載できなかった写真図版を附属の DVD-RAM に収容している。詳細は DVD-RAM 内の「はじめにお読み下さい」を参照頂きたい。
- 11 出土遺物・記録資料は、大分市埋蔵文化財保存活用センター (大分市大字田原 337 番地の 5) に収蔵・保管している。
- 12 発掘調査及び報告書作成に際して、下記の方々に指導・御助言を頂いた。(敬称略、順不同)
小田富士雄 (福岡大学名誉教授) 中西 武尚 (大分市歴史資料館)

凡 例

- 1 本書で用いた遺構略号と遺構掲載順番は、以下のとおりである。
① SB: 掘立柱建物跡、② SA: 柵状遺構、③ SH: 竪穴建物跡、④ SE: 井戸跡、⑤ SK: 土坑・貯蔵穴、⑥ SD: 溝跡、⑦ SF: 道路状遺構、⑧ SX: 性格不明遺構、⑨ SP: ビット・小穴を表している。
- 2 本書に記載される遺構番号は、以下の要領で表記される。
「21 SB 001」…21(調査次数) SB(遺構略号) 001(遺構番号)
- 3 本書に用いた方位はすべて座標北 (G.N.) である。座標は、旧日本測地系の平面直角座標 2 系 (北緯 33° 0'、東経 131° 0') の X・Y 座標を基点として表記している。
- 4 本書に掲載した遺構配置図 (遺構の新旧関係を記録した図面) の表記は、新旧関係を実線で示し、下位の

遺構については点線で記している。また、表記上、遺構の新旧関係が不明瞭な場合は、矢印で補足している。

- 遺構の規模と深度の単位は原則としてメートル (m) で、遺物の法量はセンチメートル (cm) で表記している。
- 遺物の法量の内、器高と口径、底径と高台径は以下のとおり計測している。

器高：底部を水平に置いた状態で、最も高い部分の高さ

口径：上記の状態で、口縁端部外縁の最大径

底径：口縁部を水平に置いた状態で、底部と認識した部分の最大径

高台径：高台端部外縁の最大径

- 本書に掲載した遺物の実測図の表記は、以下のとおりである。

(1) 遺物断面が黒塗りのもの…陶器・須恵器 (2) 遺物断面が灰色のもの…瓦器・瓦類

(3) 遺物平面の稜線と調整の変換点…実線 (4) 調整が同じでその単位が分かるもの…長破線

(5) 軸と付着物、黒斑等その範囲を示す必要があるもの…一点破線

- 本稿における編年観及び年代観について、以下に掲載する分類資料図 (1～3) に示す標識資料との比較による。なお、これらの資料が掲載された文献は分類資料図 3 にある一覧のとおりである。その他、遺物の年代観等については以下の文献を参考にした。

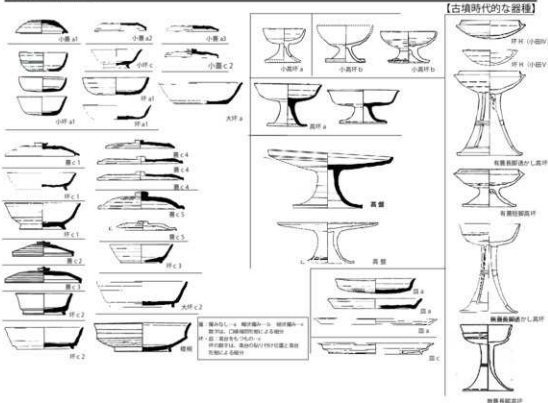
大分市教育委員会 2010『下部道跡群 VⅢ』大分市下部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 7

久住猛雄 1999『北部九州における庄内式併行期の土器様相』『庄内式土器研究 X IX』庄内式土器研究会

山本信夫 1992『北部九州の 7～9 世紀中頃の土器』古代の土器研究会 第 1 回シンポジウム

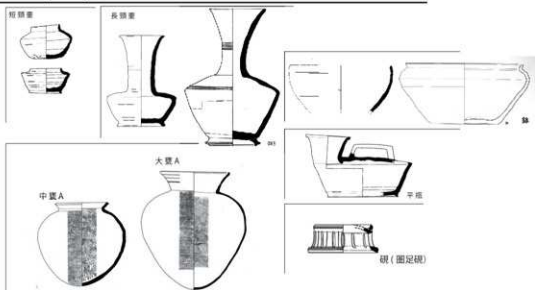
【分類資料図 1】

■須恵器 Ⅱ須恵器



〔分類資料図 2〕

■須惠器 ☒貯蔵具

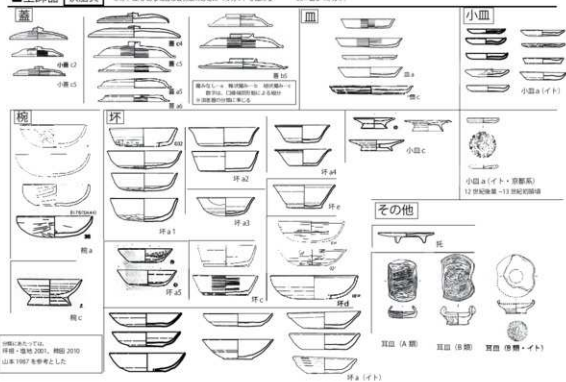


付録にあたりては、
 岡田 2010
 山本 1992 を参考とした

■土師器 供隨具

主成分 λ_2 がある場合は各分類のあとに「主成分」を添える。

附錄二 圖表 (續)



■土師器 煮炊具・貯蔵具



〔瓦質土器〕〔土師質土器〕

山本哲也 2009「豊前・豊後における瓦質土器の初期様相」『中近世土器の基礎研究』22 日本中世土器研究会

河野史郎 2002「出土土師器・土器類及び瓦質土器雑器の分類と編年」『大友府内 4』大分市教育委員会

〔瓦器〕

尾土実・森島康雄・近江俊秀 1995「瓦器椀」『概説 中世の土器・陶磁器』真岡社

〔白色研磨土師器〕

俣田智美 2012 「第2節 羽田遺跡出土の白色研磨土師器境について」『羽田遺跡3』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 第114集
[土師器]

坪根伸也 1995「付章 羽田遺跡出土土器に関する二・三の問題」『羽田遺跡Ⅱ』大分市教育委員会

坪根伸也・塩地潤一 2001 「豊後国の土器編年」『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会

梶田智美 2010 「(4) 古代の土師器について」『下郡遺跡群Ⅷ』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 第100集

山本信夫・山村信榮 1997「中世食器の地域性 九州・南西諸島」『]

國立歷史民俗博物館研究報告

山本信夫 1987 「付編・土器の分類」『大宰府条坊跡Ⅱ』

林潤也・中西武尚・今田しのぶ 2001「豊後における都」

【須惠器】

山本信夫 1992「3. 遺物各説」『宮ノ本遺跡Ⅱ—窯跡Ⅱ—』

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査経過	1
第2節 調査組織	2～3
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第Ⅲ章 調査の成果	10
第1節 調査の概要(佐藤)	10
第2節 大道遺跡群第21・34次調査	10～29
(1)はじめに(佐藤)	10
(2)基本層序(佐藤)	10
(3)遺構(倉増)	10～17
(4)出土遺物(佐藤)	17
第3節 大道遺跡群第28次調査	30～89
(1)はじめに(佐藤)	30
(2)基本層序(佐藤)	30
(3)遺構(倉増・中西)	30～66
(4)出土遺物(佐藤)	67～70
第4節 大道遺跡群第31次調査	90～120
(1)はじめに(佐藤)	90
(2)基本層序(佐藤)	90
(3)遺構(佐藤)	90～104
(4)出土遺物(佐藤)	105～108
第5節 大道遺跡群第36次調査	121～124
(1)はじめに(佐藤)	121
(2)基本層序(佐藤)	121
(3)遺構(倉増)	121
(4)出土遺物(佐藤)	124
第6節 大道遺跡群第37次調査	125
(1)はじめに(佐藤)	125
(2)基本層序(佐藤)	125
(3)遺構(佐藤)	125
(4)出土遺物(佐藤)	125～126
大道遺跡群6遺物観察表	127～146
第Ⅳ章 総括	147～154
第1節 調査成果の時代別整理(佐藤)	147～149
(1)はじめに	
(2)時代別の調査成果	
第2節 古代の建物配置及び遺物について(佐藤)	149
第3節 結語(佐藤)	150
参考文献	155
写真図版	157～168

挿図目次

第1図	調査区位置図(1/5000)	4	第48図	第28次井戸跡遺物実測図1(1/4)	72
第2図	調査区周辺地形分類図 (『大分市史』上 一部改定)および遺跡分布図(1/60000)	5	第49図	第28次井戸跡遺物実測図2(1/4)	73
第3図	周辺道路地図(1/40000)	7	第50図	第28次井戸跡遺物実測図3(1/4)	74
第4図	平成9年大分県周辺空中写真	9	第51図	第28次井戸跡遺物実測図4(1/4)	75
第5図	90キグレNEWサーカスチラシ	9	第52図	第28次井戸跡遺物実測図5(1/4)	76
第6図	建設中の複合文化交流施設「ホルトホール大分」	9	第53図	第28次井戸跡遺物実測図6(1/4)	77
第7図	大道遺跡群第21・28・31・34・36・37次 調査遺構配置図(1/600)	11・12	第54図	第28次井戸跡遺物実測図7(1/4)	78
第8図	大道遺跡群第21次・第34次調査遺構配置図(1/400)	13	第55図	第28次土坑遺物実測図1(1/4)	78
第9図	大道遺跡群第21次調査遺構全体図(1/400)	14	第56図	第28次土坑遺物実測図2(1/4)	79
第10図	21SB065遺構実測図(1/60)	16	第57図	第28次溝跡遺物実測図1(1/4)	79
第11図	第21次溝跡土層断面実測図(1/40)	16	第58図	第28次溝跡遺物実測図2(1/4)	80
第12図	第21次土坑遺構実測図(1/40)	18	第59図	第28次溝跡遺物実測図3(1/4)	81
第13図	21SD001・5K020遺物実測図1(1/4 3のみ1/2)	20	第60図	第28次溝跡遺物実測図4(1/4)	82
第14図	21SK020遺物実測図2(1/4)	21	第61図	第28次溝跡遺物実測図5(1/4)	83
第15図	21SK020遺物実測図3(1/4)	22	第62図	第28次溝跡遺物実測図6(1/4)	84
第16図	21SK020遺物実測図4(1/4)	23	第63図	第28次その他の遺構出土遺物実測図(1/4)	85
第17図	21SK020遺物実測図5(1/4)	24	第64図	大道遺跡群第31次調査遺構配置図(1/250)	91
第18図	第21次土坑・柱穴遺構遺物実測図(1/4)	25	第65図	大道遺跡群第31次調査遺構全体図(1/250)	92
第19図	大道遺跡群第28次調査遺構配置図(1/300)	31・32	第66図	第31次掘立柱建物跡遺構実測図1(1/60)	94
第20図	大道遺跡群第28次調査遺構全体図(1/300) 調査区北壁土層図(1/100)	33・34	第67図	第31次掘立柱建物跡遺構実測図2(1/60)	94
第21図	第28次掘立柱建物跡遺構実測図1(1/60)	36	第68図	第31次掘立柱建物跡遺構実測図3(1/60)	96
第22図	第28次掘立柱建物跡遺構実測図2(1/60)	38	第69図	第31次掘立柱建物跡遺構実測図4(1/60)	97
第23図	第28次掘立柱建物跡遺構実測図3(1/60)	39	第70図	第31次掘立柱建物跡遺構実測図5(1/60)	98
第24図	第28次掘立柱建物跡遺構実測図4(1/60)	40	第71図	第31次横状遺構実測図(1/60)	98
第25図	第28次掘立柱建物跡遺構実測図5(1/60)	41	第72図	31SH030遺構実測図(1/60)	99
第26図	第28次横状遺構実測図(1/60)	42	第73図	31SE035遺構実測図(1/40)	100
第27図	28-1SH050遺構実測図(1/60)	44	第74図	第31次土坑遺物実測図 (1/40 SK146 1/20-SK139 1/60)	102
第28図	28-1SH058遺構実測図(1/60)	45	第75図	第31次SD025土層断面実測図(1/40)	104
第29図	28-1SH059遺構実測図(1/60)	45	第76図	第31次SD025土層断面実測図(1/60)	105
第30図	第28次井戸跡遺物実測図1(1/40)	48	第77図	第31次SD089遺構実測図(1/250・1/40)	106
第31図	第28次井戸跡遺物実測図2(1/40)	49	第78図	第31次建物跡・横状遺構遺物実測図(1/4)	109
第32図	第28次土坑遺構実測図(1/40)	51	第79図	第31次井戸跡遺物実測図(1/4)	109
第33図	第28次溝跡遺構実測図1(1/40)	52	第80図	第31次土坑遺物実測図1(1/4)	110
第34図	第28次溝跡遺物実測図2(1/40)	53	第81図	第31次土坑遺物実測図2(1/4)	111
第35図	第28次溝跡遺物実測図3(1/40)	54	第82図	第31次溝跡遺物実測図1(1/4)	112
第36図	第28次溝跡遺物実測図4(1/40)	56	第83図	第31次溝跡遺物実測図2(1/4)	113
第37図	第28次溝跡遺物実測図5(1/40)	58	第84図	第31次溝跡遺物実測図3(1/4)	114
第38図	道路状遺構及び関連遺構全体図(1/150)	59	第85図	第31次溝跡遺物実測図4(1/4・1/1)	115
第39図	28-1SF040・043遺構実測図(1/50)	60	第86図	第31次溝跡・その他の遺構遺物実測図(1/4)	116
第40図	28-1SF041・042遺構実測図(1/50)	61	第87図	大道遺跡群第36次調査遺構配置図(1/100)	122
第41図	28-2SF200遺構実測図(1/80)	62	第88図	36SB005遺構実測図(1/80)	123
第42図	28-1SX034遺構実測図(1/60)	64	第89図	36SD025土層断面実測図(1/40)	123
第43図	28-1SX037・038・039遺構実測図(1/60)	65	第90図	第36次調査出土遺物実測図(1/4)	124
第44図	28-1SX027遺構実測図(1/40)	66	第91図	大道遺跡群第37次調査遺構配置図(1/200) 調査区北壁土層図(1/60)	126
第45図	28-2SX160遺構実測図(1/60)	66	第92図	大道遺跡群第21・28・31次主要遺構出土遺物 (弥生時代後期～古墳時代)(1/20・1/16)	151
第46図	第28次掘立柱建物跡・横状建物跡遺物実測図(1/4)	71	第93図	大道遺跡群第28・31次主要遺構出土遺物 (古代)(1/8・1/4・1/2)	152
第47図	第28次横状建物跡遺物実測図(1/4)	72	第94図	大道遺跡群北壁主要遺構実測図(1/800)	153・154

表目次

第1表	調査地点一覧表	1	第20表	大道道跡群第28次調査遺物観察表2	131
第2表	大道道跡群第21次調査遺構台帳1	26	第21表	大道道跡群第28次調査遺物観察表3	132
第3表	大道道跡群第21次調査遺構台帳2	27	第22表	大道道跡群第28次調査遺物観察表4	133
第4表	大道道跡群第21次調査遺構台帳3	28	第23表	大道道跡群第28次調査遺物観察表5	134
第5表	大道道跡群第34次調査遺構台帳	29	第24表	大道道跡群第28次調査遺物観察表6	135
第6表	大道道跡群第28次調査遺構台帳1	86	第25表	大道道跡群第28次調査遺物観察表7	136
第7表	大道道跡群第28次調査遺構台帳2	87	第26表	大道道跡群第28次調査遺物観察表8	137
第8表	大道道跡群第28次調査遺構台帳3	88	第27表	大道道跡群第28次調査遺物観察表9	138
第9表	大道道跡群第28次調査遺構台帳4	89	第28表	大道道跡群第28次調査遺物観察表10	139
第10表	大道道跡群第31次調査遺構台帳1	117	第29表	大道道跡群第28次調査遺物観察表11	140
第11表	大道道跡群第31次調査遺構台帳2	118	第30表	大道道跡群第31次調査遺物観察表1	141
第12表	大道道跡群第31次調査遺構台帳3	119	第31表	大道道跡群第31次調査遺物観察表2	142
第13表	大道道跡群第31次調査遺構台帳4	120	第32表	大道道跡群第31次調査遺物観察表3	143
第14表	大道道跡群第36次調査遺構台帳	127	第33表	大道道跡群第31次調査遺物観察表4	144
第15表	大道道跡群第37次調査遺構台帳	127	第34表	大道道跡群第31次調査遺物観察表5	145
第16表	大道道跡群第21次調査遺物観察表1	128	第35表	大道道跡群第31次調査遺物観察表6	146
第17表	大道道跡群第21次調査遺物観察表2	129	第36表	大道道跡群第36次調査遺物観察表	146
第18表	大道道跡群第34次調査遺物観察表	129			
第19表	大道道跡群第28次調査遺物観察表1	130			

写真図版目次

写真図版1

大道道跡群全景（下が北）
第21次調査区全景（上が北）

写真図版2

第28-1次調査区全景（上が北）
第28-2次調査区全景（上が北）

写真図版3

28-1SH050 検出状況（南より）	28-1SH050 土層観察時（南東より）
28-1SH050 土層観察時（詳細）	28-1SH050 壁溝検出状況（東より）
28-1SH050 壁溝検出状況（詳細）	28-1SH050 作業風景
28-1SH050 完掘状況（南西より）	28-1SK010 検出状況（北より）

写真図版4

28-1SK010 遺物出土状況（北より）	28-1SK010 遺物出土状況（詳細）
28-1SK010 土層観察時（北より）	28-1SD045 検出状況（南東より）
28-1SD045 土層観察時（北より）	28-1SD045 完掘状況（北より）
28-1SD030 土層観察時（東より）	28-1SD030 刻書土器出土状況（西より）

写真図版 5

28-1SD030 刻書土器出土状況（詳細）	28-1SD030・041・042・043 遠景（南より）
28-1SD030 作業風景（北より）	28-1SF041・042 検出状況（南より）
28-1SF041・042 検出状況（北より）	28-1SF041・042 完掘状況（北より）
28-1SF043 完掘状況（北より）	28-1SX037・038・039 検出状況（南より）

写真図版 6

28-1SX034 土層観察時（南より）	第 28-1 次調査区北壁土層（南より）
月に照らされる調査区	第 28-2 次調査区北西部検出時（北より）
28-2SE170 検出状況（南より）	28-2SE170 遺物出土状況（南より）
28-2SE170 土層観察時（南より）	28-2SE170 完掘状況（南より）

写真図版 7

第 31 次調査区全景（上が北）	
31SB005 検出時（北より）	31SB010 検出状況（南より）
31SB010c 根石出土状況（東より）	31SH030 検出状況（南より）

写真図版 8

31SH030 黄茶土検出状況（東より）	31SH030 土層（南より）
31SH030 完掘時（南より）	31SE035 検出状況（南より）
31SE035 露出土状況（東より）	31SE035 遺物出土状況（南より）
31SE035 木櫛出土状況（北より）	31SE035 完掘時（南より）

写真図版 9

31SE035 完掘時詳細（北より）	31SE035 井戸枠取り出し状況
31SK001 遺物出土状況（北より）	31SK001 遺物出土詳細（北より）
31SK001 完掘時（北より）	31SK065 検出状況（東より）
31SK065 土層（北より）	31SK065 完掘時（北より）

写真図版 10

第 31 次溝群検出状況（北より）	31SD025 検出状況（南東より）
31SD025 桃石出土状況（北より）	31SD025 遺物出土状況（西から）
31SD025 黒色土・プラン土層（南東より）	31SD025 縦断土層遠景（南より）
31SD025 縦断土層詳細（南より）	31SD025 縦断土層西部（南より）

写真図版 11

31SD025 縦断土層中央部（南より）	31SD025 縦断土層東部（南より）
31SD025 土層（西より）	31SD025 完掘時（南より）
31SD025 東壁土層（西より）	31SD025 西壁土層（東より）
31SD025 完掘時（東より）	31SD025 作業風景（南東より）

写真図版 12

31SD089 完掘時（東より）	31SD089 南側土層（南より）
31SD089 北側土層（西より）	34SK020 遺物出土状況（南東より）
34SK020 完掘時（南東より）	37SD001 完掘時（南より）
第 37 次調査区北西隅土層（南東より）	第 37 次調査区全景（南東より）

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査経過

大分市は、平成 8 年度より、大分駅の高架化・都市街路整備・大分駅南土地区画整理を一体とする大分駅周辺総合整備事業を推進している。このうち、大分駅南土地区画整理事業は、長年の懸案であった大分駅及び駅近傍 J 線の高架化実施にあわせて、南北市街地の一体化をはかるとともに、商業・業務用地と都市型住宅地の両面を整備することで地方中核市としての大分市の中心部としてふさわしい都市拠点の形成をめざしたものである。

大分駅周辺総合整備事業は平成 8 年 3 月 15 日に都市計画決定され、平成 9 年度から本格的に事業が着手されて、平成 26 年度の完成予定で事業実施中である。なお、平成 18 年度後半から工事が開始された大分駅の高架化については、平成 20 年 9 月に久大線・豊肥線ホームが完成し、9 月 13 日に仮開業するに至った。

その後、駅の北側は府内中央口（北口）、南側は上野の森口（南口）と命名され、平成 24 年 3 月 17 日にそれまで部分高架であったものが完全高架化に移行し、それにとない高架ホーム下に新駅舎が設けられた。同時に、新駅舎改札口に向かい側には 33 店舗が集う「豊後にわさき市場」がオープンし、賑わいをみせている。

府内中央口には 1958 年に建設された旧駅舎があったが、完全高架化を以て使用を終了し、解体後旧駅舎跡及びホーム跡地には、2013 年春着工、2015 年春竣工予定のテナント・レストラン・シネコン・ホテル・温泉施設等が集合する新駅ビルが建設される予定である。

大分駅周辺総合整備事業着手に先立ち、地区内の埋蔵文化財の所在状況に関して平成 8 年 10 月都市計画課駅南対策室より大分市教育委員会文化財室に照会された。事業予定地内における遺跡の所在状況については全く不明であったため、大分市教育委員会では平成 8 年 9 月 25 日から 10 月 11 日に現駅周辺総合整備課（平成 9 年 4 月に正式設置）事務所予定地の試掘調査を実施し、遺構が存在することを確認した。（＝東大道遺跡：平成 12 年度から大道遺跡群と改称）この結果を受け、大分市教育委員会では、平成 9 年度から住宅等の移転により空地となった地点から順次試掘調査を実施して、埋蔵文化財の所在状況を確認し、本調査が必要な箇所の絞り込みを行うことにした。平成 9 年度から 11 年度にかけて断続的に実施した試掘調査の結果、事業予定地内には 2 地区に埋蔵文化財包蔵地が存在することが判明し、それぞれ南金池遺跡と大道遺跡群として周知されることになった。

このうち大道遺跡群は、大分駅南土地区画整理事業地区の中心地域に所在する遺跡であり、東大道、金池南、桜ヶ丘地区に広がる微高地上に点在する遺跡を総称するもので、当初は東西約 1.5km、南北約 0.8km の範囲としていたがその後の発掘調査が進化した結果、平成 19 年 4 月には大分駅の南側、東西約 0.6km、南北約 0.7km に範囲が訂正されている。

本書に収録した大道遺跡群の各調査地点は、第 21 次が平成 18 年度、第 28 次が平成 20 年度、第 31・34・36・37 次が平成 21 年度に調査されたものであり、いずれも平成 25 年度 7 月に竣工する複合文化交流施設「ホルトホール大分」の建設予定地を対象とした発掘調査である。本敷地内では、平成 11 年度に確認調査を実施しており、複数の溝跡やピットといった遺構が検出されており、遺跡の存在が確認されることとなった。その後事業計画に沿って、上述した期間で発掘調査を随時行い、「ホルトホール大分」竣工間近に合わせて調査成果を収録した埋蔵文化財発掘調査報告書を刊行することとした。

第 1 表 調査地点一覧表

調査次数	所在地	調査担当	調査期間	調査面積
第21次調査	金池南1丁目	永松正大	平成18年12月25日～平成19年3月28日	1628㎡
第28次調査	金池南1丁目	中西武尚・佐藤孝則	平成20年9月1日～平成21年3月1日	5000㎡
第31次調査	金池南1丁目	佐藤道文・山下朋紀	平成21年6月18日～平成21年8月31日	1119㎡
第34次調査	金池南1丁目	永松正大・山下朋紀	平成22年2月4日～平成22年3月16日	430.6㎡
第36次調査	金池南1丁目	永松正大	平成22年2月4日～平成22年3月16日	160.3㎡
第37次調査	金池南1丁目	永松正大	平成22年2月21日～平成22年3月16日	352.8㎡

第 2 節 調査組織

平成 18 年度 第 21 次調査

【調査主体】大分市教育委員会 教育長 秦 政博

【事務局】大分市教育委員会教育総務部文化財課
文化財課課 長 佐藤 功 (～平成 18 年 9 月 30 日)
玉永 光洋 (平成 18 年 10 月 1 日～)

管理係

係 長 安東 時男

主 査 幸 俊昭

主 任 加藤 キヌ

文化財係

係 長 塔鼻 光司

主 事 永松 正大

【調査協力】大分市都市計画部 駅周辺総合整備課
駅周辺総合整備課

都市計画部次長兼課長 木崎 康雄

管理係

課長補佐兼係長 岩田 祐治

主 査 桜井 敏男

主 査 山本 雅博

主 任 加藤真由美

換地工務係

係 長 富永 好一

主 査 後藤 正一

平成 20 年度 第 28 次調査

【調査主体】大分市教育委員会 教育長 足立一馬

【事務局】大分市教育委員会教育総務部文化財課

教育総務部次長兼課長 玉永 光洋

参 事 岩田 祐二

管理係

課長補佐兼係長 福田 誠一

主 査 幸 俊昭

主 任 加藤 キヌ

文化財係

課長補佐兼係長 塔鼻 光司

主任技師 中西 武尚

嘱 託 佐藤 孝則

【調査協力】大分市都市計画部 駅周辺総合整備課

都市計画部参事兼課長 木崎 康雄

管理係

参事兼係長 伊達 俊秀

主 査 桜井 敏男

主 任 加藤真由美

主 事 大川内匡史

換地工務係

課長補佐兼係長 富永 好一

主 査 後藤 正一

平成 21 年度 第 31 次・34 次・36 次・37 次調査

【調査主体】大分市教育委員会 教育長 足立一馬

【事務局】大分市教育委員会教育総務部文化財課

教育総務部次長兼文化財課長 玉永 光洋

参 事 岩田 祐二

課長補佐 塔鼻 光司

管理係

課長補佐兼係長 福田 誠一

主 査 幸 俊昭 (～6 月末)

【調査協力】大分市都市計画部 駅周辺総合整備課

都市計画部次長兼課長 中畑 修

管理係

参事兼係長 伊達 俊秀

主 査 高屋 修司

主 査 神崎小由美（7月1日～）
主 任 加藤 キヌ（～6月末）

文化財係
係 長 坪根 伸也
主任技師 高畠 豊
主 任 永松 正大
主 任 佐藤 道文
嘱 託 山下 朋紀

主 査 加藤真由美
主 事 大川内匡史
換地工務係
課長補佐兼係長 富永 好一
主 査 後藤 正一

平成24年度 整理・報告書刊行事業

【調査主休】大分市教育委員会 教育長 足立一馬

【事務局】大分市教育委員会教育部文化財課

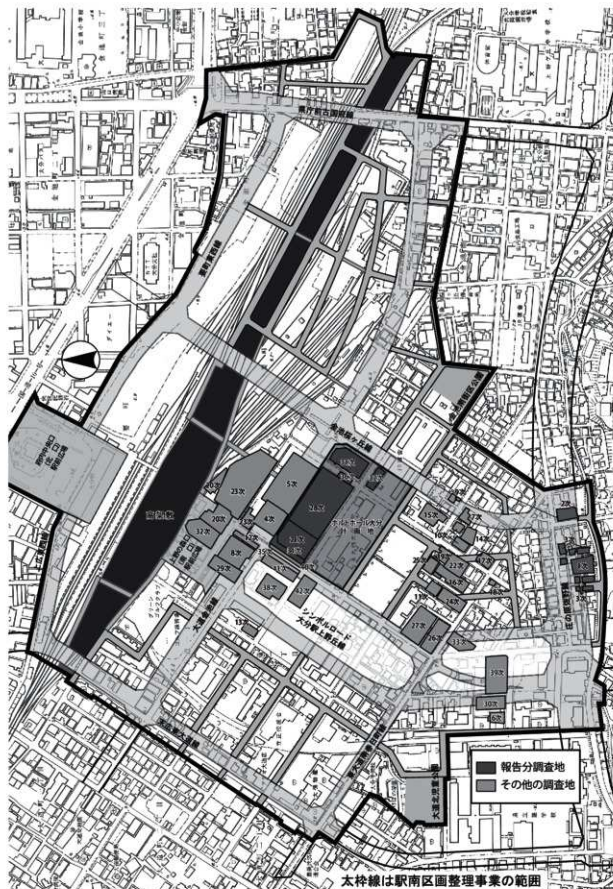
課 長 福田 誠一
主 幹 坪根 伸也
主 幹 池邊千太郎
埋蔵文化財担当班
専門員（班長） 高畠 豊
専門員 塩地 潤一
主 査 佐藤 道文
主 事 朝川 貴俊
嘱 託 倉増美智代
敷島加代子

【刊行協力】大分市都市計画部 駅周辺総合整備課

課 長 長野 保幸
課長補佐 井筒 幸男
管理担当班
主 幹（ゲル・ア・リ・ダ・） 衛藤 興憲
主 査 高屋 修司
専門員 武安 高志
主 任 大川内匡史
換地工務担当班
主幹（ゲル・ア・リ・ダ・） 副田 泰二
主 任 鶴上 浩

【整理・報告書刊行事業協力者】

井口あけみ・木村藍子・羽田野裕之・古田陽・姫野久恵・神田陽子・田畑里美・加藤真優美・佐藤久美・橋本千代美



第 1 図 調査区位置図 (1/5000)

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

大分県大分市は、九州の北東部に位置し、その北側は瀬戸内海西端の別府湾に面しており、地形的にも九州の玄関口としての役割を担っている。周辺は、山地に囲まれており、東側は結晶片岩からなる佐賀関山地、南側は霊山山地、西側は鶴見岳・由布岳などの第四紀火山列が聳え、その中には二ホンザルの生息地として天然記念物に指定される高崎山が含まれる。別府湾沿岸部に広がる平野部は、東には県内最大河川であり、水流の美しさにおいて日本でも有数に数えられる大野川が、豊肥方面から複数の河岸段丘を形づくりながら流れ込み、西には由布山系を源流に、七瀬川や賀束川といった様々な小河川が合流しながら大分市街地へと流れ来る大分川が、それぞれ別府湾へと繋がっている。大分市は、山地や台地に縁辺部を囲まれ、その中を縦断する二大河川により寸断されたような地形を成している。そして、限られた平地の中で集落がつくれ、それぞれが独自の文化を培い、後の小藩分立体制に象徴されるような風土的土壌が形成される。

現在の市街地中心部付近が位置する大分平野には、大分川・住吉川といった2つの河川が寄り集まるように流れ、中心市街地は大きな三角州状を呈している。大道遺跡群は、三角州の最も南端にあたり、そのすぐ南には上野台地が控える。大道遺跡群の周辺は、自然流路や後背湿地が入り混じっており低湿土壌が広範囲にわたり分布する。特に、大分駅の南東部付近は湿地状の土壌が広がっており、かつては一面にレンコン畑が広がっていたとされ、地形的特性を表している。今回報告対象となる調査地は、安定した黄褐色土が基盤層となっている。但し、調査区域西部にあたる第21・34次地点の北西部では遺構密度が低く、近世期以降の耕作関連の遺構が顕著であり、建物等の施設は皆無な状況であった。JR 大分駅上野の森口付近に位置する第32次調査区、その西側の第29



第2図 調査区周辺地形分類図(『大分市史』上 一部改変)および遺跡分布図(1/60000)

次及び確認調査地点においても溝跡が発見されるのみで、黄褐色土基盤層は薄くなり、変わって灰白色粘質土やシルト質土といった水成堆積の様相を示す土壌が確認されるようになる。これらのことから、第21・28・31・37次調査区付近は、島状に安定地盤が残ったエリアであり、その部分に古墳時代前期～後期の集落、古代の施設がつけられたと推測することができる。

第2節 歴史的環境

大道遺跡群の調査は平成12年度から始まり、平成24年度末までで42地点に及んでいる。これらの発掘調査から、大道遺跡群内には大きく3時期の集落及び官衙的遺跡が展開していることが判明している。本節では、過去の調査成果を振り返りながら、時代ごとに本遺跡の概要について触れることとする。

【縄文時代】

この時期の遺構は確認されていない。遺跡範囲内では、第3・7・10・14・15次調査地点に縄文土器が、新しい時期の遺構及び遺物包含層に混入した状況で出土している。上記地点は大道遺跡群の中央南寄りに位置することから、上野台地裾部に縄文時代の集落が展開していた可能性が考えられる。

縄文土器は鐘崎式・小池原式・北久根山式といった縄文時代後期に該当するものや、阿高式・船元式といった西九州・瀬戸内地域を代表する縄文時代中期に比定される資料が認められる。船元式土器は、近畿・中国・四国を中心に広域に分布するものであり、本遺跡も海岸線に近いという立地状況からその文化圏に含まれていたと推測される。

【弥生時代】

現段階で弥生時代に該当する遺構の発見事例は、第21(34)次・23次・32次・10次・19次調査地点において確認されているが、遺構分布としては希薄な状況である。時期の主体は弥生時代後期～終末段階であり、それ以外の時期に当たる遺構は極めて少ない。

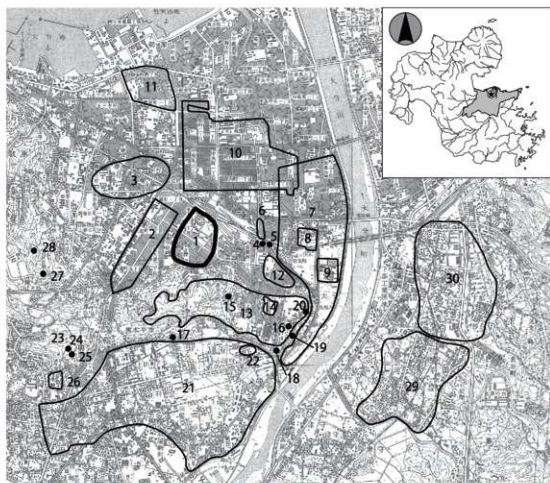
第23次地点では弥生時代後期後葉の井戸跡(23SE011)や廃棄土坑(23SX038)が確認されている。その南側に近接する第21(34)次調査で検出された廃棄土坑からは、弥生時代後期前葉頃に比定される壺・甕等の一括資料が良好な状態で出土している。第10次調査では南北方向に延びる幅約3mの規模を有した溝跡10SD010があり、土層観察から水流痕跡が看取され、水路として機能していたと考えられている。出土遺物から弥生時代後期初め頃と位置づけられている。第22次調査地点では楕円形を呈する土坑から、弥生時代中期初め頃の下城式甕や東北部九州系甕が出土している。本遺跡群内においては最も古い遺構と判断される。その他、第15次・19次地点では新しい時期の遺構に混じって弥生時代中期～後期の土器が認められる。また、遺跡範囲内の南端付近で行った試掘調査からは、湿地状堆積層の中から弥生時代前期に該当すると思われる壺破片が出土している。これらの成果より、弥生時代後期には集落が形成されたことは確実であるが、遺物の出土状況から判断すると、縄文時代同様、上野台地裾部付近には遺跡が存在した可能性が考えられる。

【古墳時代】

古墳時代前期を中心に、大道遺跡群全般で遺構・遺物が確認される。大分県上野の森口(南口)付近に位置する第20・23・32次調査区では、溝跡より古墳時代前期前葉～後葉にかけての古式土器が大量に廃棄された状態で出土している。この溝跡は広範囲に延伸しており、何らかの区画溝と考えられる。大道遺跡群では、溝跡と同様、廃絶に際して古式土器の壺や甕などを一括廃棄した井戸跡や土坑は数多く発見されているが、竪穴建物跡については、第4次調査で2基検出されているのみで、集落と呼べるほどの分布状況は今のところ認められな

い。上記溝跡の北側にあたる大分駅側に展開することが予想されるが、試掘調査成果や低湿土壌が広がっているという地形的要因から、その可能性は低いと判断される。

大道遺跡群では、第 7・24 次調査において古墳時代前期における注目する成果が得られている。第 7 次調査で発見された廃棄土坑 7SK002 からは、完形に近い古式土師器が 100 個体以上一括廃棄された状態で出土している。その中の一部を抽出し付着する炭化物から炭素 14 年代測定を実施したところ、 $1830 \pm 30\text{BP}$ 、 $1815 \pm 25\text{BP}$ という数値が得られ、実年代によると 2 世紀前半～3 世紀中頃に該当することが判明した。土器の特徴から直ちにこの数値を当てはめることはできないが、更なる検討が必要であろう。遺跡群内の南エリアに位置する第 24 次



1	大道遺跡群	11	勢家遺跡	21	古国府遺跡群
2	大道系里跡	12	若宮八幡宮遺跡	22	岩屋寺遺跡
3	東田室遺跡	13	上野遺跡群	23	城南遺跡
4	上野町遺跡	14	上野大友館跡(上原館跡)	24	千人塚古墳
5	願徳寺遺跡	15	上野廟寺	25	弘法六古墳
6	南金池遺跡	16	上野竜王畑遺跡	26	永興遺跡
7	中世大友府内町跡	17	元町石仏	27	古宮古墳
8	大友氏館跡	18	岩屋寺石仏	28	亀甲古墳
9	万寿寺跡	19	包蔵石仏	29	羽田遺跡
10	府内城・城下町跡	20	大匠塚古墳	30	下郡遺跡群

第 3 図 周辺遺跡地図 (1/40000)

調査では、24SE008から布留1式併行期の土器とともに、クスノキ製の白と白蓋が出土している。白は炭素14年代測定より、西暦287±5年に伐採され加工されたとのデータが得られ、相伴した土器も付着する煤の炭素14年代測定より、較正年代AD235—AD390、較正年代AD205—AD400となることが判明した。これらの数値と白のデータと照合すると出土した土器はおおむね4世紀代と捉えることができる。これらの科学分析の成果より、土器の実年代を把握することができたが、数値については型式変化や共存する土器様相等から総合的に判定する必要がある。

古墳時代中期～後期にかけての遺構は類例が少なく、現在のところ第28・31次地点に集中する。それぞれで竪穴建物跡が1基、溝跡などが確認されている。また、古代の大溝（28-1SD030・28-2SD130・31SD025）からは当該時期の須恵器蓋・坏身が散見される。7世紀代のももの含まれていることから第28・31次に集落等が存在し、次代の官衙的遺跡へと繋がっていくものと推測される。

【古代】

この時期は、土器編年に照らし合わせると8世紀末～9世紀前半段階に限定される。第4・5・21・23・28・31次地点で確認される大溝は、規模や形状から判断すると、極めて特異な遺構と考えられ、水流痕跡が認められることから水路としての機能が想定される。また、その直線的な配置は官道の様ともいえる。第23・31次調査では、大溝に沿うようにして、大きく2グループの掘立柱建物跡群が分布する。また、これら建物跡群は大溝の北側に配置されるといった共通性が看取される。第28次地点では、大溝に繋がるように南と北に向かってそれぞれ延びる通路跡もしくは道路状遺構が造られており、遺跡の特徴を示す重要な遺構と言える。

遺跡群の南側の第14～24次地点でも、掘立柱建物跡や井戸跡が点在する。また、第16次地点を中心に同規模の溝跡が並行して延びている状況が見られ、その構造から道路状遺構の可能性が示唆される。各調査地点からは、硯・石帯・瓦・刻書土器・緑釉陶器・越州窯系青磁等の出土が確認され、また、第5次調査では遺構検出時からではあるが奈良三彩も見つかっている。これらの状況より、8世紀末～9世紀前半頃には官衙的遺跡が展開していたことが分かる。しかし、10世紀以降になると全体的に遺跡は希薄となる。

【中世末～】

この段階の遺構は、主として溝跡が検出される。屋敷跡や集落跡といった様相は全く認められず、遺跡群内は耕作地となっていたと思われる。江戸期に入り、府内藩では日根野吉明による初瀬井路が開削され、それにとまない大規模な水田化が進む。確認される溝跡は、この事象に該当するものであろう。

その後は、耕作地としての土地利用が進むが、明治時代になると近代化の余波が少しずつ押し寄せ、岩田製糸工場といった小紡績工場が開かれ、大分駅が開通した後は、大正6年に近代的大工場として片倉製糸工場が建てられるなど、大分の発展の舞台の一つとなる。

今回の報告対象となる調査地点は、以前は駅南グラウンド又はJRグラウンドと呼ばれる野球場であった。敷地内の北西隅（第13・4次北西部）には野球用ネットがあり、第28次地点は内外野に該当し、一部には芝生が張られ、敷地周囲は錆び付いた網が巡らされていた。

このグラウンドは、野球場として使用されていたが行事やイベントが開催される際は、その会場としても活用されていた。その一例として、サーカス会場が挙げられる。大分市では現在も続いているが、定期的にサーカスが開かれていた。その会場は、赤や青・緑といったカラフルな天井をした大きなテント形式であり、ある程度の客席も設けられていた。大道遺跡群第4・5・21・28次調査では、サーカステントを固定するための掘削坑が円弧状に2列確認されていることから、本グラウンド内では2回開催されたことが分かる。その一つが1990年に上演された分に該当すると思われる。第5図にあるように、このサーカスは著名人がスタッフとして構成され、ファッションブルでミュージカル風なスタイルで話題となったようである。現在は、このようなイベントは大分



第4図 平成9年大分駅周辺空中写真



第5図 '90 Kigle NEW サーカスチラシ



第6図 建設中の複合文化交流施設『ホルトホール大分』

市東部の松岡に所在する総合運動広場で主に催されている。このように野球場やイベント場として、ながらく市民に利用された広場は、平成25年7月に竣工予定の複合文化交流施設「ホルトホール大分」としてリニューアルされる。

「ホルトホール大分」は、県都大分市の中心部、100 mシンボルロードの正面に位置する。「人と文化と産業を育み、創造、発信する新都心拠点」を基本理念に、駅南・情報文化新都心の中核的な施設となることをめざし建設中である。ホルトホール大分内部には、1200名収容可能な大ホール、市民図書館、総合社会福祉保健センター、保育所、カフェレストラン、屋上公園といった、文化・教育・福祉等に関する多種多様な施設が配置され、情報・文化の中心として充実した機能を有している。

駅南という地区は100年前に大分駅が開通したことにより必然的に発生した。その頃は、大半が耕地であった地域が、今は、現代的な建物が建ち並びまちへと変わり、大分市の中でも歳月の流れを感じることができる代表的な地域である。これからの100年は、新たに情報文化新都心として、新大分市の中心として22世紀に向かおうとしている。

参考文献

- 大分市教育委員会 2008『大道遺跡群1』大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4
- 大分市教育委員会 2009『大道遺跡群2』大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5
- 大分市教育委員会 2010『大道遺跡群3』大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書6
- 大分市教育委員会 2011『大道遺跡群4』大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7
- 大分市教育委員会 2012『大道遺跡群5』大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書8

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査の概要

今回報告する大道遺跡群第21・28・31・34・36・37次調査は、平成25年7月に竣工予定である複合文化交流施設「ホルトホール大分」建設地地点に該当する、区画整理以前は駅南グラウンドと呼ばれる、野球場やサカス会場等で利用される広場であった。

第28・31・36次調査地では、平成15年度に実施した大道遺跡群第4・5次調査で確認された大溝と呼称される、幅約4～6mの溝跡が引き続き検出された。これらの成果を総合すると長さ約200mに渡って、大溝が構築されていることが判明した。本溝跡は出土遺物から8世紀後半～9世紀前半頃に機能・廃絶したと考えられる。古墳時代の遺構分布については、第28・31次地点において井戸跡・廃棄遺構等が認められている。第20・23・32次地点で確認された推定環濠跡と位置づけられている古墳時代前期の溝跡と近時する時期であることから、集落域が第28・31次地点まで広がっていることが確認された。また、これまで大道遺跡群では事例が少なかった古墳時代後期の遺構・遺物も第28次地点を中心に散見されたことは、注目される所見である。弥生時代の遺構は、第21・34次地点で検出された。第34次調査地は第21次調査段階でネットフェンス等が建っていたため未掘になっていたエリアである。両調査地点を跨るような状況で、弥生時代後期前葉の土器群を一括廃棄した土坑が確認されている。出土した土器群には外来系要素が看取されるものも含まれ、当該時期の良好なセット資料といえる。

調査は、第21次調査が平成18年12月25日～平成19年3月28日、第28次調査が平成20年9月1日～平成21年3月13日、第31次調査は平成21年6月18日～8月31日、第34次・36次・37次調査は平成22年2月1日～3月16日にかけて実施している。

第2節 大道遺跡群第21次調査・第34次調査

(1) はじめに

第21・34次調査は、同一敷地内を、年度を分けて実施したものである。調査では、掘立柱建物跡、溝跡、廃棄遺構及び無数のビット群を検出している。出土遺物から、確認された遺構群は弥生時代後期・古墳時代前期・近世後半期の大きく3期に区分される。

(2) 基本層序

表層で認められる砂利層、客土層を除去すると耕作土層が確認される。耕作土を掘り下げると基盤層である黄灰褐色土が表出する。多くの遺構は基盤層から掘り込まれていることから、調査は黄灰褐色土を検出面として実施した。

(3) 遺構

掘立柱建物跡 (SB)

21SB065 (第10図)

第21次調査区北西部分 O6 グリッドから L7 グリッドで検出した梁行1間、桁行2間の掘立柱建物跡である。主軸方向はN-40°-Eを指向する南北棟である。柱間は梁行3.35～3.48m、桁行2.25～2.4mを測る。柱間総距離は梁行3.48m、桁行4.45mで、身舎面積15.5㎡である。柱穴の掘方は不整形な円形ないしは楕円形を呈し、直径0.2～0.3m、楕円形プランは長径約0.4m、深さは0.2～0.4mを測る。柱穴の基底部の標高は4.4～4.5mで、南東方向に傾斜している。柱穴bから染付碗などの国産磁器の破片が出土しており、近世以降の時期に位置づけられる。



第 8 図 大道遺跡群第 21 次・第 34 次調査遺構配置図 (1/400)



第9図 大道遺跡群第21次調査遺構全体図 (1/400)

溝跡 (SB)

21SD001 (第9図・第11図)

第34次調査の西側 O6 グリッドから第28-1次調査南側中央 G11 グリッドで検出した南北方向に延びる溝跡である。遺構の北端と南端は調査区外に延びるため、全貌は不明である。主軸方向は N-28° -W である。第34次調査から第28次調査に至る全長 91.0m、幅約 1.5 ～ 4.0m、検出面からの深さ約 0.28m を測る。断面形状は緩い逆台形状で、底面には凹凸が認められる。埋土は灰褐色粘質土を基調とし、第5層は灰褐色砂質土である。少なくとも1回以上の掘り返しが行われ、構築当初のプラン内の北側4分の3程度で掘り返されており、溝として機能していた部分の規模は狭くなっている。出土遺物は、第1・2層で国産陶器や国産磁器などが大量に出土している。出土遺物から18世紀中頃から19世紀頃の所産と考えられる。

21SD015 (第9図)

第21次調査区北部 O9 グリッドから F12 グリッドにかけて検出した調査区を斜行する溝跡である。溝跡の両端は調査区に区切られているが、南端は 28-1SD011 と接続すると考えられる。主軸方向は N-14° -W で、ほぼ直線的である。検出長 38.0m、幅 0.2 ～ 0.3m を測る。遺物は、古墳時代の小破片が出土している。本溝跡と同一遺構である 28-1SD011 が 28-1SD005 の延長部分である可能性が高いことから、21SD015 は同時期の古墳時代後期後半頃の所産と考えられる。28-1SD005 や 28-1SD045 などと同様に小区画を形成する溝跡であると考えられる。

21SD030 (第9図・第11図)

第21次調査区中央南側 F6 グリッドから B8 グリッドにかけて検出した。F6 グリッドで 21SD035 に切れられ、南端は調査区外に延びている。ほぼ直線的で、主軸方向は N-27° -W である。検出長約 20.0m、幅約 0.4m、検出面からの深さは 0.14m である。断面形状は段掘り状で、第1層でやや深く掘りこんでいる。埋土は黒褐色土を主体とし、第2層は黄灰褐色砂質土ブロックを含む黒褐色土で人為的に埋積されたと考えられる。出土遺物から弥生時代後期後半頃の所産と考えられる。

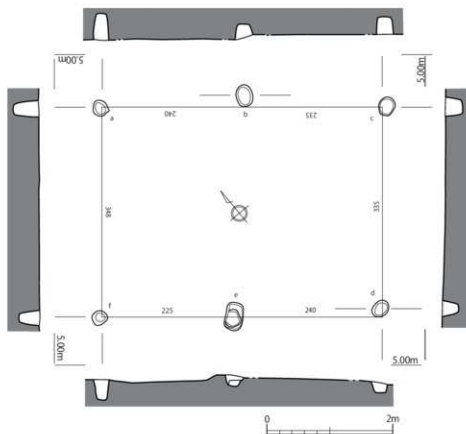
21SD035 (第9図・第11図)

第21次調査区中央南側 F6 グリッドから E11 グリッドにかけて検出した東西方向に延びる溝跡である。21SD030 を切り、東端は調査区に切られている。攪乱などで削平されているが、28-1SD025 の延長部分と考えられる。ほぼ直線的で、主軸方向は N-11° -E である。検出長約 20.0m、幅約 0.4m、深さ 0.14m である。断面形状は逆台形を呈する。褐色を基調とする埋土で、黄褐色土粒を含む。少なくとも1回以上の掘り返しが行われたと考えられる。遺物は古式土師器壺・甕、弥生土器壺・甕破片、ミニチュア土器が出土している。出土遺物と 21SD030 との切り合い関係などから、弥生時代後期後半～古墳時代前期頃の所産と考えられる。

土坑 (SK)

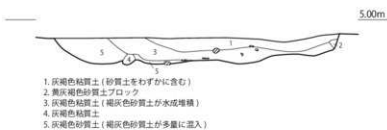
21SK005/34SK005 (第12図)

第21・34次調査区北部 P8 グリッドから P9 グリッドにかけて検出した。北側は調査区に切られている。平面プランは不整形な方形を呈し、長軸約 3.7m、短軸は約 2.5+αm、深さ約 1.5m を測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土第3層はブロック土を含む黒黄褐色土の混土で埋積されており、人為的に埋められたと考えられる。第4・6層は砂質土、第5層は黒褐色泥質土である。少なくとも1回以上の掘り返しが行われたと考えられる。遺物は弥生土器が主体であるが、第3層で中世の土師器破片が出土していることから、最終埋没時期は当該期であると考えられる。



第 10 図 Z15B065 遺構実測図 (1/60)

〈SD001〉



〈SD030〉



〈SD035〉



第 11 図 第 21 次溝跡土層断面実測図 (1/40)

21SK020/34SK020 (第 12 図)

第 21・34 次調査区北部 O9 グリッドで検出した。第 21 次調査で遺構の東側部分を、第 34 次調査で西側部分を検出した。平面プランは円形を呈し、長軸約 2.5m、短軸約 1.86m、深さ 1.78m を測る。断面形状は U 字形を呈する。埋土は単一層で、土器を多量に含むことから一度に埋められたと推定され、廃棄土坑として使用されたものと考えられる。遺物は弥生土器高杯・鉢・壺・甕が出土しており、ほぼ完形の状態であった。また、搬入品と思われる高杯や複合口縁壺なども出土しており、外部地域との交流の状況を示している。出土遺物から、弥生時代後期前葉から中葉頃と考えられる。

21SK040 (第 12 図)

第 21 次調査区中央南西部分 F6 グリッドで検出した。平面プランは不整形な円形を呈し、長軸 1.6m、短軸 1.4m、検出面からの深さは 0.86m である。標高 4.4 m、4.0 m 付近では壁面が挟れている。埋土は、第 2・3 層は褐色粘質土、第 4 層から 7 層は褐色を基調とする砂質土で下位ほど砂質が強い。井戸跡である可能性が考えられる。土層観察から不整合がみられ、少なくとも 2 回の掘り返しが行われたと考えられる。遺物は第 7 層で多く出土する。出土遺物から、弥生時代後期後葉から終末期頃と考えられる。

21SK050 (第 12 図)

第 21 次調査区中央南西部分 G6 グリッドで検出した。平面プランは楕円形を呈する。1 段のテラスをもち、長軸 0.8m、短軸 0.63m、深さ 0.38m を測る。断面形状は、逆台形を呈する。埋土は褐色を基調とする砂質土で埋積されている。遺物は少量であるが、第 1 層から複合口縁壺の口縁部、ほぼ完形の甕などが出土している。出土遺物から、弥生時代後期前葉～中葉頃と考えられる。

(4) 出土遺物

出土遺物の概要

第 21 次調査では、弥生時代から近代までの幅広い時期にわたる遺物がコンテナ 27 箱分が出土している。破片資料が多くを占めるが、その中において一括廃棄遺構である SK020 からは、弥生時代後期前葉～中葉頃の所産とされる土器群が良好な状態で出土している。器種は壺・甕・鉢・高杯で構成され、これら土器は、完存もしくは接合後に完形に近い形状まで復元することができる。当該時期の良好な一括資料と評価される。その他、周辺の調査地点と同様に汽車土瓶の破片が認められる。遺跡の立地する環境が、大分駅の周辺であったことを特徴づける貴重な資料といえる。

以下では、主要な遺構に絞って遺構の時期を示すものや特殊な遺物を中心に掲載・報告を行う。遺物の種類・名称・法量などについては、遺物観察表(表 16・17 参照)にて報告している。また全遺構の出土遺物については、遺構一覧表(表 2・3 参照)に主なものについて掲載している。ここでは、特に重要と思われる遺物についてのみ述べる。

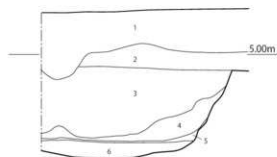
21SK020 出土遺物 (第 13 図～第 17 図)

高杯 (第 13 図 4・5)

4 は、外来系要素をもった高杯で、重量感がある。浅い皿状を呈す坏部から、短く直線的に外反して口縁部へと移行する。口縁部は平坦であるが、中央部分がやや窪む。脚部は全体的に器壁が厚い。裾端部は強いナデの影響が沈線が形成され、そのため短く上下へ突出する。裾端部の側面にも 1 条の沈線が認められる。最終調整として全体にミガキが施される。坏部内面は中心から放射状に、坏部外面は円弧をおよそ 8 分割して横方向に、脚部は縦方向に螺旋状のミガキが施されている。穿孔は 5 箇所あり、外側から内側に向かってあけられている。また、

〈SK005〉

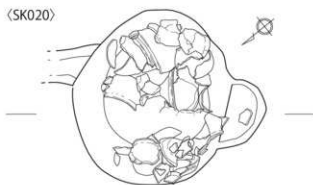
6.00m



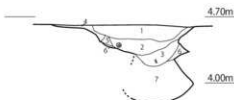
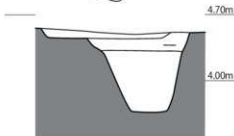
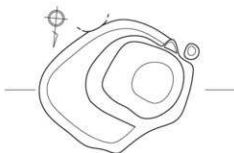
1. 表土 (石灰カス)
2. 灰青褐色粘質土 (鉄分沈着)
3. 黒黄褐色土
4. 黄褐色土ブロック・淡灰褐色砂質土・黄灰褐色ブロックの混土層
5. 淡灰白褐色砂質土
6. 淡灰白褐色砂質土と黄灰褐色ブロックと黒褐色ブロックの混土層

7. 黒褐色泥質土 (わずかに黄灰褐色土混入)
8. 淡灰褐色砂質土 (わずかに黄灰褐色土・黒褐色土混入)

〈SK020〉



〈SK040〉



1. 淡茶褐色土 (砂質土多量混入)
2. 灰褐色粘質土
3. 灰褐色粘質土 (黄灰褐色砂質土少量混入)
4. 茶黄褐色砂質土 (淡茶褐色土と淡灰褐色砂質土の混土層)
5. 黒褐色土 (淡灰褐色土粒多量混入)
6. 灰褐色粘質土 (砂質強い)
7. 淡灰褐色砂質土

〈SK050〉



1. 淡茶褐色土 (淡灰褐色砂質土わずかに混入)
2. 淡灰褐色砂質土

第12図 第21次土坑遺構実測図 (1/40)

剥落しているものの外面には赤色塗彩が行われていたと判断される。5 は在地系の高杯の坏部である。坏部底面から、ラッパ状に口縁部が外反しながら開く。

台付鉢 (第 13 図 8・9)

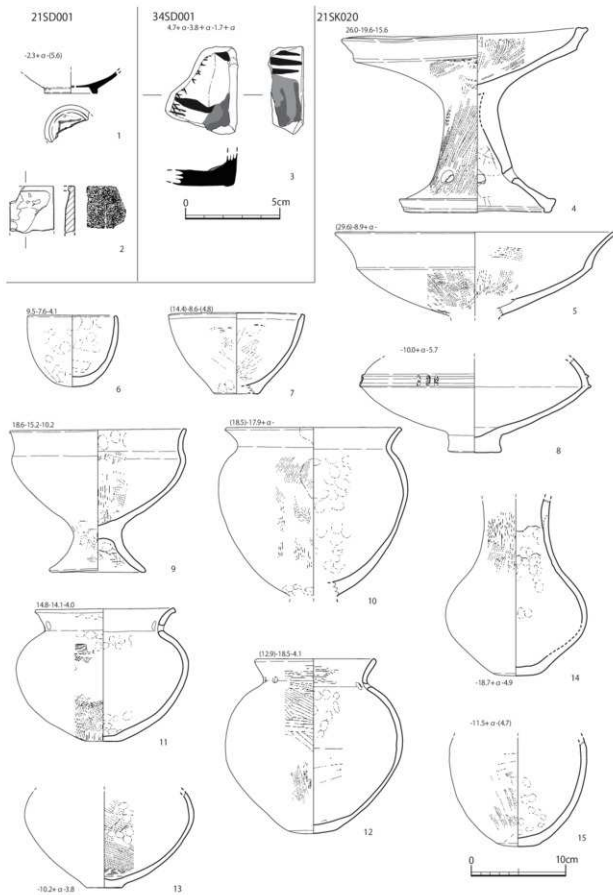
8 はしっかりとした厚手の平底に浅い皿状の胴部を持つ。胴部中位は強く張り出し、外面は 2 条の細い突帯で区画した中に、3 個を 1 単位とした草鞋状の浮文が現状で 5 箇所確認される。胎土は石英が少量含まれているが、全体に混和材は少なく精製土を使用している。器面は大部分が磨耗しているが、残存部の一部から丁寧なミガキで仕上げられていることがわかる。一部において被熱痕が看取される。胴部の残存具合から、蓋の可能性も考えられる。9 は口縁部が頸部からやや内側に屈曲して、外方へと反った形状で立ち上がる。内面には底部から縦方向に放射状にハケ目が施される。外面は磨耗しており調整は不明瞭であるが、部分的な痕跡から丁寧なナデを確認することができる。

壺 (第 13 図 10～15・第 14 図・第 15 図)

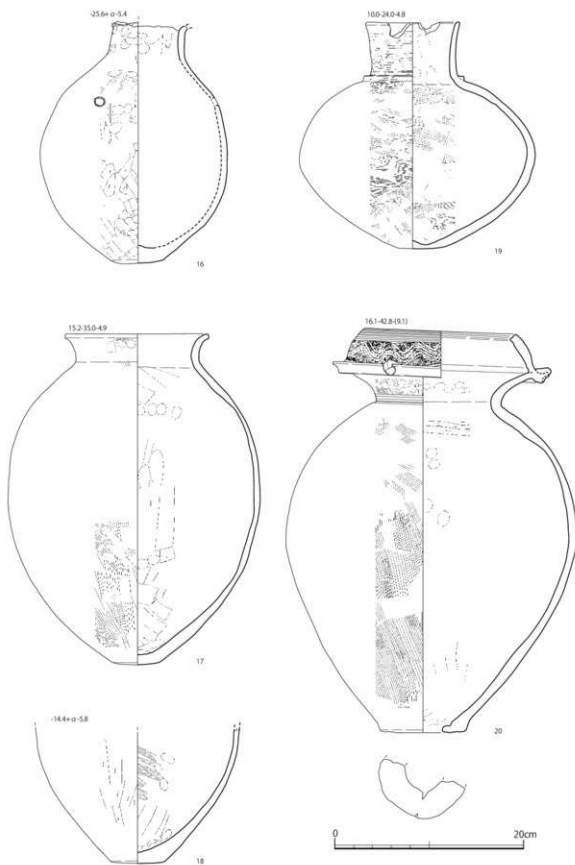
10～13 は短頸壺で、全て体部中位が強く張り出す形状をしている。11、12 は頸部に 2 箇所ずつの穿孔が認められる。11 は、外面をミガキで仕上げた後に赤色塗彩が施される。12 は完存資料である。全体的に丁寧な作りである。底部は凸レンズ気味の平底を呈する。14 は長頸壺、16～18 は素口縁壺、20～22 は複合口縁壺である。14 は体部中位が張り出し、緩やかに長く伸びる頸部へと移行する。頸部外面には細かく縦方向のミガキが施される。16 はやや下膨れの体部から直線的に短く伸びる頸部、口縁部へといたる。口縁端部には打ち欠きが、体部上位には外面から丁寧に穿孔が施されている。体部中位から下位にかけては斜め方向を基調とする細かいヘラケズリを行った後、最終調整のナデにより全体的に丸みをもった器形をなしている。17 は体部中位が強く張り出し、直立する口縁部を有す。口縁端部には対面するように小さい穿孔が認められる。体部と頸部の境には断面三角形の突帯が貼り付けられる。外面は全面ミガキで仕上げられ、赤色塗彩が施される。20 は口縁部外面には多重沈線と波状文が刻まれる。複合部分には浮文状の小形の粘土塊が 2 箇所認められ、あわせて鐙状の突出部も確認できる。口縁端部上面と頸部と体部の境にも沈線が施される。最終的に丁寧なナデで仕上げられている。胴部中位に最大径を有すことから、張り出したような形状になる。底部は内面にユビオサエ痕が顕著に残る。しっかりとした平底で中心部分に穿孔が行われる。21・22 は安国寺式の壺である。21 は倒卵形の胴部を呈し、底部は平底である。肩部には 2 条の断面三角突帯が巡り、勾玉状の浮文が貼り付けられている。また、胴部中位には 3 条の断面三角突帯が認められる。口縁部側面には 2 単位の波状文の上から 1 条の波状文を重ねるように施している。実測図中には表現されていないが、胴部中央部を大きく破砕している。また、内面は被熱のため表面が痘痕状の剥離が顕著に見られる。22 も 21 と同様の特徴を示すが、胴部の最大径が上位から下位にかけて認められることから、やや楕円形状を呈している。底部は平底である。口縁側面には、2 単位の波状文が刻まれる。器表面にはクレータ状の、内面には痘痕状の剥離痕跡が数多く認められる。胴部中央付近は大きく打ち割られている。

甕 (第 16 図・第 17 図)

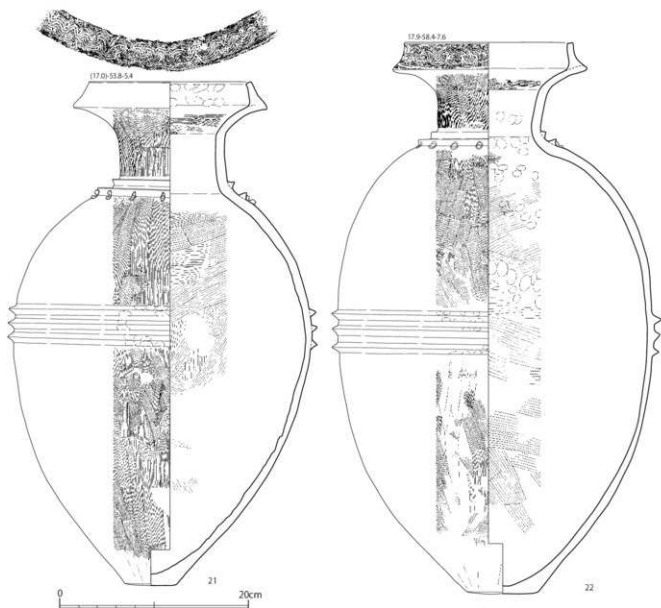
甕は器高から大きく小・中・大の 3 タイプに区分できる。23～26 は器高 20 cm 前後の小タイプ群である。全て口縁部はく字に外反するが、25 は他と比べ口縁部がやや長く、ラッパ状に開き、端部は鋭角である。また、胴部の形態は上位がやや張り気味である。24 は胴部と口縁部の境にユビオサエの影響による段を残す。底部はそれぞれ上げ底状である。27～30 は器高 30 cm 前後の中タイプの一群である。小タイプと同様口縁部は全てく字口縁である。また、底部においては 27～29 は上げ底状、30 はしっかりとした平底である。27 と 28 は全体形状から比較すると底部は小さい。31、32、33 は器高 40 cm 前後の大タイプである。底部は上げ底状で、全体形状から比べると小形である。31 は内面に縦方向のヘラケズリが行われている。33 は胴部中位に最大径を有し、小形の上げ底状を呈す底部に向かって窄まっていく形状をしている。短く直立する頸部から緩く外反する口縁部へと移行する。



第13図 21SD001-SK020 遺物実測図1 (1/4 3のみ1/2)



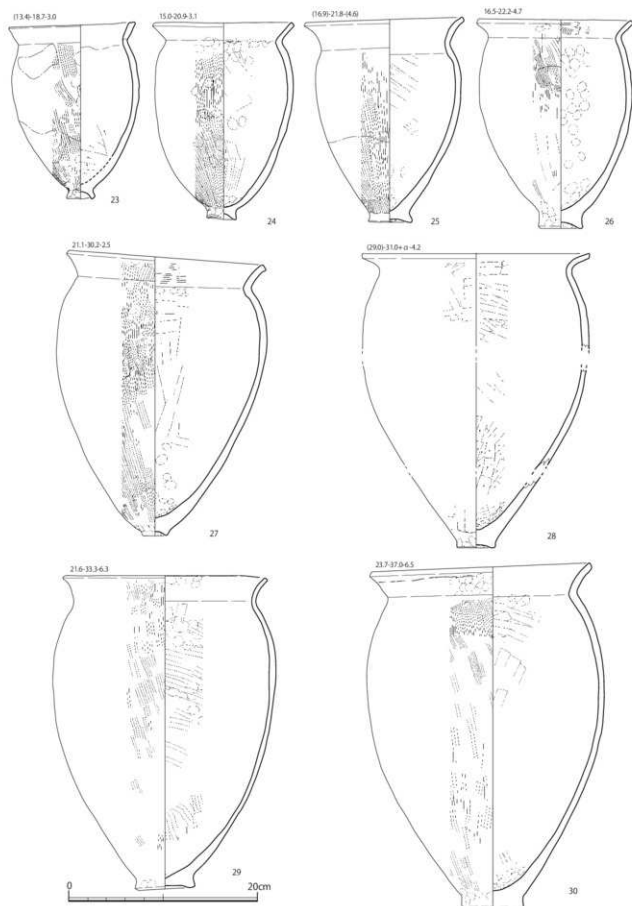
第14図 21SK020 遺物実測図2 (1/4)



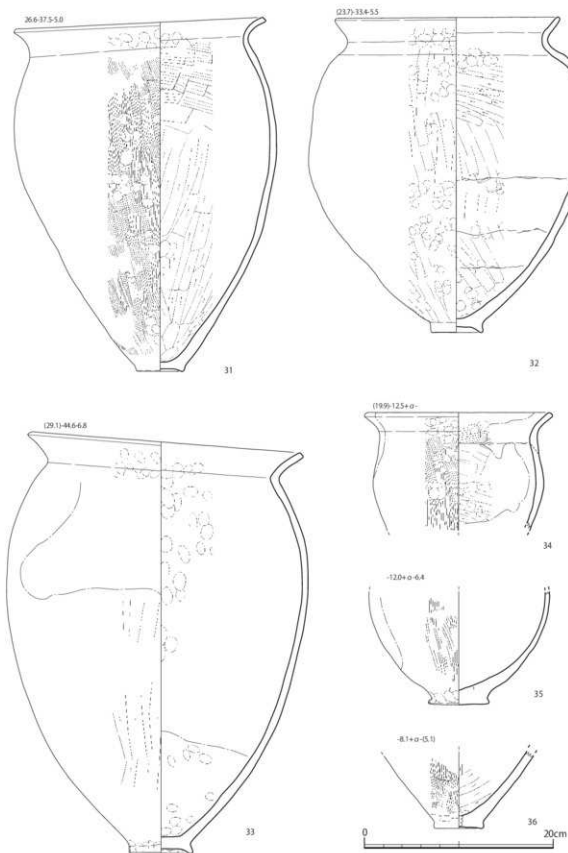
第 15 図 21SK020 遺物実測図 3 (1/4)

土器群の時期であるが、甕については胴部上位が張る形状が目立ち、底部は胴部の大きさに比して小形の上げ底のタイプを主体とする。土器の諸特徴から弥生時代中期末からの名残を残していると判断される。但し、第 16 図 23・24・26・30 のような口縁部の屈曲が緩く、胴部中位の径が大きくなるといった新しい様相を示すものも散見される。甕については、21・22 は複合口縁部と櫛描波状文のセット関係を示し、頸部周辺には浮文と突帯の貼り付けが目立つといった特徴が認められる。また、全般に安定した平底であるが、16・18 はやや凸レンズ状を呈している。甕と壺の特徴を比較すると甕の方が古い段階の特徴を残しており、壺は底部形状等に新出の要素を認めることができるといった特色が窺える。

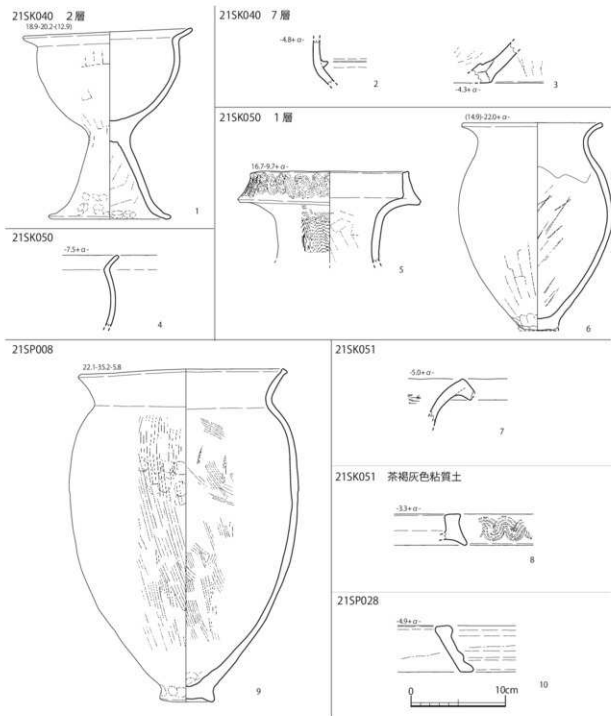
これらの土器群に類似する資料として、下部遺跡群第 120 次調査 SD1200 出土土器群が挙げられる。これらは弥生時代後期前葉～中葉頃として位置づけられており、本資料についてもおおむね同じ時期の所産であると考えられる。



第 16 図 21SK020 遺物実測図 4 (1/4)



第 17 図 21SK020 遺物実測図 5 (1/4)



第 18 図 第 21 次土坑・柱穴遺構遺物実測図 (1/4)

21SK050 出土遺物 (第 18 図)

5 は弥生土器複合口縁壺の頸部から口縁部の破片である。形状や施文等から 21SK020 出土遺物と同時期の所産のものである。

第2表 大道遺跡群第21次調査遺構台帳1

S番号	遺構番号	種別	出土遺物	新旧関係	時期	地区番
1	SD001	溝状遺構	肥前染付碗・唐津甕 関西系陶器(墨書) 汽車土瓶 石硯 京都系土師器		近現代	E12
2		大型土坑	肥前染付碗・小杯・仏飯具 陶胎染付碗	2→77	18世紀代～	L9
3		ピット	土師器破片			O8
4		ピット	土師器破片			O8
5	SK005	土坑	弥生土器甕・鉢・複合口縁壺 土師器坏・坏底部(中世)		中世?	P8
6		ピット	古式土師器破片			N9
7		土坑	土師器鉢×甕			N9
8	SP008	ピット	弥生土器甕		弥生時代後期 前期	N9
9		ピット	土師器破片	9→攪乱		N9
10		土坑	土師器破片			N8
11		ピット		11→攪乱		M9
12		ピット				M9
13		土坑				N9
14		土坑	須惠器坏a	15→14	古代?	K10
15	SD015	溝状遺構	土師器高坏・甕 ミニチュア土器鉢		古墳時代後期 後半頃	O10
16			土師器坏a 弥生土器甕・壺・高坏			不明
17			弥生土器甕・壺・高坏		弥生時代	不明
18		ピット	土師器破片			C7
19		ピット	ガラス破片			C7
20	SK020	井戸×土坑	弥生土器甕・外束系高坏・短頸壺	20→不明遺構(溝?)	弥生時代後期 前期	O7
21		ピット	土器破片			C7
22		ピット	弥生土器破片			D6
23		ピット	弥生土器破片			E7
24		ピット	土器破片	35→24		E8
25		溝状遺構	弥生土器甕・壺			B8
26		ピット				F9
27		ピット	土器破片			F9
28	SP028	ピット	土器破片(器種不明)			F9
29		ピット	土器破片			F9
30	SD030	溝状遺構	弥生土器甕・壺	30→35	弥生時代後期 後半頃	B8
31		ピット	古式土師器高坏			G10
32		ピット	土器破片			G9
33		ピット	弥生土器破片			G8
34		ピット	弥生土器高坏			G8
35	SD035	溝状遺構	古式土師器壺 ミニチュア土器鉢	35→24,71	～古墳時代前期	F7
36		ピット	土器破片			G5
37		ピット	弥生土器破片			D6
38		ピット	土器破片			D6
39		ピット	弥生土器破片			D6
40	SK040	土坑	古式土師器甕・壺・脚付鉢 弥生土器甕×壺底(平)		古墳時代前期	F5
41		土坑	弥生土器破片			D6
42		土坑	弥生土器破片			E6
43		ピット	弥生土器壺頸部 国産陶器皿(混入)			F8
44		土坑				F4
45		土坑	弥生土器甕底(平)・鉢		弥生時代後期	F5
46		土坑				E5
47		土坑	弥生土器破片			E5
48		溝状遺構?	国産陶器甕 弥生土器壺・甕			F8

第3表 大道遺跡群第21次調査遺構台帳2

S番号	遺構番号	種別	出土遺物	新旧関係	時期	地区番
49		溝状遺構?	弥生土器壺・壺	49→35		D8
50	SK050	土坑	弥生土器鉢 複合口縁壺 高坏脚		弥生時代後期 後葉	G6
51	SK051	土坑	肥前染付碗 土師器坏c 弥生土器壺口(安国寺祖 型?)		古代?	F6
52		土坑	弥生土器破片			E4
53		土坑	土器破片			E4
54		土坑	古式土師器壺			E5
55		ビット	古式土師器高坏脚			K13
56		ビット	弥生土器破片			F5
57		ビット	土器破片			E5
58		土坑				E6
59		土坑				E6
60		ビット	弥生土器壺頸部			K13
61		ビット	土器破片			G7
62		ビット	土師器破片			C8
63		ビット	土器破片			N8
64		ビット	土器破片			O10
65	SB065	掘立柱建物跡	土器破片		近世	K6
66		ビット				N9
67		土坑?	弥生土器破片			G9
68		ビット	弥生土器高坏			G8
69		ビット	弥生土器破片	69→33		G8
70		ビット?	弥生土器破片			F9
71		ビット	弥生土器破片	35→71		E9
72		ビット	土器破片			F10
73		ビット	土器破片			G10
74		ビット	土器破片			E10
75		土坑?	肥前染付破片		近世	N11
76		ビット	土器破片	76→攪乱?		M9
77		土坑	肥前染付破片			L9
78		土坑	肥前染付皿 関西系陶器破片	78→2	近世	L8
79		ビット	弥生土器破片	79→15		L10
80		ビット	弥生土器破片			不明
81		ビット	土器破片			L11
82		ビット?	古式土師器壺			L11
83		ビット	弥生土器破片			L11
84		ビット	土器破片			L12
85		ビット	土器破片			L10
86		ビット	土器破片			L9
87		ビット	弥生土器破片			L9
88		ビット	土師器破片			K9
89		ビット	古式土師器破片			K9
90		ビット	土師器破片			K9
91			土師器破片			K12
92		ビット	弥生土器壺破片			K13
93		ビット	土器破片			K11
94		ビット	壺破片			K11
95		ビット	土師器破片(古墳)			K10
96		ビット	土器破片			L10
97		ビット	土師器高坏口縁部			L10
98		ビット	弥生土器壺			不明

第4表 大道遺跡群第21次調査遺構台帳3

S番号	遺構番号	種別	出土遺物	新旧関係	時期	地区番
99		ビット				J9
100		ビット	弥生土器破片			K5
101		ビット	土器破片			J5
102		ビット	古式土師器壺			J6
103		ビット	弥生土器壺			K7
104		ビット	土器破片			J6
105		ビット	土師器壺			J6
106		ビット	土師器高坏			J6
107		ビット	弥生土器破片			J6
108		ビット	古式土師器小型丸底壺			H6
109		ビット	土器破片			J8
110		ビット	国産陶器破片		近世	J8
111		ビット	土器破片			H7
112		土坑	土器破片			H4
113		ビット	土器破片	114→113		G5
114		土坑	弥生土器破片	114→113		H5
115		ビット	弥生土器破片			E4
116		ビット	弥生土器破片			F5
117		土坑	古式土師器壺			E6
118		土坑×ビット	弥生土器			E6
119		ビット	弥生土器			E6
120			弥生土器			不明
121		土坑	土師器壺・鉢			G11
122		ビット	土器破片			D8
123		土坑	汽車土瓶 肥前磁器小坏		近代	F9
124		ビット	古式土師器壺			K14
125		ビット				J13
126		ビット	古式土師器壺			J13
127		ビット	青磁碗破片(中国?)			K7
128		ビット	肥前染付碗 国産磁器水滴×玩具		近世	K7
129		ビット	土器破片			K7
130		ビット	弥生土器破片			G8
131		ビット	土器破片			G8
132						不明
133		土坑	古式土師器壺			G7
134		ビット?	土器破片			D10

第5表 大道遺跡群第34次調査遺構台帳

S番号	遺構番号	種別	出土遺物	新旧関係	時期	地区番
1	SD001	溝状遺構	国産陶器向付(職部)・灯火具(備前)・関西系皿・肥前焼 反碗 いぶし瓦	1→カクラン	近現代	O7
2						
3		ビット	土器破片			O10
4		ビット	弥生土器甕破片			O10
5		土坑(21次)	土師器(古墳)破片	15→5		P9
6		ビット	土師器壺口縁部			O10
7		ビット	破片			O10
8		ビット	土器片			P7
9		ビット	高坏部破片			M6
10		土坑	破片	10→14		J4
11		溝状遺構				L4
12		ビット				K3
13		溝状遺構	破片			K4
14		土坑	国産陶器陶胎染付破片 弥生土器壺口	10→14		J3
15	SD015	溝状遺構(21次)	土師器甕片	15→5	古墳時代?	J10
16		ビット				F2
17		土坑		17→カクラン		M6
18						
19						
20	SK020	井戸×土坑(21次)	弥生土器壺・壺		弥生時代後期 前期	O8

第 3 節 大道遺跡群第 28 次調査

(1) はじめに

第 28 次調査は、旧駅南グラウンド敷地内を調査地点とする。調査では、掘立柱建物跡・竪穴建物跡・井戸跡・溝跡・廃棄遺構を検出しており、調査区北側及び南側に大きく遺構分布が分かれる。大溝 SD030 (SD130) の周辺からは、道路状又は通路状遺構が想定される連続土坑や波板状凹凸面が確認されており、大溝との関係及び性格を検討する上で留意する必要がある。

調査区中央～西側にかけて長方形土坑群が 2 列、円弧状に配置している。これは調査地が以前広場として利用されていた際サーカスが開催されており、その会場テントの基礎跡になるものである。第 21 次調査地でも同様な状況が看取され、総合すると会場テントは直径約 70 m の規模を有していたことが分かる。

調査は、土置き場を確保するため反転手法で実施し、便宜的に反転前を第 28-1 次、反転後を第 28-2 次として行っている。そのため、同一遺構で遺構番号が 2 つに分かれているものがあるが、報告では併記している。

(2) 基本層序

調査区は、表層から約 0.5 m にかけて表土や石炭ガラ、客土層があり、それらを除去すると近代～近世にかけての所産と推測される耕作土層を認めることができる。耕作土層を掘り除くと基盤層である黄灰褐色シルト層が現れ、調査はこの黄灰褐色シルト層を遺構検出面として実施した。検出面標高は約 5.0 m であり、表土から 0.7 m 下位で遺構が確認される。

(3) 遺構

掘立柱建物跡 (SB)

28-1SB055 (第 21 図)

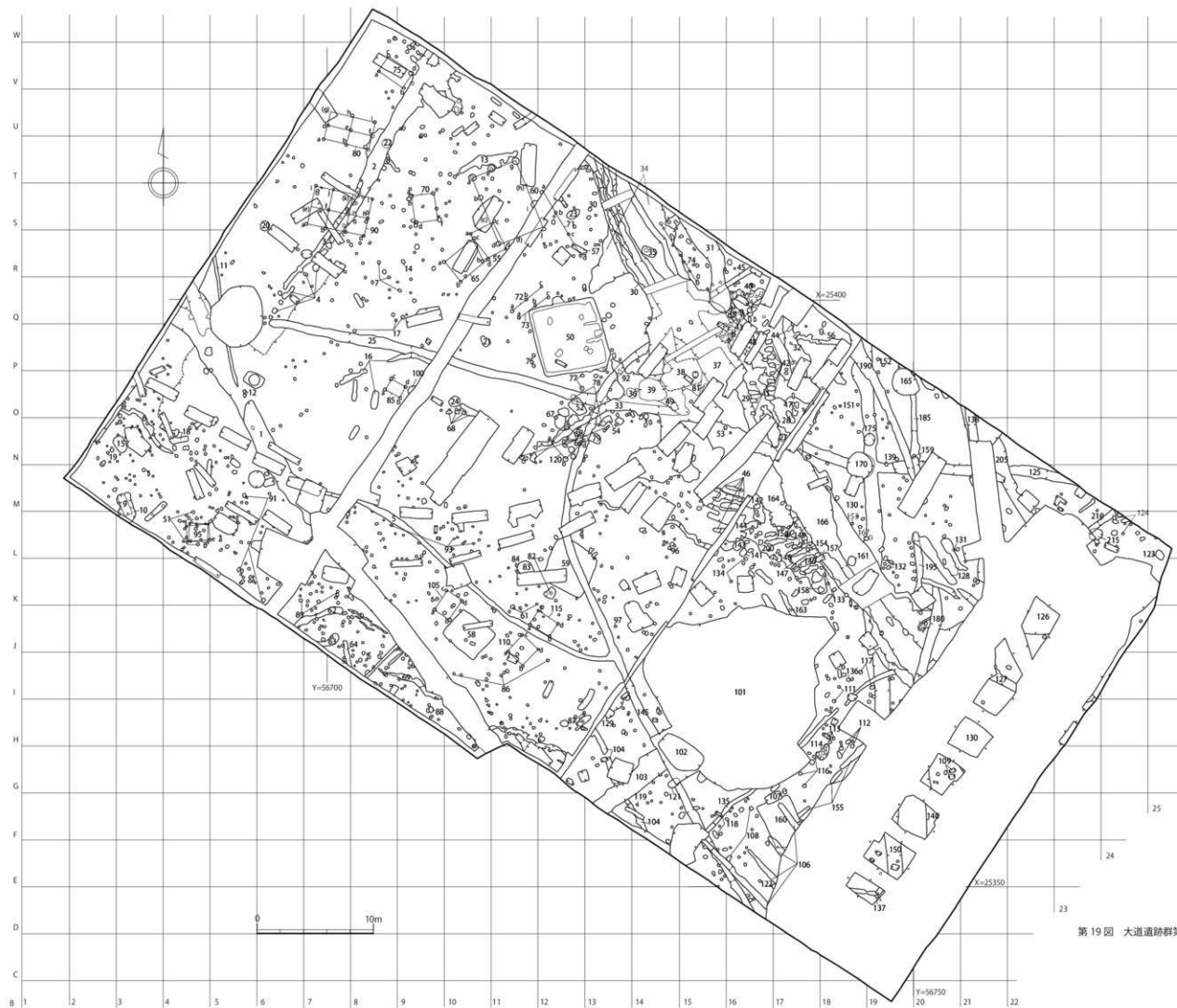
第 28-1 次調査区北東部分 R10 グリッドで検出した 1 間×1 間の掘立柱建物跡である。28-1SB065 と南側が重なって検出した。柱穴 55 c はサーカステント基礎に切られている。主軸方向は N-26° -W である。柱間は東西間 2.25 ～ 2.35 m、南北間 2.5 ～ 2.6 m を測る。柱穴の掘方は不整形な円形ないしは楕円形を呈し、直径 0.2 ～ 0.3 m、深さは 0.15 ～ 0.3 m を測る。柱穴から遺物は出土していない。柱穴の配置状況から竪穴建物の主柱穴の可能性が高い。

28-1SB060 (第 21 図)

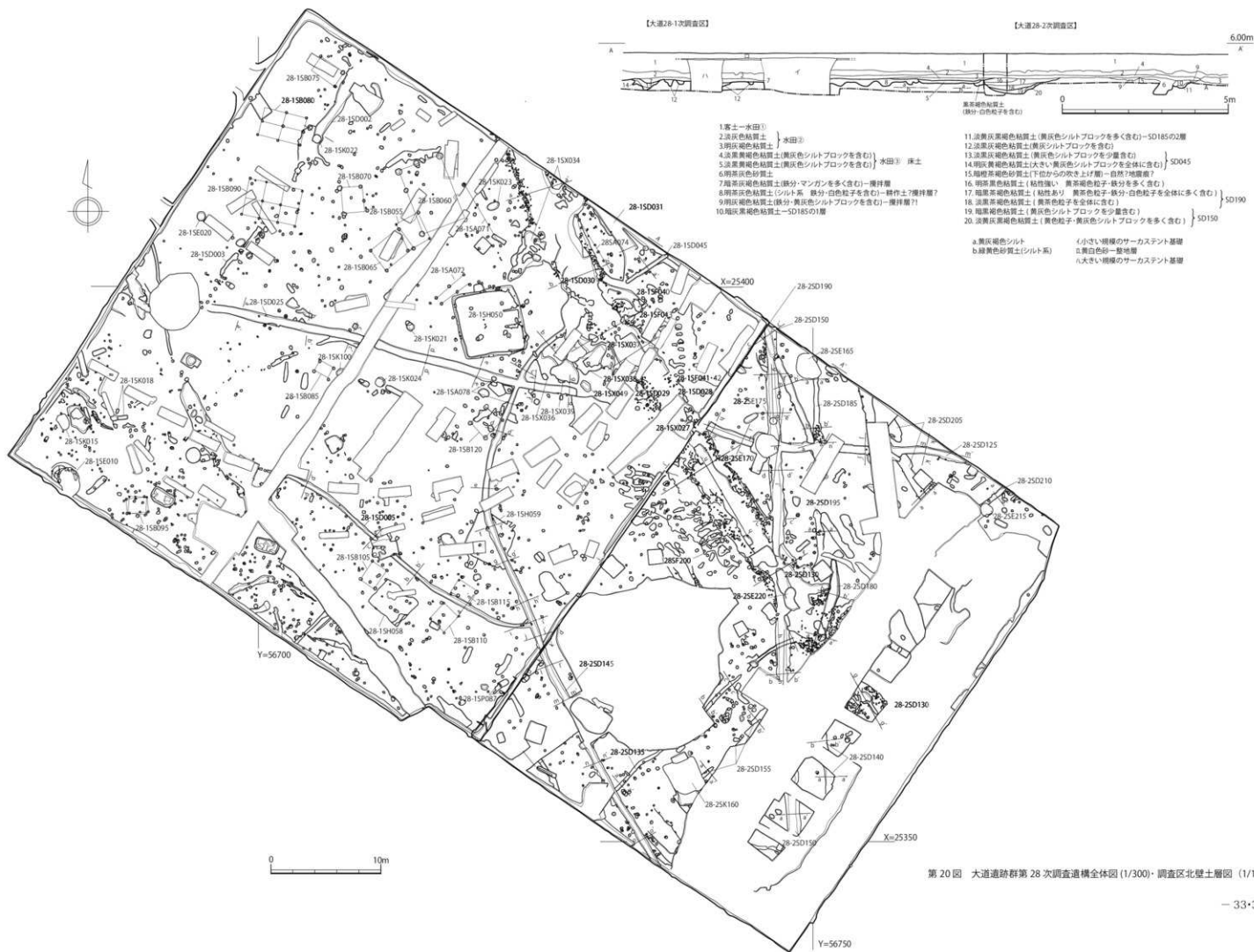
第 28-1 次調査区北東部分 S11 グリッドで検出した梁行 2 間、桁行 3 間の掘立柱建物跡で主軸方向は N-20° -W の南北棟である。柱穴 60 c・f・h は攪乱に削平されており確認できていない。柱間は梁行 1.74 ～ 2.15 m、桁行は西側柱穴 60 a・b 間 1.8 m、東側柱穴 i・j 間 2.2 m を測る。柱間総距離は梁行 4.15 m、桁行 6.2 m で、身舎面積は 25.7 m² である。柱穴掘方は不整形な円形ないしは楕円形を呈し、直径 0.45 ～ 0.6 m、深さ 0.15 ～ 0.4 m を測る。深さが浅いことから柱穴の基底部がわずかに残存したものと考えられ、上部はかなりの削平を受けているものと考えられる。建物は 28-1SD030 に併行しており、関連する建物跡と考えられる。柱穴 60 b・d・e・g から遺物が出土しているが小破片である。第 5 次調査や第 23 次調査で検出した建物跡の主軸方向ともほぼ同じくしていることから、古代の同時期に機能していたと考えられる。

28-1SB065 (第 21 図)

第 28-1 次調査区中央北東部 R10 グリッドで検出した 1 間×1 間の掘立柱建物跡である。主軸方向は N-37° -W である。柱間は南北間 2.2 ～ 2.32 m、東西間 3.16 m を測る。柱穴の掘方は円形を呈し、直径約 0.3 m、深さ 0.3



第19図 大道遺跡群第28次調査遺構配置図 (1/300)



～0.35mを測る。柱穴 65 c から古式土師器の小破片が出土している。柱穴の配置状況から竪穴建物の主柱穴の可能性が高い。

28-1S8070 (第 22 図)

第 28-1 次調査区北東部分 S9 グリッドで検出した 1 間×1 間の掘立柱建物跡である。主軸方向は N-10° -W である。柱間は東西間 1.89～2.13m、南北間 2.2～2.33m を測る。柱穴の掘方は不整形な円形ないしは楕円形を呈し、直径 0.3～0.5m、深さ 0.35～0.45m を測る。柱穴 70 a・b・c から古式土師器の小破片が出土している。柱穴の配置状況から竪穴建物の主柱穴の可能性が高い。

28-1S8075 (第 22 図)

第 28-1 次調査区北部 V8 グリッドで検出した 1 間×1 間の掘立柱建物跡である。主軸方向は N-36° -W である。柱間は南北間 1.45～1.51m、東西間 2.45～2.6m を測る。柱穴の掘方は不整形な円形ないしは楕円形を呈し、直径 0.2～0.35m、深さ 0.08～0.25m を測る。柱穴から遺物は出していない。柱穴の配置状況から竪穴建物の主柱穴の可能性が高い。

28-1S8080 (第 23 図)

第 28-1 次調査区北部 U7 グリッドで検出した梁行 2 間、桁行 2 間の総柱建物跡である。柱穴 80 g は攪乱に削平され消失している。主軸方向 N-15° -E を指向する東西棟である。柱間は梁行 1.25～1.3m、桁行 1.84～2.04m を測る。柱間総距離は梁行 2.51m、桁行 3.88m を測り、桁行の東側の柱間間隔は西側より少し広くなっている。身舎面積は 9.7 m² である。柱穴の掘方は不整形な円形を呈し、直径約 0.25m、深さ 0.1～0.3m を測る。柱穴の掘方が極端に小さく、後述する 28-1S8090 とあわせて中世段階の建物跡と考えられる。

28-1S8085 (第 23 図)

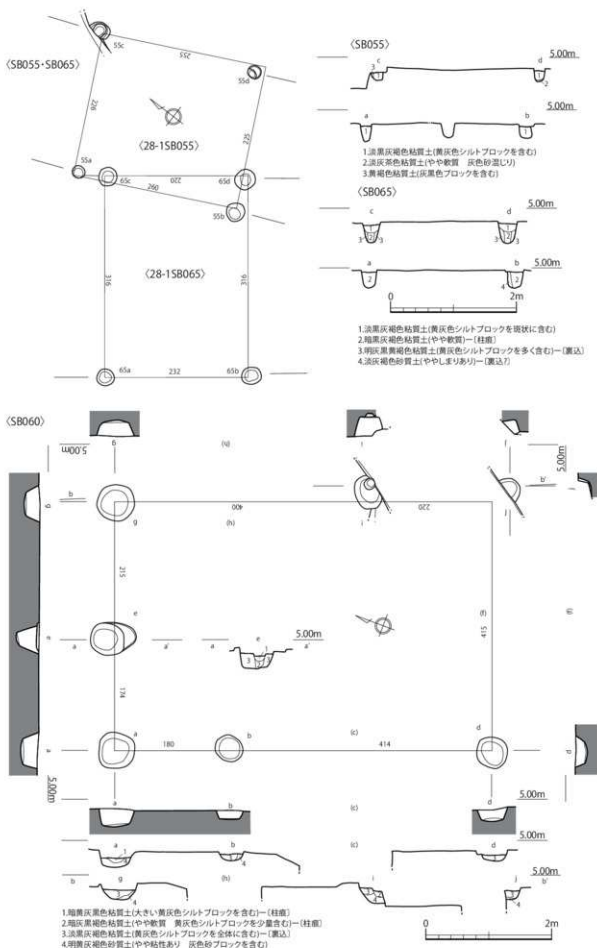
第 28-1 次調査区中央東側 O9 グリッドで検出した 1 間×1 間の掘立柱建物跡である。主軸方向は N-28° -E である。柱間は南北間 1.08～1.14m、東西間 1.38～1.45m を測る。柱穴の掘方は不整形な楕円形ないしは隅丸方形形状を呈する。長径約 0.3m、深さ約 0.3～0.4m を測る。柱穴の配置状況から竪穴建物の主柱穴の可能性が高く、東側の 28-1S100 は建物の付属施設である可能性が高いと考えられる。

28-1S8090 (第 24 図)

第 28-1 次調査区北東部 S7 グリッドで検出した梁行 2 間、桁行 3 間の掘立柱建物跡である。柱穴 90 e・k は攪乱によって削平されており確認できていない。主軸方向 N-14° -E の東西棟である。柱間間隔は梁行 1.54～1.73 m、桁行 1.47～1.73 m を測り、柱間総距離は梁行 3.31m、桁行 4.91m を測る。身舎面積は 16.3 m² である。柱穴の掘方は不整形な円形ないしは楕円形を呈し、直径 0.2～0.25m、深さ 0.2～0.35m を測る。28-1S8080 とほぼ同じ方位を示し、同一時期の建物の可能性が考えられる。

28-1S8095 (第 24 図)

第 28-1 次調査区南東部分 L4 グリッドで検出した 1 間×1 間の掘立柱建物跡である。主軸方向は柱穴 95abcd で N-3° -E、柱穴 95aedf で N-5° -W である。柱穴 95 a・d は重複している。柱間は東西間 1.56～1.86m、南北間 1.32～0.55m を測る。柱穴の掘方は、柱穴 95 b は楕円形それ以外は円形を呈し、長径 0.18～0.21m、深さ 0.15～0.25m を測る。柱穴の配置状況から竪穴建物の主柱穴の可能性が高く、重複する各柱穴は建て替えにともなうものと考えられる。



第 21 図 第 28 次掘立柱建物跡遺構実測図 1 (1/60)

28-1SB105 (第 25 図)

第 28-1 次調査区中央南寄り J10 グリッドで検出した 1 間 × 1 間の掘立柱建物跡である。主軸方向は N-35°-E である。柱間は南北間 1.95m、東西間 1.52 ～ 1.56m を測る。柱穴の掘方は不整形な円形を呈し、直径 0.25 ～ 0.3m、深さ 0.3 ～ 0.5m を測る。柱穴の配置状況から竪穴建物の主柱穴の可能性が高い。

28-1SB110 (第 25 図)

第 28-1 次調査区南部 J11 グリッドで検出した 1 間 × 1 間の掘立柱建物跡である。主軸方向は N-40°-E である。柱間は南北間 1.88 ～ 2.0m、東西間 1.81m を測る。柱穴の掘方は不整形な円形を呈し、直径 0.18 ～ 0.22m、深さ 0.15 ～ 0.35m を測る。柱穴の配置状況から竪穴建物の主柱穴の可能性が高い。

28-1SB115 (第 25 図)

第 28-1 次調査区南部 J12 グリッドで検出した 1 間 × 1 間の掘立柱建物跡である。柱穴 115 a は 28-1SD045 によって南側の一部が切られている。主軸方向は N-34°-E である。柱間は南北間 1.27 ～ 1.93 m、東西間 1.78 ～ 1.93m を測る。柱穴の掘方は不整形な円形ないしは楕円形を呈し、長径 0.2 ～ 0.35m、深さ 0.15 ～ 0.3m を測る。柱穴の配置状況から竪穴建物の主柱穴の可能性が高い。

28-1SB120 (第 25 図)

第 28-1 次調査区中央東寄り M12 グリッドで検出した 1 間 × 1 間の掘立柱建物跡である。主軸方向は N-45°-E である。柱間は南北間 1.94 ～ 2.2m、東西間 1.8 ～ 1.85m を測る。柱穴の掘方は不整形な円形、楕円形及び隅丸形状を呈する。長軸 0.28 ～ 0.4m、深さ 0.25 ～ 0.5m を測る。柱穴からは古式土師器皿が出土している。柱穴の配置状況から竪穴建物の主柱穴の可能性が高い。

柵跡 (SA)**28-1SA071 (第 26 図)**

第 28-1 次調査区北部 S11 グリッドから R12 グリッドにかけて検出した。柱穴 4 基からなる南北方向の柵状遺構で、柱穴 71 a は覆土により一部削平されている。主軸方向は N-30°-W である。全長 6.4m を測り、柱間は北側から 2.15m、2.07 m、2.17 m を測る。柱穴の掘方は不整形な円形ないしは楕円形を呈し、直径 0.2 ～ 0.35m、深さ 0.23 ～ 0.30m を測る。遺物は出土していない。

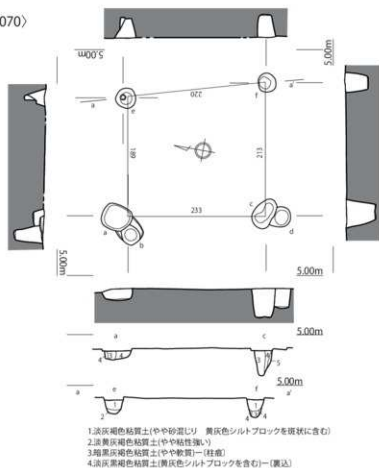
28-1SA072 (第 26 図)

第 28-1 次調査区中央北寄り Q11 グリッドから検出した柱穴 3 基からなる南北方向の柵状遺構である。主軸方向は N-39°-W である。全長 3.2 m を測り、柱間は 1.55m、1.62m を測る。柱穴の掘方は、不整形な円形ないしは楕円形を呈し、直径 0.25 ～ 0.3m、深さ 0.12 ～ 0.16m を測る。柱穴から遺物は出土していない。併行する 28-1SA073 と関連するものと考えられる。

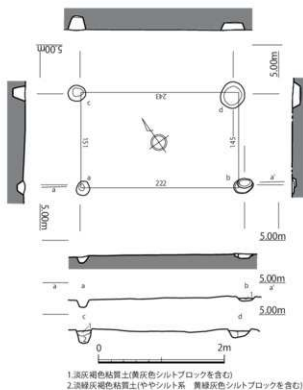
28-1SA074 (第 26 図)

第 28-1 次調査区北東部分 R15 グリッドから Q15 グリッドにかけて検出した柱穴 8 基からなる南北方向の柵状遺構である。28-1SD030 と 28-1SD031 の間から検出し、柱穴 74h は 28-1SD030 の中に落ち込んでいる。主軸方向は N-32°-W である。全長 5.7m、柱間 0.48 ～ 1.16m を測り、柱穴 74 g・h 間是非常に狭くなっている。柱穴の掘方は不整形な円形で多くは楕円形を呈する。直径 0.15 ～ 0.4m、深さ 0.08 ～ 0.2m を測る。28-1SD030 に併行していることから関連する施設と考えられる。

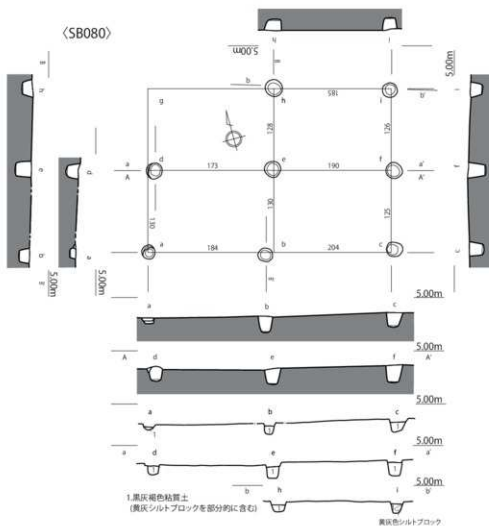
〈SB070〉



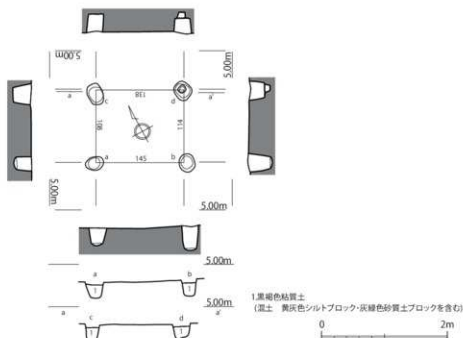
〈SB075〉



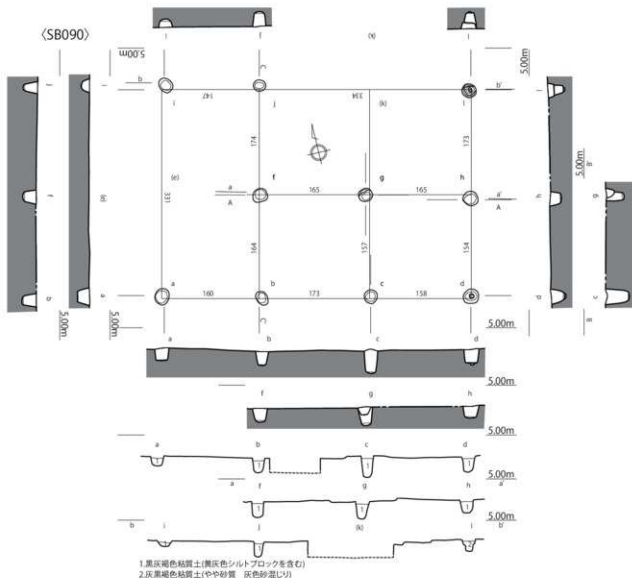
第 22 図 第 28 次掘立柱建物跡道構実測図 2 (1/60)



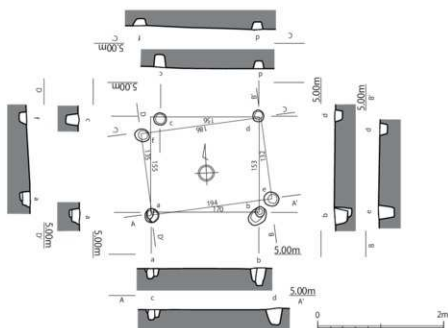
〈SB085〉



第 23 図 第 28 次掘立柱建物跡遺構実測図 3 (1/60)

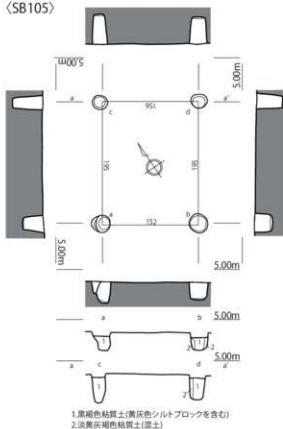


(SB095)

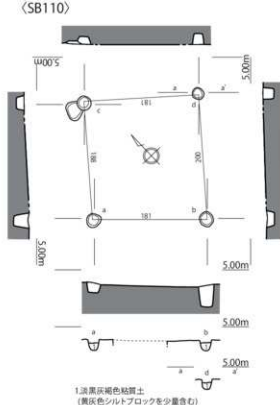


第 24 図 第 28 次掘立柱建物跡遺構実測図 4 (1/60)

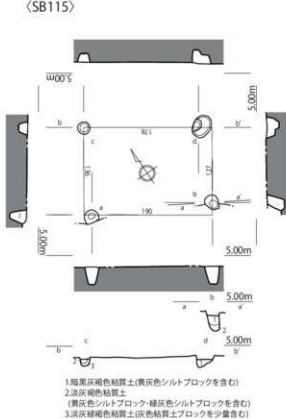
〈SB105〉



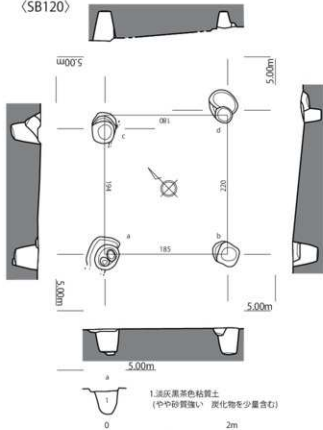
〈SB110〉



〈SB115〉

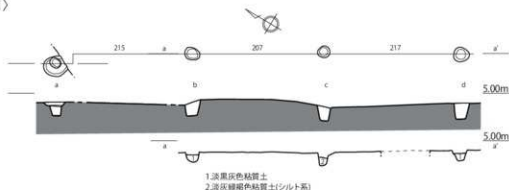


〈SB120〉

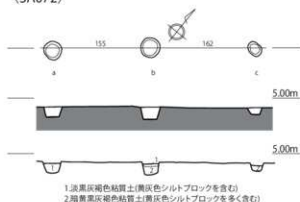


第 25 図 第 28 次掘立柱建物跡遺構実測図 5 (1/60)

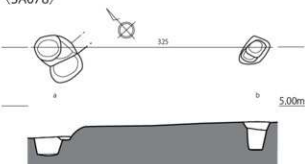
〈SA071〉



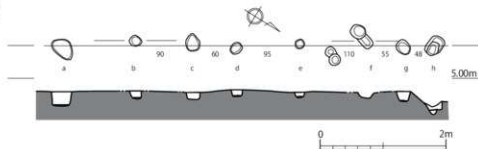
〈SA072〉



〈SA078〉



〈SA074〉



第 26 図 第 28 次櫓状遺構実測図 (1/60)

28-1SA078 (第 26 図)

第 28-1 次調査区中央東寄り O12 グリッドから O13 グリッドにかけて検出した東西方向の柱穴列である。柱穴 2 基で構成され、28-1SD025・SP054 に切られている。西側に向かって緩やかに傾斜しているが、柱穴基底部の標高約 4.3m である。主軸方向は N-43° -E で、柱間とは 3.25m を測る。柱穴の掘方は不整形な楕円形ないしは長方形形状を呈し、長径約 0.45～0.6m、深さ 0.3～0.45m を測る。柱穴 78 a から古式土師器の小破片が出土している。しっかりとした柱穴であり、軸を同じくする 28-1SB120 に関連する施設の可能性が考えられる。

竪穴建物跡 (SH)

28-1SH050 (第 27 図)

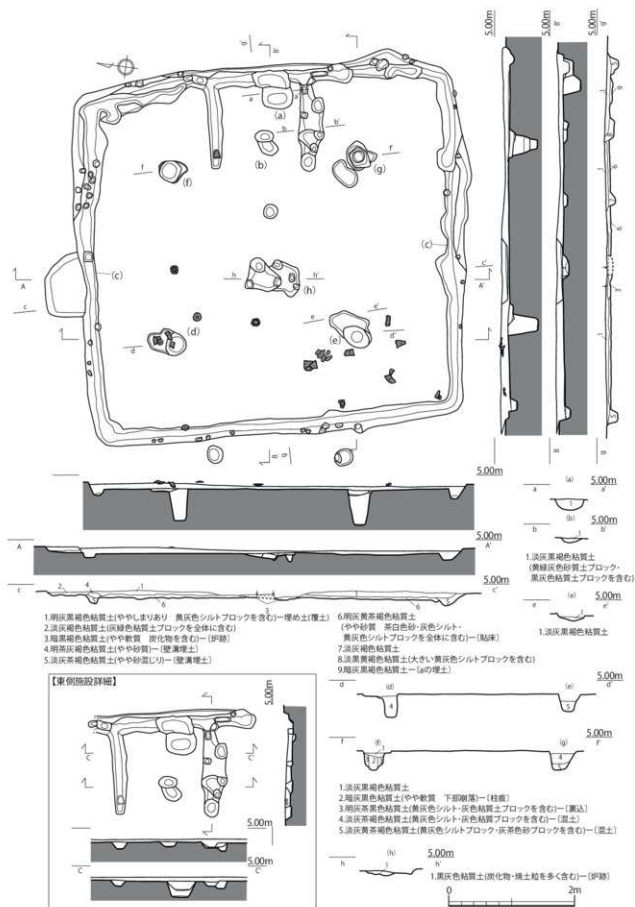
第 28-1 次調査区中央北寄り O11 グリッドから Q13 グリッドにかけて検出した竪穴建物跡である。平面プランは方形を呈する。南北 6.6m、東西 5.85m、検出面からの深さは 0.15m を測る。貼床は第 27 図第 6 層で確認した。内部は主柱穴、壁溝、炉跡、間仕切り遺構と推定される遺構を検出した。主柱穴は 4 基 (d ~ g) 検出した。壁溝 (c) は全辺に掘りこまれており、幅 0.2 ~ 0.3m、深さ 0.15 ~ 0.2m を測る。壁溝内には直径 10cm 前後の杭跡と推定されるビットが多数認められた。北側中央の長軸 1.0m、短軸 0.6m を測る突出部あるいは西側の建物外で確認された柱穴 2 基は出入り口に関連した遺構と考えられる。建物のほぼ中央部分に地床 (h) が設けられている。平面プランは不整形の円形を呈する浅い窪みで、長軸 0.6m、短軸 0.45m、深さ 0.14m を測る。埋土には炭化物・焼土粒を含む黒灰色粘質土である。炉跡内には直径約 0.1m、深さ 0.1 ~ 0.15m を測るビットを 5 基検出した。東側中央で壁溝に直交する 2 列の溝状遺構と小穴が確認でき、貯蔵等に関わる屋内施設の可能性が考えられる。壁溝に直交する溝状遺構は、幅 0.2 ~ 0.35m、長さ 1.25 m を測る。壁溝と接する小穴 (a) の平面プランは楕円形状を呈し、長軸 0.5m、短軸 0.3m、検出面からの深さ 0.35m を測る。出土遺物は主に建物内の西側で浮いた状態で検出した。柱穴 50 d 付近では土師器高坏環部などが出土している。建物の南西側柱穴 50 e の周辺では土師器高坏脚部、壺口縁部破片などが出土している。他にミニチュア土器やフイゴの破片、石製品 (磨石・石鏟) が出土している。出土遺物から古墳時代中期初頭頃の所産と考えられる。

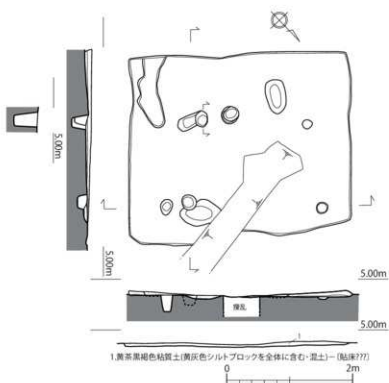
28-1SH058 (第 28 図)

第 28-1 次調査区南部 J10 グリッドで検出した竪穴建物跡である。平面プランはやや東西に長い長方形形状を呈する。東西軸 2.95m、南北軸 3.45m、検出面からの深さは約 0.1m を測る。埋土は黄灰色シルトブロックを含む黄茶黒褐色粘質土の混土で、一気に埋め戻されたと考えられる。建物の残存状況が不良であるため明確ではないが、貼床の可能性も考えられる。内部では、主柱穴、屋内土坑を検出した。主柱穴は現状 2 基で、北東部分がサーカステント基礎によって削平されて詳細は不明である。不定楕円形を呈する屋内土坑を北東部分と南東部分で 2 基検出した。長径 0.5 ~ 0.6m、検出面からの深さ約 0.08m を測り、断面形状は皿状を呈する。南隅では溝状の浅い掘りこみが認められ、検出長 1.2m、検出幅 0.3m、検出面からの深さ 0.08m を測る。削平によりこれらの屋内土坑の性格は不明である。遺物は少なく、古式土師器裏破片が出土しているが時期比定には及ばない。

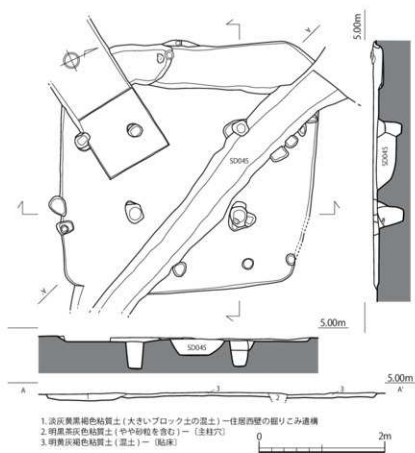
28-1SH059 (第 29 図)

第 28-1 次調査区南東部分 K12 グリッドから L13 グリッドにかけて検出した竪穴建物跡である。建物の北隅から南隅を 28-1SD045 が斜行しており、西隅部分はサーカステント基礎によって切られている。貼床は第 29 図第 3 層で確認した。平面プランは歪んだ方形を呈する。南北軸 4.05m、東西軸 3.95m、検出面からの深さは約 0.08m を測る。内部施設は主柱穴、溝状の掘り込み遺構を検出した。主柱穴は 4 基 (a ~ d) である。建物東側で検出した溝状の掘り込み遺構の平面プランは不定長方形形状を呈する。床面はフラットで、検出長 3.0m、検出幅 0.63 ~ 0.73 m、検出面からの深さ 0.05m を測る。この遺構の性格については不明である。出土遺物は少ないが、柱穴 59 d では、柱穴上位で白色粘土が充填された土師器碗が出土している。また、西側の溝状の掘りこみ部分では、碗が 2 点浮いた状態で検出した。出土遺物から古墳時代後期頃と考えられる。





第28図 28-15H058 遺構実測図 (1/60)



第29図 28-15H059 遺構実測図 (1/60)

井戸跡 (SE)

28-1SE010 (第30図)

第28-1次調査区南西部分M3グリッドで検出した。28-ISX009の攪乱により切られているが、同攪乱の出土遺物には28-1SE010の遺物が多く含まれていた。平面プランは南側が調査区外に延びるため検出していないが、不整形円形を呈すると思われる。直径約1.5m、深さ0.7mを測る。第4層付近で湧水点が認められ、滞水によるものか壁面の崩落土である淡黒緑灰色シルト質土がラミナ状になっている。井戸枠などは認められなかったため、素掘りの井戸跡と考えられる。第3層で多量の遺物が出土している。出土遺物は、古式土師器でほぼ完形のものが多く、穿孔が認められる安国寺式タイプの複合口縁壺や外來系の甕の底部片が打ち欠かれているものなどが出土している。井戸廃絶時に何らかの祭祀行為があったと考えられる。出土遺物から古墳時代前期前葉～中葉頃と考えられる。

28-1SE020 (第30図)

第28-1次調査区西部S6グリッドで検出した。平面プランは円形を呈する。検出面では直径約0.8m、深さは0.65mを測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は黒褐色を基調とし、掘り返しが行われたと考えられる。第1層では部分的に炭層が認められ、廃棄の際の祭祀が行われた可能性が考えられる。井戸枠などは認められず、素掘りの井戸であったと考えられる。出土遺物は丁寧な作りで、外來系の要素が強い。最終埋め戻しの時期は、古墳時代前期後葉頃と考えられる。

28-2SE165 (第30図)

第28-2次調査区北側O19グリッドで検出した。28-2SD180を切っている。平面プランは不整形円形を呈する。長径約2.6m、短径2.0+αm、深さ0.9mを測る。断面形状はボウル状を呈する。土層観察から2回の掘り返しが行われたと考えられる。井戸枠などは検出されていない。出土遺物に黒色土器A類碗や須恵器鉢など9世紀頃に比定されるものが出土している。埋土については、第28次調査で確認された各遺構埋土と比較すると、やや新しい時期の遺構の埋土と類似しており、出土した遺物は、当該遺構の埋土に混入した可能性も考えられる。また、下位に湧水等の痕跡が認められず、井戸跡というよりは水溜め遺構の可能性が高い。

28-2SE170 (第31図)

第28-2次調査区中央北西部分N19グリッドで検出した。28-2SD125と28-2SD0150との交点を切る形で検出した。平面プランは不整形円形を呈する。長径約2.4m、短径約2.0m、深さ1.1mを測る。第2・3層の壁面はオーバーハングしており、標高3.8m付近では湧水が認められた。井戸枠などは検出されていないため、素掘りの井戸跡と考えられる。少なくとも1回以上の掘り返しが行われたと考えられる。第2層ではほぼ完形の古式土師器甕やススが付着した甕の底部などが検出した。遺物は上層に多量の土器が集中しており、器種も多様で、外來系の要素の強いものが多くみられる。出土遺物から、古墳時代前期中葉～後葉頃に位置づけられる。

28-2SE175 (第31図)

第28-2次調査区中央北西部分O18グリッドから検出した。28-2SD150を切る。平面プランは不整形円形を呈する。長径約1.1m、短径0.9m、検出面からの深さ0.7mを測る。断面形状は逆台形を呈する。第2層では壁面が滞水のためオーバーハングしている。井戸枠などは検出されていない。埋土は灰色土を基調とし、レンズ状に堆積している。遺物は、底部付近から白色研磨土師器埴(浅埴タイプ)が出土している。埋没時期は、12世紀中頃と考えられる。

28-2SE215 (第 31 図)

第 28-2 次調査区北東部分 L23 グリッドで検出した。28-2SD205 と攪乱に切られている。平面プランは不整形な円形を呈する。長径約 1.2m、短径 1.1m、検出面からの深さ 0.85m を測る。断面形状は逆台形を呈する。南側の壁面はオーバーハングしている。遺構の下層は砂層であり、自然堆積したと考えられるが、その上層では不整合がみられ、2 回の掘り返しが行われたと考えられる。出土遺物から、古墳時代前期頃の所産と考えられる。

28-2SE220 (第 31 図)

第 28-2 次調査区中央東側 J19 グリッドで 28-2SD130 を掘り下げた後に検出した。平面プランは円形を呈し、直径約 1.0 m、深さ 0.5m を測る。断面形状は逆台形を呈する。遺物は僅少であり土師器環 c などが検出されているが、28-SD130 からの混入の可能性が考えられる。

土坑 (SK)**28-1SK015 (第 32 図)**

第 28-1 次調査区西部 N3 グリッドで検出した。平面プランは楕円形を呈する。断面形状は逆台形を呈する。長径約 1.4m、短径 0.9m、深さ 0.65 m を測る。埋土は灰褐色を基調とし、ブロック土を含む混土で埋積されており、人為的に埋め戻されたと考えられる。少なくとも 1 回以上の掘り返しが行われたと考えられる。当該調査区内の埋土の状況からは、比較的新しい時期の遺構と考えられる。

28-1SK021 (第 32 図)

第 28-1 次調査区中央 P11 グリッドで検出した。平面プランは不整形円形を呈する。断面形状は逆台形を呈し、北側部分が一段深く掘り下げられている。長径約 1.0m、短径 0.7m、最大深度 0.6m を測る。断面形状は歪んだ逆台形を呈する。黒褐色を基調とした埋土で埋積されており、第 3 層では炭化物が認められた。少なくとも 1 回以上の掘り返しが行われたと考えられる。出土遺物は、古式土師器残片、叩き石などがある。下部の抉れや階段状のテラスの状況などから井戸跡や水溜め遺構の可能性が考えられる。

28-1SK022 (第 32 図)

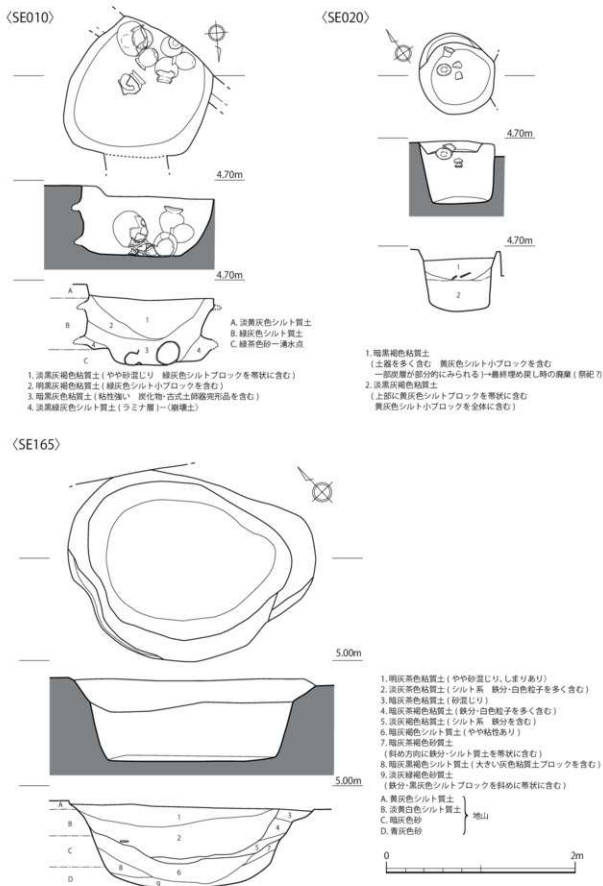
第 28-1 次調査区北部 U8 グリッドで 28-1SD002 の基底部から検出された。平面プランは円形、断面形状は袋状を呈する。直径約 0.8m、最大深度 0.6m を測る。埋土は黒灰色粘質土を主体とし、一部 28-1SD002 による掘りこみが確認できる。標高 4.2m 付近では湧水が認められ、滞水のためか壁面はオーバーハングしている。井戸跡の可能性が考えられる。出土遺物から古墳時代前期前葉頃の所産と考えられる。

28-1SK023 (第 32 図)

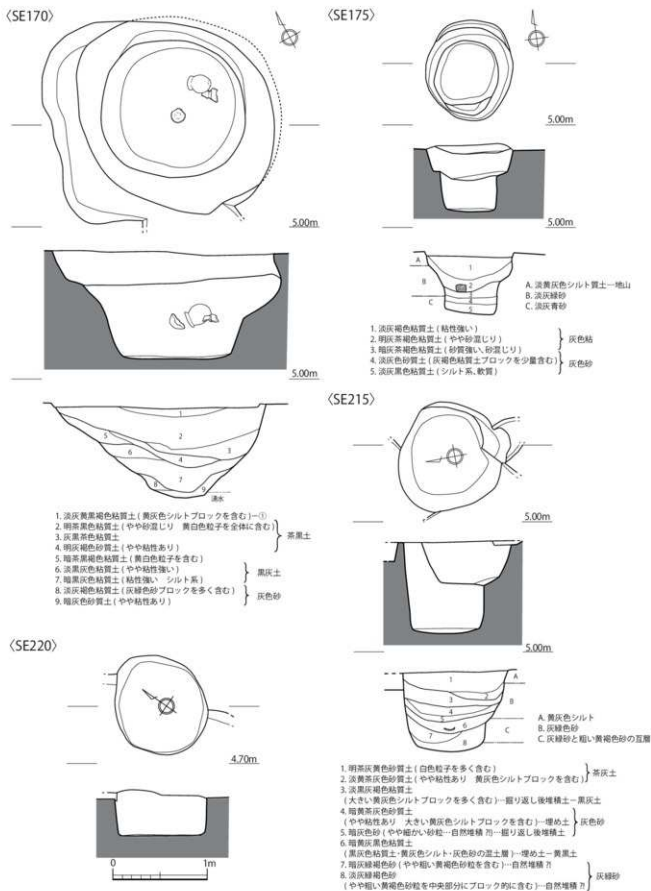
第 28-1 次調査区北部 S12 グリッドで検出した。平面プランは楕円形を呈する。長径約 1.2m、短径約 0.7m、深さ 0.15m を測る。断面形状は皿状を呈する。底面はフラットで、黄灰色シルトブロックを含む埋土で埋積されている。出土遺物は僅少で、ミニチュア土器高脚破片が 1 点である。遺物からの時期比定は困難である。

28-1SK024 (第 32 図)

第 28-1 次調査区中央 O10 グリッドで検出した。平面プランは円形を呈する。遺構の東側半分は一段掘り下げられており、長径 1.1m、短径 0.9 m、最大深度 0.52m を測る。断面形状は逆台形を呈する。遺構の西側で複合口縁壺が伏せた状態で検出した。他にも穿孔を有する完形の甕なども出土しており、何らかの祭祀行為が行われたと考えられる。出土遺物から、古墳時代前期前葉～中葉頃に位置づけられる。



第30図 第28次井戸跡遺構実測図1 (1/40)



第 31 図 第 28 次井戸跡遺構実測図 2 (1/40)

28-1SK035 (第32図)

第28-1次調査区北部R14グリッドで28-1SD030の基底部から検出した遺構である。平面プランは東西にテラスを持つ隅丸方形を呈し、西側の検出面から0.35mの地点から一段掘り下げられている。長軸約1.2m、短軸0.6m、最大深0.86mを測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土はブロック土を含む灰黒色粘質土で、人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物は出土していない。28-1SD030内で検出されたことから、古代以前の遺構であると考えられる。

28-1SK100 (第32図)

第28-1次調査区中央西側O9グリッドで検出した。東側半分は攪乱によって切られており全容は不明である。南北長約0.8m、東西長4.2+αm、深さ0.15mを測る。埋土は暗黒灰褐色粘質土の単一層で、炭化物・焼土塊を含む。西側に近接する28-1SB085に付属する施設である可能性が考えられる。遺物は、検出面で古式土師器鉢、大型壺上半部、小型壺、甗が出土している。出土遺物から古墳時代中期末～後期前半頃と考えられる。

溝跡 (SD)**28-1SD002 (第20図・第33図)**

第28-1次調査区北西部R7グリッドからV10グリッドにかけて検出した南北方向に延びる溝跡である。北端は第4次調査(平成15年度)では検出されていないが、第28次調査区南壁の土層観察において、同様の埋土を持つ遺構を確認しており、調査区を南北に縦断する形で展開していたと考えられる。T7グリッド付近から併行する28-1SD003に切られている。ほぼ直線的で、主軸方向はN-33°-Wである。検出幅約1.2m、検出長約23.0m、深さ約0.2mである。断面形状は逆台形を呈するが、底面は不定形のピットによる凹凸が見られ、人為的に掘り起こされたと考えられる。出土遺物に古代・中世の土師器の細片などが確認できるが、当該調査内の埋土の状況からは比較的新しい時期のものと考えられる。

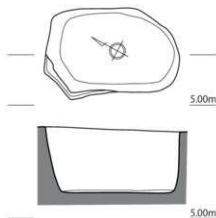
28-1SD005 (第20図・第33図)

第28-1次調査区中央南部M7グリッドからJ13グリッドにかけて検出した東西方向に延びる溝跡である。東端は28-1SD045から分岐しており、西端はサーカステント基礎により削平されているため全容は不明である。主軸方向はN-11°-Wである。検出長約28.0m、検出幅0.4～0.6m、深さは東側約0.3m、西端約0.15mである。断面形状はU字状を呈する。埋土は黒色を主体とした粘質土が堆積している。出土遺物は、土師器椀、高環脚柱部片などが出土している。出土遺物から古墳時代後期、6世紀後半以降の所産と考えられる。当遺構は28-1SD045・28-2SD135・145や北側の調査区(第4・5次調査)で確認されている4SD017・5SD007・141・142・144・161とあわせて小区画を形成しているものと考えられる。

28-1SD025/28-2SD125 (第20図・第33図)

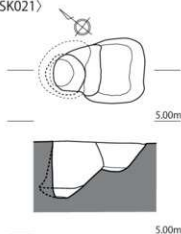
第28次調査区中央北部分をQ6グリッドからN23グリッドにかけて東西方向に横断する溝跡である。後述する28-2SD150の南北方向の溝跡と十字に交わるが、調査段階で切り合い関係は不明瞭であった。28-1SD025は28-1SD045と28-1SD030に切られ、第28-2次調査区では28-2SE170・28-2SD185に切られている。西端は第21次調査との境界付近で攪乱などに削平されているが21SD035に接続すると考えられる。東端は一部第5次調査で検出されているが調査区外に延びている。ほぼ直線的で、主軸方向はN-12°-Eである。検出幅約0.7～0.8m、検出長約70.0mを測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は茶灰色を基調とし、黄灰色シルトブロックなどを含むことなどから人為的に埋め戻されたと考えられる。土層観察からラミナ構造が認められることから水路として機能していたと考えられる。基底部の標高は28-1SD025で約4.57m、28-2SD125では約4.52mを測り、わ

〈SK015〉



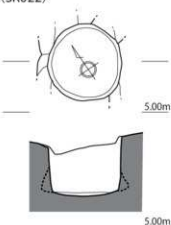
1. 淡灰褐色粘質土～亙土層
(灰褐色粘土・黄灰色シルト・灰色砂ブロックを含む)
2. 明黄灰褐色粘質土～亙土層
(黄灰褐色シルト・灰色砂・灰褐色粘土ブロックを含む)
3. 明灰褐色砂質土
(黄灰褐色シルト・灰褐色粘土ブロックをわずかに含む)
4. 暗黄灰褐色粘質土(2層に近似)

〈SK021〉



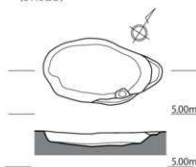
1. 明黄灰褐色粘質土
2. 暗黄灰褐色粘質土(やや粘性強い)
3. 暗黄褐色粘質土(炭化物を帯状に含む)
4. 淡黄灰褐色粘質土～亙土層
(大きい黄灰色シルトブロックを含む)

〈SK022〉



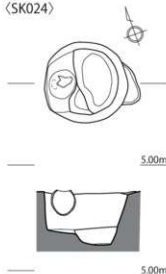
1. 灰茶褐色砂質土～SO002 埋土
(やや粗い砂粒・黄灰色シルトブロックを含む)
2. 灰色粘質土(粘性強い)～SO002 埋土 II
3. 淡黄灰褐色粘質土
4. 灰色砂質土(やや粗い砂粒)～湧水あり
5. 暗黄灰褐色粘質土(やや軟質)

〈SK023〉



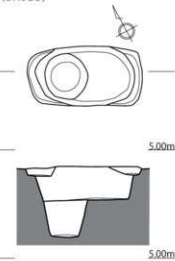
1. 黒褐色粘質土(黄灰色シルトブロックを含む)
2. 暗黄灰褐色粘質土(黄灰褐色シルトブロック・黄灰褐色粘質土ブロックを含む)

〈SK024〉



1. 明灰褐色粘質土(ややしまりあり)
2. 暗灰黒褐色粘質土
(粘性強い 黄灰色ブロックを含む)

〈SK035〉



1. 暗灰黒色粘質土
(大きい灰色粘土・黄灰色粘質土ブロックの亙土層)
2. 淡灰黒色粘質土～亙土層
(やや粘性強い 軟質灰緑色砂質土ブロックを少量含む)

〈SK100〉



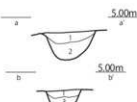
1. 暗黄灰褐色粘質土(炭化物・焼土塊を含む)

第 32 図 第 28 次土坑遺構実測図 (1/40)

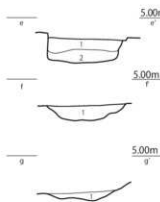
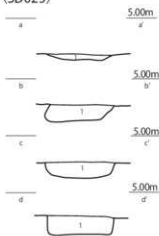
〈SD002〉



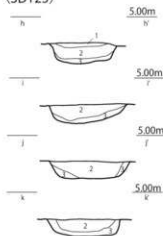
〈SD005〉



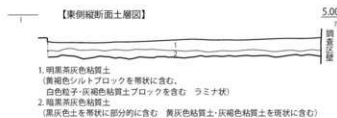
〈SD025〉



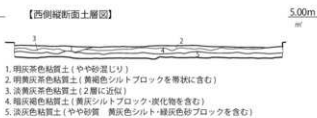
〈SD125〉



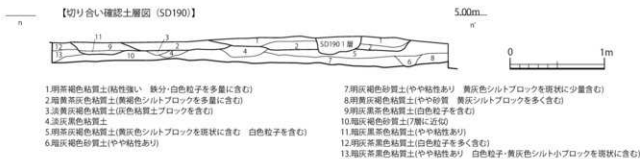
【東側縦断面土層図】



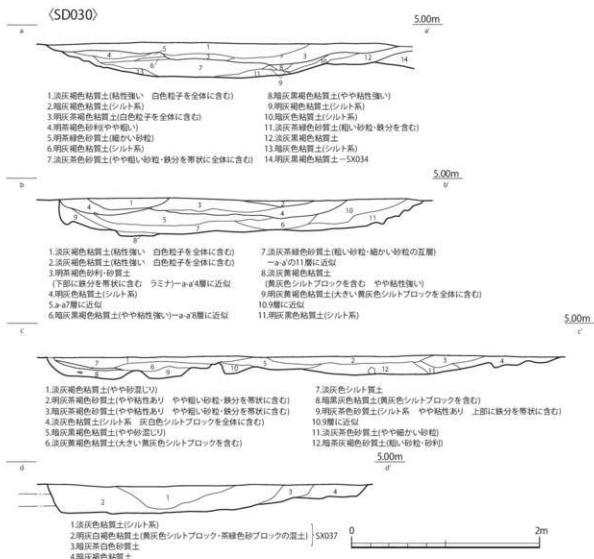
【西側縦断面土層図】



【切り合い確認土層図 (SD190)】



第 33 図 第 28 次調査遺構実測図 1 (1/40)



第 34 図 第 28 次調査遺構実測図 2 (1/40)

ずかであるが西側から東側に低くなっていることがわかる。出土遺物は弥生土器、古式土器などの細片、腰岳産・姫島産黒曜石などがあるが、遺物から時期の比定は困難である。28-2SE170 に切られていることから、古墳時代前期以前からの所産が考えられるが、28-2SE170 との位置関係から同時併存していた可能性も考えられる。

28-1SD030/28-2SD130 (第 20 図・第 34 図・第 35 図)

調査区北部 T12 グリッドから H21 グリッドにかけて検出した調査区を南北方向に斜行する大溝である。北西端は 4SD003、5SD003、8SD001、12SD010 で検出した古代大溝と接続する。南東端は 36SD025、31SD025 と接続する。主軸方向は N-29°-W で、ほぼ直線的である。遺構の幅は 28-2SD130e-e' 付近で最大約 5.5m、それ以外の地点では約 3.4～3.7m を測る。基底部の標高は SD030・SD130 とともに約 4.4m で、e-e' 付近では約 4.36m とやや深くなっている。断面形状は逆台形を呈する。埋土は基底部付近では砂やシルト系の灰色土で、ラミナ構造が認められ、水路として機能していたと考えられる。第 4・5 次調査と同じく溝として機能していたのは北東部分 3.0～4.0m 程であると考えられる。溝の両岸には、第 4 次調査と同様、溝肩部の斜面に沿って多数の不定形ビット群が検出した。R13 グリッドから O16 グリッドにかけては、溝に関連すると思われる遺構(28-1SX034・SX038・SX039)や溝の南北にそれぞれ道路状遺構(28-1SF040・28-2SF200)を検出しており、水路と陸上を繋ぐ何らかの施設であったと考えられる。出土遺物は、他調査区と同様に 9 世紀初頭を中心とした古

〈SD130〉

5.00m



0. 明灰色砂 (しまりあり) → 底層
1. 明灰色砂質土 (細かい砂粒)
2. 明灰色砂質土 (シルト系 鉄分・マンガンを含む)
3. 明灰褐色粘質土 (シルト系 白色粒子・鉄分を少量含む) 炭化物を含む
4. 明灰褐色砂 (細かい砂粒、下部に灰色シルトを帯状に含む)
5. 明灰褐色砂質土 (細かい砂粒 シルト系 鉄分を含む)
6. 明灰褐色砂質土 (灰色粘質土・茶灰色砂を帯状に含む)
7. 淡灰褐色砂質土 (細かい砂粒 シルト系 5層に近い)
8. 淡灰褐色砂 (細かい砂粒、炭化物・淡褐色粘質土ブロックを帯状に含む)
9. 暗灰褐色砂質土 (細かい砂粒 鉄分・マンガンの沈着層)
10. 暗黒灰褐色粘質土 (白色粒子を少量含む)
11. 暗灰褐色砂質土 (細かい砂粒・細かい砂・灰色粘質土の混層)
12. 暗灰褐色粘質土 (シルト系 細かい砂粒)
13. 暗灰褐色砂質土 (シルト系 細かい砂粒 ラミナ状)
14. 暗灰黒褐色粘質土 (大きい黄灰色シルトブロックを含む) 黄色粒子・鉄分を帯状に含む

5.00m



1. 明灰褐色砂質土 (細かい砂粒)
2. 明灰褐色粘質土 (ややしまりあり 白色粒子・鉄分を全体に多く含む)
3. 淡灰褐色粘質土 (砂混じり 白色粒子・鉄分を全体に多く含む) → 2層に近い
4. 明灰褐色砂 (細かい砂粒、下部に灰色シルトを帯状に含む)
5. 暗灰褐色砂 (細かい砂粒、鉄分を多く含む)
6. 暗灰褐色粘質土 (やや砂混じり) 白色粒子を含む
7. 暗灰褐色粘質土 (シルト系 白色粒子・鉄分を少量含む 炭化物を含む) → 6層に近い
8. 淡灰褐色粘質土 (シルト系 細かい砂粒を含む)
9. 明灰褐色砂質土 (細かい砂粒・細かい砂粒・シルト質土の混層)
10. 淡灰褐色砂 (細かい砂粒、炭化物・淡褐色粘質土ブロックを帯状に含む)
11. 暗灰褐色粘質土 (灰色粘質土を帯状に少量含む)
12. 淡灰黒褐色粘質土 (黄灰色シルトブロックを含む)
13. 暗灰褐色粘質土 (黄灰色シルトブロックを多く含む)
14. 暗灰褐色粘質土 (黄灰色シルトブロックを含む)
15. 淡灰褐色粘質土 (黄灰色シルト・灰色粘質土の混層) → SD150下層

【SD130 東側縦断面図】

5.00m



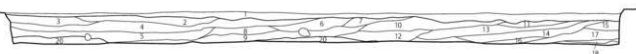
1. 明灰褐色粘質土 (白色粒子・鉄分を全体に含む)
2. 暗灰褐色粘質土 (やや砂混じり) 白色粒子・鉄分を全体に含む
3. 淡灰褐色粘質土 (シルト系)
4. 暗灰褐色砂 (灰色シルトブロックを少量含む) やや細かい砂粒
5. 暗灰褐色砂 (やや細かい砂粒 灰色シルト・灰色砂を帯状に含む(ラミナ) 鉄分を含む)
6. 明灰褐色砂 (細かい砂粒 下部に灰色シルトを帯状に含む)
7. 淡灰褐色砂 (細かい砂粒 灰色砂、灰色シルトを帯状に含む) → 6層に近い
8. 暗灰褐色砂 (やや細かい砂粒 灰色砂、灰色シルトを帯状に含む(ラミナ) 鉄分を多量に含む)
9. 明灰褐色砂 (やや細かい砂粒 灰色砂、灰色シルトを帯状に含む(ラミナ) 鉄分を多量に含む) → 8層に近い
10. 暗灰褐色粘質土 (シルト系 鉄分・炭化物を少量含む)
11. 淡灰褐色粘質土 (砂混じり) やや細かい茶色砂を含む 黄灰色シルトブロックを帯状に含む

A. 緑白色シルト(シルト系) → 地山



【SD130 西側縦断面図】

5.00m



1. 暗灰褐色粘質土 (やや砂混じり)
2. 暗灰褐色砂質土 (シルト系 細かい砂粒)
3. 明灰褐色砂質土 (やや細かい砂粒)
4. 淡灰褐色砂質土 (やや細かい砂粒 鉄分を含む)
5. 明灰褐色砂質土 (細かい砂粒 灰色シルトを帯状に含む・ラミナ)
6. 暗灰褐色砂質土 (やや細かい砂粒 鉄分を多く含む)
7. 明灰褐色砂質土 (シルト系 細かい砂粒)
8. 明灰褐色砂質土 (やや細かい砂粒 鉄分を多く含む)
9. 暗灰褐色砂 (細かい砂粒 シルト系 灰色シルト ラミナ層)
10. 明灰褐色砂質土 (細かい砂粒 下部に灰色シルトをラミナ状に含む)
11. 淡灰褐色砂質土 (細かい砂粒 鉄分を多く含む)
12. 暗灰褐色砂質土 (細かい砂粒)
13. 明灰褐色砂質土 (シルト系 極めて細かい砂粒) → ラミナ状
14. 暗灰褐色シルト質土 (細かい砂粒を上部に含む)
15. 暗灰褐色砂質土 (細かい砂粒 鉄分を含む)
16. 明灰褐色シルト質土 (軟質)
17. 明灰白粘砂質土 (シルト系 細かい砂粒 細かい砂粒をブロック状に含む)
18. 暗灰褐色シルト質土 (やや粘りあり)
19. 淡灰褐色砂質土 (黄色粒子を含む)
20. 明灰褐色砂質土 (大きめの黄褐色粒子・白色粒子を多量に含む)

第 35 図 第 28 次満跡遺構実測図 3 (1/40)

代の遺物が多量に検出されている。中には、「厨」と刻まれた刻書土器小壺底部破片、越州窯系青磁碗、石帯の巡方なども出土している。

28-1SD045/28-2SD145 (第 20 図・第 36 図)

第 28 次調査区中央を南北に湾曲する溝跡である。北端は 5SD142 に接続し、南端は調査区外に延びる。28-1SD030 に切られ、28-1SD025・28-1SH059 を切る。また、I13 グリッドで 28-1SD005 と連結する。b-b' ベルトにて 28-1SD005 との切り合い関係を土層観察で確認したが一連の土層堆積であり、当遺構と 28-1SD005 は一連の溝跡と考えられる。検出幅 0.4～0.8 m、深さ 0.14～0.42 m を測るが、基底部の標高は南北ともに約 4.5 m であり、高低差は認められなかった。また、28-1SD005 の基底部の標高は約 4.58 m であり、若干高い傾向にある。断面形状は逆台形を呈する。土層観察からラミナ状の構造も見られ、水路であった可能性が考えられる。遺物は 28-1SD045 からは土師器椀・甕口縁部破片、砂岩製砥石、円盤状石製品、28-2SD145 からは土師器椀、弥生土器破片、ミニチュア土器鉢などが出土している。出土遺物から 6 世紀後半頃と考えられる。

28-2SD135 (第 20 図・第 36 図)

第 28-2 次調査区南東部 E15 グリッドから J19 グリッドにかけて検出した南北方向に斜行する溝状遺構である。南端は攪乱に切られており、28-2SD145 との切り合い関係は不明であるが一連の溝跡の可能性が考えられる。主軸方向は N-41° -E で、ほぼ直線的である。検出長約 21.0 m、検出幅約 0.3～0.4 m で、深さは約 0.1～0.14 m を測る。断面形状は皿状を呈する。埋土は黒褐色粘質土の単一層であるが、一部においてラミナ構造がみられることから水路として機能していたと想定され、機能停止後一気に埋め戻されたと考えられる。出土遺物は僅少であり、遺物からの時期判定は困難である。

28-2SD140 (第 20 図・第 36 図)

第 28-2 次調査区東部 F20 グリッドから G20 グリッドにかけて検出した溝跡である。周囲が建物基礎による攪乱により欠失し、溝の規模は不明である。主軸方向は N-8° -W で、検出幅 0.74～0.84 m、深さ 0.14～0.16 m を測る。埋土は黄灰色シルトブロックを含む粘質土で、人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物は土師器蓋口縁部片が出土しており、埋没時期は 8 世紀中頃から 9 世紀ごろと考えられる。

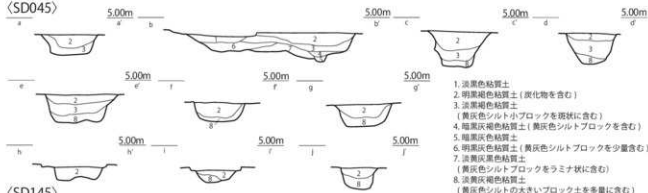
28-2SD150 (第 20 図・第 36 図)

第 28-2 次調査区北側 P19 グリッドから E19 グリッドにかけて検出した南北方向に延びる溝跡である。28-2SE175・SD130・SD135・SD190 に切られている。28-2SD125 とほぼ直角に交わっており、その交点を 28-2SE170 が切っている。28-2SD125 との切り合いは不明瞭であった。北端は 5SD005 と、南端は 37SD001 と接続する可能性が考えられる。ほぼ直線的で、主軸方向は N-3° -W である。検出長約 61.2 m、検出幅約 1.1～1.4 m、深さ約 0.28～0.41 m を測る。基底部の標高は北側で 4.3 m、南側では約 4.4 m を測り、やや北側に低くなっている。断面形状は逆台形を呈する。上層は茶灰色を基調とした粘質土で鉄分・シルトブロックなどを含み、下層はシルト系の砂質土で埋積されている。少なくとも 1 回以上の掘り返しが行われたと考えられる。遺物は、破片資料が主体で土師器高杯・甕口縁部の破片、古式土師器・弥生土器・縄文土器の破片などが出土している。

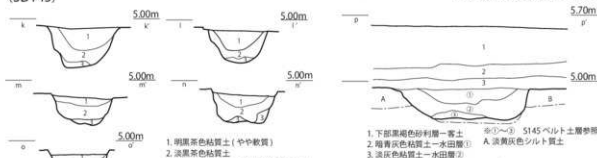
28-2SD155 (第 20 図・第 37 図)

第 28-2 次調査区南東部 F17 グリッドから H19 グリッドにかけて検出した南北方向に延びる溝跡である。攪乱に削平されており、検出した部分は少なく全容は不明である。主軸方向は N-43° -E である。検出長 8.2 m、検出幅 0.3～0.8 m、深さ 0.12～0.14 m を測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は黒褐色粘質土の単一層で基底部付近はラミナ構造が認められ、水路として機能をなしていたと想定できる。また機能停止後人為的に埋め戻され

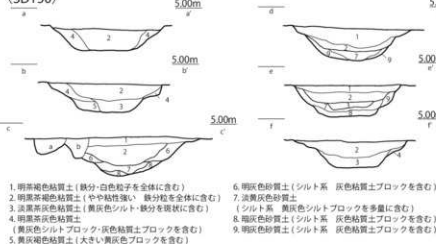
〈SD045〉



〈SD145〉



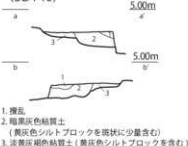
〈SD150〉



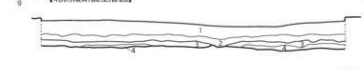
〈SD135〉



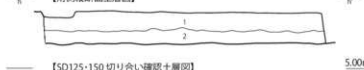
〈SD140〉



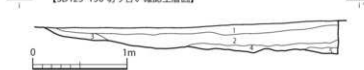
【北側縦断面土層図】



【南側縦断面土層図】



【SD125・150 切り合い確認土層図】



第 36 図 第 28 次溝跡遺構実測図 4 (1/40)

たとえられる。遺物は僅少であるが、土師器蓋が出土している。大半が攪乱に削平されているが、土層観察と出土遺物から 28-2SD210 と同一の溝跡である可能性も考えられる。出土遺物から、8 世紀末から 9 世紀初頭頃の所産と考えられる。

28-2SD180 (第 20 図・第 37 図)

第 28-2 次調査区東部 J20 グリッドから K20 グリッドにかけて検出した南北方向に延びる溝跡である。28-2SD130 に切られている。主軸方向は N-13° -W で、ほぼ直線的であるが北側でやや西寄りに曲がる。検出長約 10.5 m、検出幅は北端で約 0.6m、南端で約 1.2m、深さは 1.6 ~ 2.2m を測る。基底部の標高はおおむね 4.6m を測る。断面形状は逆台形を呈する。出土遺物は土師器碗・杯、須恵器環などの古代の遺物で、埋没時期は 8 世紀頃と考えられる。

28-2SD185 (第 20 図・第 37 図)

第 28-2 次調査区北部 M20 グリッドから N20 グリッドにかけて検出した南北方向に延びる溝跡である。北端は調査区外へ延び 5SD151 に接続すると考えられ、一連の溝跡である可能性が考えられる。北側部分では 28-2SE165 に切られている。ほぼ直線的で、主軸方向は N-20° -W である。検出長約 7.4m、検出幅北側で約 0.4m、南側で約 0.74m、深さは約 0.12 ~ 0.34m を測る。基底部の標高は、南側で 4.5m、北側で 4.6m とやや南側に低くなっている。断面形状は逆台形を呈する。上層は黄灰色ブロック土を含む褐色を基調とする埋土で、下層では粘土を含む灰褐色土が堆積している。出土遺物は僅少であり、時期比定は困難である。

28-2SD190 (第 20 図・第 37 図)

第 28-2 次調査区北部 P18 グリッドから M20 グリッドにかけて検出した南北方向に延びる溝跡である。北端は調査区外へ延びており、南端は M20 グリッドで収束している。28-2SD150 の上面から検出され、28-2SD125・185 を切っている。ほぼ直線的で、主軸方向は N-23° -W である。検出長約 12.4m、検出幅北端約 1.9m、南端約 0.5m、深さ約 0.2m を測る。基底部の標高は 4.6m を測り、北側は 28-2SD150 との切り合いによって低くなっている。断面形状は逆台形を呈する。出土遺物は土師器甕・甔、黒色土器 A 類碗などで 8 世紀後半 ~ 9 世紀頃の所産と考えられる。

28-2SD195 (第 20 図・第 37 図)

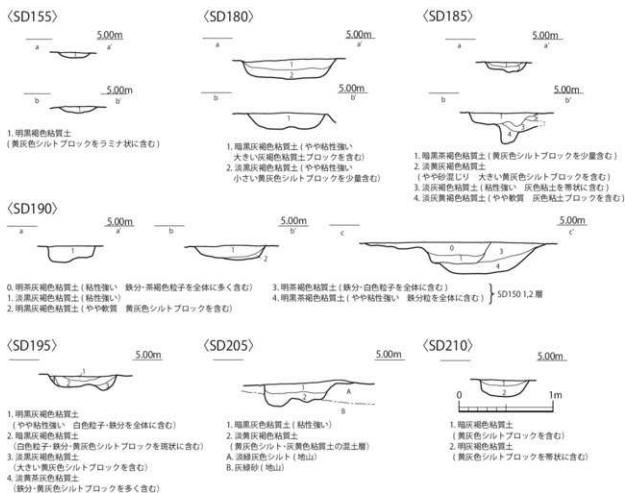
第 28-2 次調査区中央 K20 グリッドから L20 グリッドにかけて検出した南北方向に延びる溝跡である。北端は L20 グリッドで収束し、南端は攪乱と 28-2SD130 に切られている。ほぼ直線的で、主軸方向は N-6° -W である。検出長 5.0m、検出幅約 0.7m、深さ 0.18m を測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は黒灰褐色を基調とし、黄灰色シルトブロック・鉄分を含む。出土遺物は、黒色土器 A 類碗、須恵器高坏片など古代の遺物で、8 世紀後半から 9 世紀頃の所産と考えられる。

28-2SD205 (第 20 図・第 37 図)

第 28-2 次調査区北部 N21 グリッドから M22 グリッドにかけて検出した南北方向に延びる溝跡である。28-2SD125 を切っている。ほぼ直線的で、主軸方向は N-25° -W である。検出長約 7.0m、検出幅約 1.0 m、深さ 0.26m を測る。断面形状は逆台形を呈する。遺物は土師器環ほか、焼土塊なども出土している。出土遺物から 8 世紀後半から 9 世紀前半頃と考えられる。

28-2SD210 (第 20 図・第 37 図)

第 28-2 次調査区東部 L23 グリッドから L24 グリッドにかけて検出した南北方向に延びる溝跡である。28-



第 37 図 第 28 次溝跡遺構実測図 5 (1/40)

2SE215 を切っている。ほぼ直線的で、主軸は N-41° -W である。検出長約 3.0m、検出幅約 0.5 m、深さ約 0.2m を測る。断面形状は U 字形を呈する。埋土は灰褐色粘質土で、黄灰色シルトブロックを含む。遺物は、土師器甕 b 口縁部破片が出土しており、埋没時期は 8 世紀後半から 9 世紀頃と考えられる。土層観察と出土遺物から 28-2SD155 と同一の溝跡である可能性が考えられる。

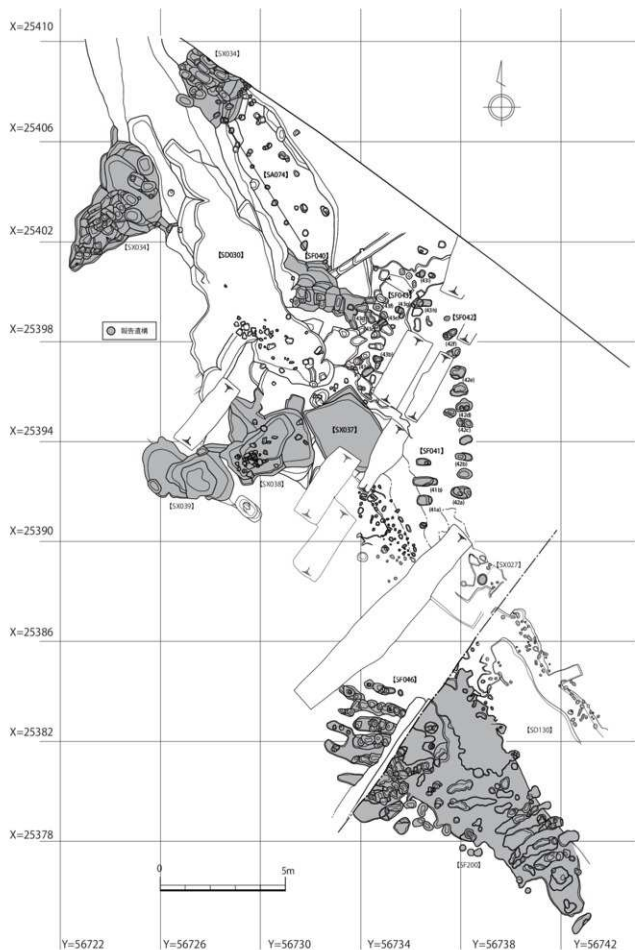
道路状遺構 (SF)

28-1SF040・043 (第 39 図)

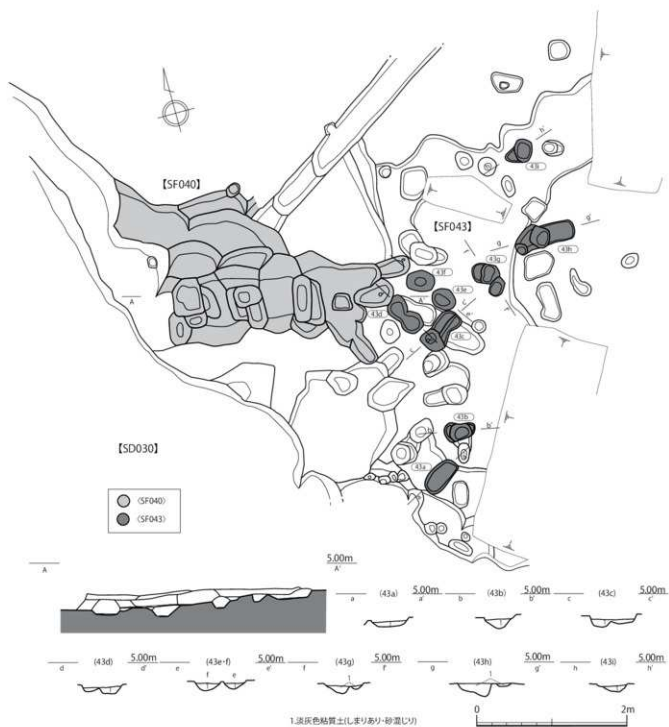
第 28-1 次調査区北部 P15 グリッドから Q16 グリッドにかけて検出した。28-1SD030 の北側に沿うように構築されている。28-1SF041・042・043 は同一の性格をもつ不定円形の連続土坑であり、サーカステント基礎により削平されているため、全てを確認出来ないが一連の道路状遺構 (28-1SF040) であると推定される。

28-1SD030 と 28-1SF043 を繋ぐ遺構は、逆台形状に溝を掘りこみ、底面に連続する不定楕円形の土坑を構築したと考えられる。東西長 3.1m、検出幅 1.3 ~ 2.0m を測る。西端標高 4.4m、東端 4.7 m で、28-1SD030 から東方向へと高くなっており、スロープ状に傾斜している。底面に認められる連続する土坑は、長軸 0.5 ~ 0.6m、深さは 0.08 ~ 0.14m を測り、それぞれ 0.3 ~ 0.4m の間隔で配されている。この遺構内では遺物は出土していない。

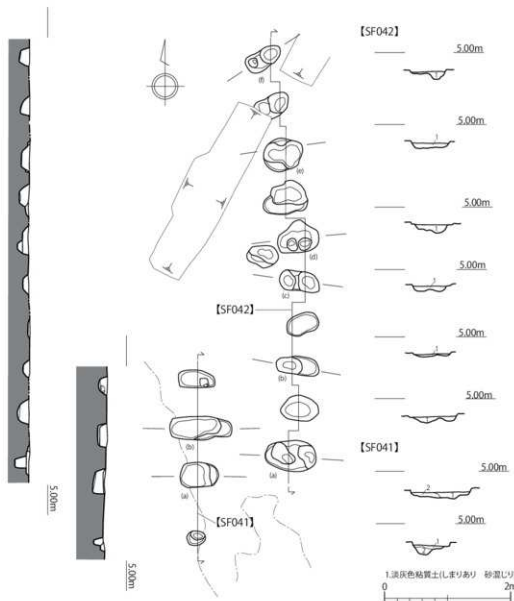
28-1SF043 はスロープ状の遺構の東側に接続する連続土坑である。それぞれの土坑の平面プランは不定楕円形を呈し、長軸 0.42m ~ 0.7 m、深さ 0.08m ~ 0.14m を測る。① 28-1SD030 (南) 方向 (43 a ~ c・f) ②



第 38 図 道路状遺構及び関連遺構全体図 (1/150)



第39図 28-1SF040・043 遺構実測図 (1/50)

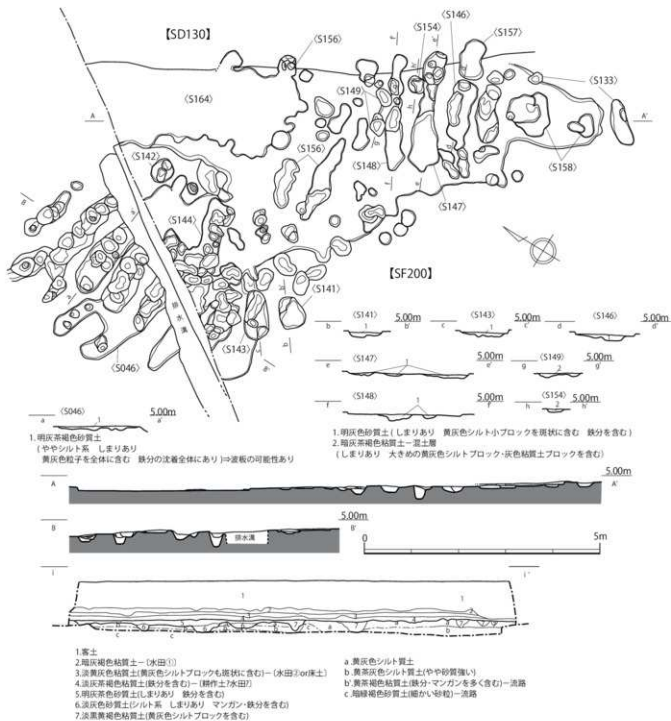


第40図 28-1SF041-042 遺構実測図 (1/50)

28-1SF041・042 (東) 方向 (43 d・e・f・g・h) ③北側調査区外(北) 方向 (43 i) の3通りがあると推定されるが、攪乱に削平されているので詳細は不明である。①②ともにおおむね0.3m～0.4mの間隔で配されている。埋土は砂・土器破片などが混じるが淡灰色粘質土で充填される単一層で、しまっている。遺物は少量であるが、須恵器環H、土師器高環脚部破片、椀、玉砂利などが出土している。

28-1SF041-042 (第40図)

第28-1次調査区北東部分O16グリッドからP16グリッドで検出した28-1SD030の北側に位置する連続土坑である。真南北方向に延び、平面プランは不定円形ないしは楕円形状を呈する波板状の土坑である。28-1SF041は、28-1SF042の南端の3基の土坑間に配置され併行している。28-1SF041は全長約2.75m、28-1SF042は約6.73mを測る。地山を皿状に浅く掘りこんだ土坑で、長軸0.6～0.9m、深さ0.15～0.2mを測り、約0.3mの間隔で配されるが、土坑42d～fの間は緩やかにカーブしており、間隔が0.15mと狭くなっている。埋土は、28-1SF043と同様の淡灰色粘質土で充填されており、しまっている。28-1SF041では土師器環破片、須恵器裏破片、牛馬歯などが出土しており、28-1SF042で遺物は出土していない。



第 41 図 28-25F200 遺構実測図 (1/80)

28-2SF200 (第9図・第41図)

第28-2次調査区西端M16グリッドからK17グリッドで検出した28-2SD130の南側に位置する連続土坑である。第28-1次調査で28-1SF046を検出し、第28-2次調査で関連遺構を検出した。①28-1S046・28-2S141・143・144②28-2S146・147・148・149・154・156・157・164の2通りが想定できる。①の連続土坑は、真南北方向に延びる波板状の土坑で、一部現代の排水溝に削平されている。平面プランは不整形な長楕円形状を呈する。長軸0.7～2.0m、深さ0.1～0.3mを測る。全長5.9m、連続土坑の間隔は0.1～0.3mを測る。灰色砂質土を基調としたシルト系の埋土で充填されており、しまっている。土層観察から、波板状の土坑を明灰色砂質土で充填した後、明灰茶色砂質土で被覆している。遺物は少量であるが、土師器環a破片(28-2S144)、須恵器裏(28-2S142)が出土している。主軸方向からも28-1SF040と一連の道路状遺構の可能性が考えられる。②の連続土坑は、全長10.3m、主軸方向N-32°-Wをとり南北方向の波板状土坑である。28-2SD130の西岸を切る。平面プランは不整形な長楕円形状ないしは不定円形を呈する。土坑の規模は不揃いで、長軸0.4m～2.4m、深さ0.15m～0.3mを測る。28-2S164は他の波板状土坑より規模が大きく、検出長4.2m、検出幅2.2m、深さ0.05mを測る。土坑の間隔は、狭くなる部分もあるが、おおむね0.2～0.4mを測る。埋土は、S146・147・148では灰褐色砂質土、S149・154・164では暗灰茶褐色粘質土であり、どちらもしまっている。遺物は須恵器環a・血破片(28-2S156)、盤底部片(28-2S146)などが出土している。道路として機能していたか不明であるが、水路と陸上を繋ぐなんらかの施設であった可能性が考えられる。

性格不明遺構(SX)**28-1SX027 (第44図)**

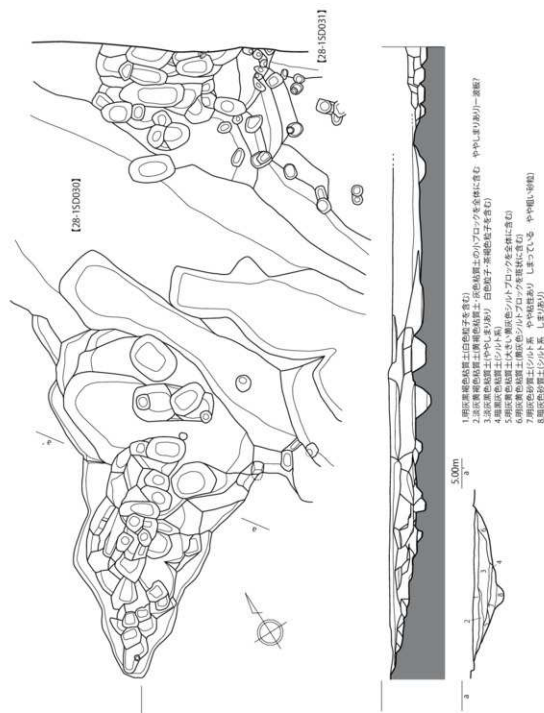
第28-1次調査区東端M16グリッド、28-1SD030内で検出された。平面プランは不整形な円形を呈し、長径0.58m、短径0.52m、深さ0.1mを測る。断面形状は皿状を呈する。埋土は軟質な灰褐色土である。出土遺物は土師器壺×壺、須恵器蓋などである。出土遺物から埋没時期は8世紀前半頃と推定される。

28-1SX034 (第42図)

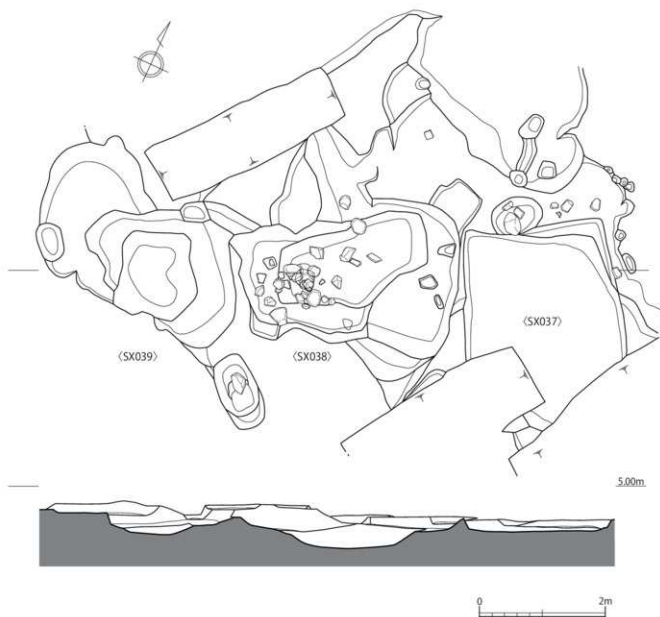
第28-1次調査区北部R14グリッドで28-1SD030の両岸で検出した。北端は調査区外に延び第5次調査で検出した。28-1SD031を切っている。南北長14.5m、最大幅4.5mを測る。南側最大深度0.55m、北側最大深度0.4mを測り、28-1SD030の底面と同様に標高は4.3mである。平面プランは溝の外側に向かって狭くなる二等辺三角形形状を呈する。断面形状はV字形を呈する。掘りこみ部分の中央には多数のビットが検出されており、橋を構築するための支柱などの施設である可能性が想定される。中央部分のビットは不定円形ないしは長楕円形状を呈する。不定円形のビットは直径0.2～0.3m、長楕円形のビットは長径0.6～0.9mを測る。28-1SD130内部では同様のビットは検出していない。埋土はシルト質の灰色砂質土で、しまっている。検出面からビットまでの埋土は、ブロック土を含む粘質土である。土層観察から不整合がみられるため、1回以上の掘り返しが行われたと考えられる。出土遺物は、土師器裏b・甕、須恵器高脚部、メノコ状加工土器片などがある。出土遺物から28-1SD030と同時代の8世紀後半～9世紀初頭頃機能していたと考えられ、同時併存していた可能性が高い。

28-1SX037 (第43図)

第28-1次調査区北東部分O15グリッドからO16グリッドにかけて検出した。28-1SD030内で検出し、一部攪乱に削平されている。平面プランは、南東部分が攪乱に削平されているため詳細は不明であるが、方形を呈し、北東部分に1段のテラスが認められる。検出長約3.15m、検出幅2.5m、深さ0.2mを測る。底面の標高は4.3mで、28-1SD030・28-1SX039と同じくしている。断面形状は平たい逆台形を呈し、底面はフラットである。埋め土はややしまったブロック土を含む粘質土である。28-1SD030に関連する遺構であるが、性格は不明である。遺



第 42 図 28-1SX034 遺構実測図 (1/60)



第43図 28-1SX037-038-039 遺構実測図 (1/60)

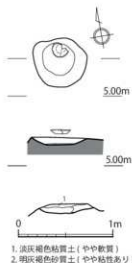
物は、土師器環c、須恵器蓋・壺片の他、須恵器転用硯（猿面硯）が出土している。出土遺物から28-1SD030と同時期の8世紀後半～9世紀初頭頃機能していたと考えられる。

28-1SX038（第43図）

第28-1次調査区北東部分O14グリッドからO15グリッドにかけて検出した。28-1SD030のやや南側に位置し、28-1SX037に隣接する。平面プランは不整形な隅丸形状を呈する。長軸3.5m、短軸2.8m、最大深度0.6mを測る。断面形状は逆台形を呈し、段掘り状になっている。底面の標高は4.0mであり、28-1SD030や28-1SX037よりも深くなっている。西半分の標高4.5m付近では15cm～25cm超の礫を多数検出した。底面では30cm超の礫が検出されている。北側には28-1SD030に接続すると推定される溝状の掘り込みが認められる。28-1SD030に関連する何らかの機能をもった遺構であるが性格は不明である。出土遺物は土師器環d、甕b口縁部破片、須恵器蓋、石斧などがある。28-1SD030と同時期の8世紀後半～9世紀初頭頃に機能していたと考えられる。

28-1SX039（第43図）

第28-1次調査区北東部分O14グリッドで検出された。28-1SD030の南側に位置し、28-1SX038に隣接す

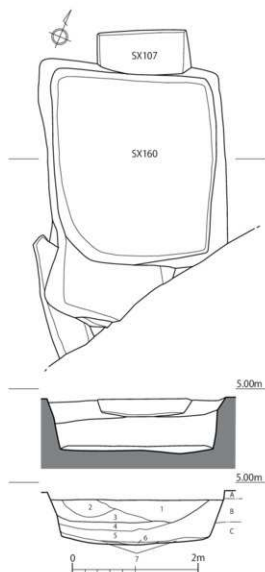


第 44 図 28-1SX027 遺構実測図 (1/40)

る。平面プランは不整形な楕円形状を呈する。長軸約 2.6m、短軸 1.9m、深さ 0.45 m を測る。断面形状は逆台形を呈する。底面の標高は約 4.3m で、28-1SD030 や 28-1SX037 と同様である。埋土は単一層で一気に埋め戻されたと考えられる。SX037、SX038 と合わせて、SD030 に関連した遺構群と考えられる。遺物は少量であるが、土師器杯 a・須恵器甕片などが出土している。出土遺物から 28-1SD030 と同時期の 8 世紀後半～9 世紀初頭頃の遺構と考えられる。

28-2SX160 (第 45 図)

第 28-2 次調査区南部 F17 グリッドで検出した。28-2SD106・SK107 に切られている。平面プランは長方形形状を呈し、南側にテラスを持つ。長軸 4.2m、短軸 2.6m、深さ 0.8m を測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は下層ではシルト質土と砂層で、その上層はシルトブロックなどを含む粘性のある混土で埋積されている。土層観察から不整合がみられ、少なくとも 1 回以上の掘り返しが行われたと考えられる。出土遺物は須恵器杯 a などがあり、下層では縄文土器・姫島産黒曜石が出土している。第 28 次調査で確認した各遺構埋土と比較すると新しい時期の遺構埋土に類似しており、出土した遺物は、他からの混入の可能性も考えられる。



1. 明灰黄褐色粘質土 (灰色粘質土・黄灰色シルト・黄白色シルトの混土層)
 2. 暗灰黄褐色粘質土 (やや粘性強い 1 層と所々の混土層)
 3. 明灰黄褐色粘質土 (黄灰色シルトブロックの割合の多い混土層)
 4. 淡灰黄色砂質土 (やや粘性あり 上部に灰色砂を帯状に含む 灰色シルトブロックがプラスされた混土層)
 5. 淡灰褐色粘質土 (灰色粘質土・黄灰色シルトブロックの割合の多い混土層)
 6. 灰褐色シルト質土 (軟質)
 7. 暗青灰色砂 (緑白色シルトブロックを含む ラミナ層)
- A. 黄灰色シルト
B. 黄白色シルト
C. 灰褐色砂～青灰色砂

第 45 図 28-2SX160 遺構実測図 (1/60)

(4) 出土遺物

出土遺物の概要

第 28 次調査区全体からは、コンテナ 48 箱分の遺物が出土している。遺物は、古墳時代前期から古代に該当するものが大部分を占めている。第 28 次調査から出土した古墳時代前期の土器群は、本調査区に近接する第 20・23・32 次で環濠と推定される溝跡出土資料と同時期の様相を示している。その他、古墳時代後期の遺物が少数ながらも出土している。大道遺跡群内では、当該時期の資料は極めて少ないことから重要な所見である。古代については、大溝 (28-1SD030・28-2SD130) の埋土から 8 世紀末～9 世紀前半頃を中心とする遺物の出土が顕著である。構成は土師器・須恵器の供膳具が主体的であるが、長頸壺や甕といった貯蔵具も散見される。また、石帯の巡方や銅製の鐻、「厨」と刻書された土師器小壺、転用硯といった官衙的要素を持つ遺物を含んでおり、第 28 次調査地を含む周辺地点の遺跡の性格や特徴を示す好資料といえる。

以下では、主要遺構に絞って遺構の時期を示すものや特殊な遺物を中心に掲載・報告を行う。遺物の種類・名称・法量などについては、遺物観察表 (表 2・3 参照) にて報告している。遺構の時期認定に関わる遺物も表に掲載するのみとなっているものもあるが、出土遺物の全容についてはこれを参照していただきたい。ここでは、特に重要な遺物についてのみ詳述する。

28-1SH050 出土遺物 (第 46 図 2～30・第 47 図 1～3)

全て古式土師器である。高坏、鉢、小型丸底壺などが主体を占める。高坏は坏部下位に明確な稜が見られ口縁部が外反するタイプ (3・4・6・7) と坏部外面の稜が曖昧で口縁部が直線的に伸びるタイプ (5・8) があり、脚部はラッパ状に開くもの (5・10・11)、と柱状部と裾部に明確な稜を形成するタイプ (12～15)、柱状部が短いタイプ (9) がある。24 は壺の口縁部であるが、複合口縁状を呈す。土器群の特徴から古墳時代中期初頭頃の所産と考えられる。

28-1SH059 出土遺物 (第 47 図 4・5)

4・5 は土師器碗 B である。ともに口縁部は丸く内彎しており、4 は丸底状の底部を有すものと推測される。古墳時代後期後半頃の特徴を示す。

28-1SE010 出土遺物 (第 48 図 6～15・第 49 図～第 51 図)

全て古式土師器である。10 は長い口縁部を有すタイプの小型丸底壺と思われる。12 は頸部と胴部の境が鋭く尖った広口壺の破片である。頸部内面は横方向に連続したケズリが行われる。口縁部は直線的に伸び、平坦に仕上げられる。16・17 は球形胴部を呈す広口壺で、16 は口縁部に U 字状の打ち欠きが、底部には円形の打ち欠きが行われている。壺には複合口縁壺も散見される。18 は球形の胴部に屈曲の緩い複合口縁を有する。頸部には方形の打ち欠き痕が、底部は大きく打ち欠きが行われている。内外面には縦方向のミガキが顕著である。口縁側面の波状文は 1 条で、非常に稚拙に刻まれている。20～41 は甕である。様相としてナデ肩気味で球形胴部を呈すものが目立ち、布留式系の影響を受けているものが多く見られる。23・24・26・38・39 は口縁形状や器形に布留式系の特徴が現れている。26 は肩がやや張っており、胴部中位に最大径を有し球形に近い形状をしている。口縁端部は鋭く平坦に仕上げられる。外面は縦方向のハゲ目調整の後、胴部上位に横方向のハゲ目調整が施される。底部内面にはコビオサエが顕著である。全体的に器壁が薄い。38 は布留式系甕口縁部である。器壁は薄く、端部は外面に若干突出する。また、23・24・26・28 は頸部と胴部の境に一旦段が生じる傾向が看取される。甕についてはやや古相とも思われる資料が含まれるが、壺の特徴や 10 のタイプの小型丸底壺が共伴していることから、古墳時代前期前葉～中葉頃に位置づけられると考えられる。

28-15E020 出土遺物（第 52 図 1～7）

1 は布留式系と考えられる高環坏部で、口縁部が上方に向かって立ち上がる。2 は外来系の要素をもった二重口縁壺である。7 は磨石と思われる。両面中心部には打痕のような窪みが認められる。側面には帯状に石本来の表面が表出している。蛇紋岩製である。

28-25E0170 出土遺物（第 52 図 11～22・第 53 図・第 54 図 45～55）

出土した資料は全て古式土師器である。13 は弥生時代後期から見られる鉢である。口径に比して器高が高い形状をしている。15 は小形の二重口縁壺である。胴部中位に最大径をもち、胴部上位はナデ肩で下膨れの形状を呈している。畿内系の影響を受けたものと考えられる。19 は布留式傾向の甕である。ナデ肩で、左右歪んだ球形胴部を呈し、底部は平底気味である。24 は有段式の高環の坏部で、口縁部は直線的に大きく開く。外来系と思われ、やや古相に位置づけられる。30 は口縁部が長く、浅鉢状の胴部をもつ小型丸底壺である。口縁内面には横方向に細かく連続したハケが施される。31 は 15 と同様の形状を呈し、二重口縁壺と思われる。両資料とも内面エビオサエが顕著である。35～43 は甕の破片である。口縁端部に布留式系の特徴を示すものが認められる。これらの時期であるが、全体的に古い様相が看取されるが 30 のような新しい様相をもつ小型丸底壺が含まれることから、古墳時代前期中葉～後葉頃に該当すると考えられる。

28-25E175 出土遺物（第 54 図 56）

白色研磨土師器碗である。口縁端部は丸く収められ、高台は断面三角形を呈す。いわゆる浅地タイプに該当し、12 世紀中頃に位置づけられる資料である。

28-15K024 出土遺物（第 55 図 67～71・第 56 図 72・73）

67 は複合口縁壺である。球形に近い倒卵形の胴部に頸部には 1 条突帯が貼り付けられる。直立気味のやや長い口縁側面には、大きく 2 単位の波状文が刻まれる。68 は布留式系の高環である。坏部は深く、内面に縦方向を基調とする密なミガキが施される。69 は内面に明瞭な稜をもつ小型丸底壺である。70 は高環又は二重口縁壺の口縁部である。72 は在地系の甕で、胴部下位に円形の穿孔が施される。73 が短く屈曲する口縁部に球形胴部を呈する甕である。胴部上位には円形に打ち割られた痕跡が認められる。これらの土器群は、おおむね古墳時代前期前葉の範疇で捉えられる。

28-15K100 出土遺物（第 56 図 74～77）

74 は内彎する体部、口縁部を有する土師器碗 B である。75 はナデ肩で下膨れの胴部を持つと思われる広口壺である。77 は土師器甕で、底部穿孔部付近の内面にはエビオサエ痕が顕著に残る。これらの土器は古墳時代中期末頃～後期の所産と位置づけられる。

28-15D002 出土遺物（第 57 図 78）

78 は棒状の磨石で、磨り面には細かい擦り痕が確認できる。

28-15D005 出土遺物（第 57 図 80～87）

80～82 は口縁部が内彎する土師器碗 B である。87 は甕 E に該当すると考えられ、屈曲が緩く下膨れ形状になると思われる。これらの土器群は古墳時代後期後半以降に該当するものである。

28-15D029 出土遺物（第 57 図 88～104）

88 は緑釉陶器碗で、防長産と考えられる。89・90・96 は須恵器円蓋と坏 H で、小田編年Ⅳ A 期に該当する

ものである。91 は大分市内では比較の出土数が少ない須恵器蓋 b である。94 は須恵器環 a の底部破片である。99～103 は土師器の破片資料であり、皿 c や蓋 4 等が見られる。これら資料の位置づけであるが、古いものも含まれているが須恵器環 a や蓋 b、土師器蓋 4 が認められることから主体は 9 世紀初頭頃の資料と位置づけられる。

28-1SD030/28-2SD130 出土遺物（第 58 図～第 62 図 157～177）

SD030 と SD130 は同一の溝跡である。遺物は須恵器・土師器の供膳具が圧倒的に出土量の割合を占めるが、壺や大型の甕も認められる。須恵器については蓋・環の破片は礎に転用されたものが複数見られる。特徴として、破片の縁辺部を加工している。また、越州窯系青磁碗や漆付土師器、刻書土器、鑑と思われる銅製品、巡方といった特殊製品も出土しており、これらは本遺跡を特徴づけるものと言える。図示している資料は、遺物選別時に遺構の時期を決定し得るものから代表的に選り出した資料又は上記にある特殊遺物、大道遺跡群内で出土事例が少ないものであり、全出土数から見ると極一部に過ぎない。また、資料中にはミニチュア製品が多数含まれていた。これらは溝祭祀等に使用されたと推測することができるが、明確な時期比定には資料の増加が望まれる。器種判断が困難で、報告で器台としている資料の中に古墳時代の製塩土器に該当するものが含まれる可能性があることを断っておく。遺物群の時期であるが、5 世紀代・8 世紀前半頃を所産とするものが含まれるが、主体は 8 世紀末～9 世紀初め頃になると考えられる。

1 は越州窯系青磁碗の破片である。8 は須恵器横瓶の胴部破片である。内面に閉塞部の痕跡が確認できる。15 は土師器環と思われる破片である。器面にはユビオサエ痕が顕著であり、外面には 2 条の波状文が描かれている。18 は土師器小壺 c の高台部である。底部外面に「厨」の文字が刻書されている。20～25 はミニチュア土師器の器台であり、SD030・130 からは比較的多く出土している。28・29 は銅製品であり、28 は鑑、いわゆる毛抜きと考えられる。29 は用途不明であるが、両先端部に取り付け用と考えられる穴が認められる。

30 は須恵器環蓋で、九州須恵器編年の I B 期～II 期の範疇に該当する。31 は須恵器蓋 1、36 は須恵器環 H で、これらは九州須恵器編年 IV B 期～V 期に位置づけられる。46 は須恵器長頸壺の胴部で、中位の稜は鋭角である。48 は須恵器甕 a 口縁部で、外面下位に段があり、縁は幅広になる。51 は土師器皿 a で底部内面には渦巻き状にヘラミガキが施される。60 は黒色土器 A 類焼である。体部～口縁部は直線的に伸びる。61 は弥生土器甕口縁部で、側面には多数の沈痾が認められる。西部瀬戸内系のものであると考えられる。62・63 は製塩土器である。62 には内面に布目痕を見ることができ、64～69 はミニチュア土器で鉢・器台である。64 は口径が 5cm 未満の極小品である。70 はフイゴの羽口の破片である。径は 10cm 程度の小形品と思われる。72 は小形の砥石である。仕上げ用砥石と考えられる。78 は柱状部が長いタイプの須恵器高環 A 類である。81 は製塩土器口縁部で、森田分類 I 類に該当する。外面のユビオサエは顕著である。83 は土製の玉である。中央に小さな穿孔があるが貫通はしていない。85 は土師器環 e の底部である。薄手の円盤状の底部を呈し、白みがかった色調をなす。

87 は須恵器環蓋で口縁部と体部の境に突帯状の段が認められる。九州須恵器編年 I B 期～II 期の資料と判断される。99 は石帯の巡方である。黒色で、蛇紋岩を材料とする。丁寧に磨かれている。裏面に 4 箇所、細い錐状工具による穿孔された装着痕が認められる。

104 は須恵器環 c 高台部である。底部と体部の境が屈曲し、明瞭な段が形成される。胎土は白灰色、外面の色調は淡灰黒色を呈し、軟質で焼成が良くない状態である。底部外面には「×」状の線刻が施されている。111 は須恵器壺で大宰府系分類の壺 e に区分されるものである。頸部から口縁部はラップ状に大きく開く。大宰府政庁 VI A 期に該当する。122 は土師器環 d の破片である。内外面は密なミガキにより滑らかな仕上がりである。内面に漆と推測される黒茶色の植物性有機質が付着している。123 はやや古手の土師器碗 a で外面は手持ちヘラケズリが行われ、内面には放射状のミガキが施される。129 は平瓦の破片である。外面には格子目風のタタキが、内面には布目が見られる。135 はやや大形の砥石である。図の左側の面は石材を成形するために切断されたためか、直線的な形状である。石材は安山岩と思われ、使用面は非常に滑らかである。

138は約40cmの器高を有す須恵器の甕aである。頸部から外側に開く口縁部を有す。端部上面や外面は平坦面をなし、端部下位に稜をつける。全体に同じ厚みをもつ。器形は、胴部上位の径が大きく底部へと窄まり、外面のタタキ痕は頸部～胴部上位が縦方向、胴部中部が斜方向、胴部下位～底部が縦方向と製作工程の影響が単位が分かれている。

144～156は須恵器蓋の破片である。坯蓋Ⅳ、蓋1～4の各形態が含まれる。172～177はミニチュア土器の鉢、器台である。176は製塩土器の可能性も考えられる。

28-1SD045/28-2SD145 出土遺物（第62図180～192）

SD045とSD145は遺構の確認状況から同一遺構と判断される溝跡である。180は丸底の底部から内彎する口縁部をもつ土師器碗Bである。181・182は口縁部が短く外反するタイプで、これらは古墳時代後期に該当するものと思われる。186は非常に薄い結晶片岩を丁寧に研いで仕上げられた円盤状石製品である。中央に2箇所、小さく穿孔が行われる。重さ5.2gを量る。192は弥生土器の器台脚部と思われる破片である。

28-1SD150 出土遺物（第62図193～199）

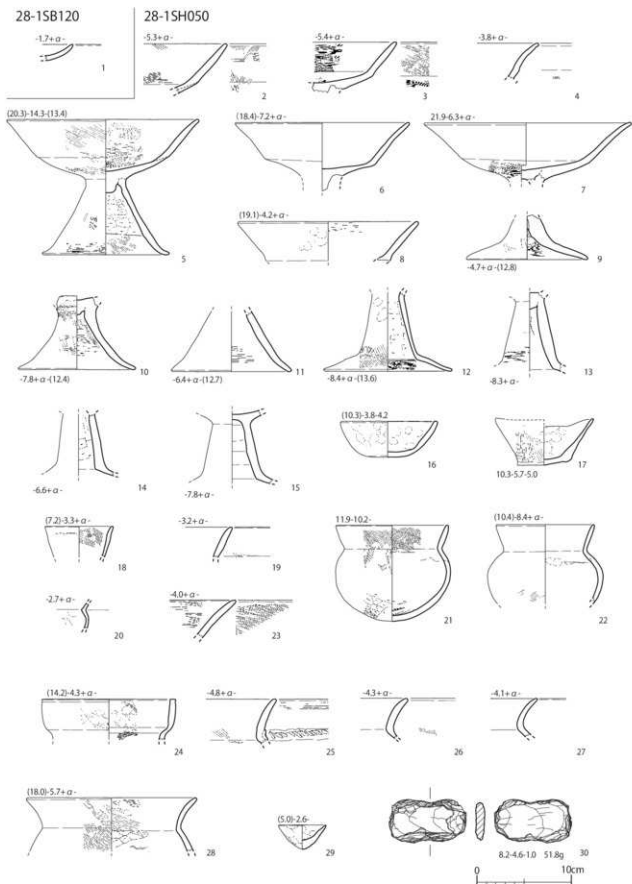
193は口縁端部に刻み目が施される深鉢である。194は口縁部下位と胴部屈曲部分に浅い沈線が見られる深鉢である。199は小形の剥片の縁辺部を加工した剥片石器である。重量は5.7gを量る。

28-1SD166 出土遺物（第62図200・201）

201は土師器高環の柱状部の破片である。表面は面取り風に整形されており平面六角形を呈している。都城系土師器に該当するものである。

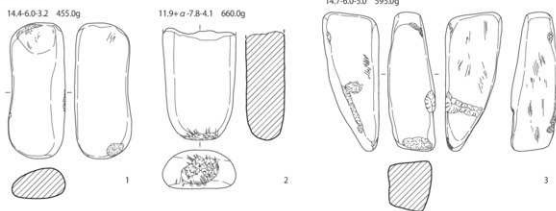
その他遺構の出土遺物（第63図）

3は28-1SX027から出土した土師器の壺又は甕の胴部から底部の破片である。茶白色を呈し、胎土中の混和材は比較的少ない。底部は平底に近く、下膨れの形状をなす。大宰府分類の小甕aの一群に該当すると考えられる。7は28-1SX028から出土した高甕aである。口縁端部は短く突出し、沈線状に窪む。9は28-1SX028から出土した製塩土器の脚部である。古墳時代の所産である。20は28-1SX036から出土した須恵器円面碗の脚部と思われる資料である。26は28-1SX037から出土した須恵器甕破片からの転用碗である。内外の縁辺部を打ち欠き、風字状になるように加工している。内面の当て具痕は使用のために磨耗している。



第 46 図 第 28 次掘立柱建物跡・竪穴建物跡遺物実測図 (1/4)

28-1SH050

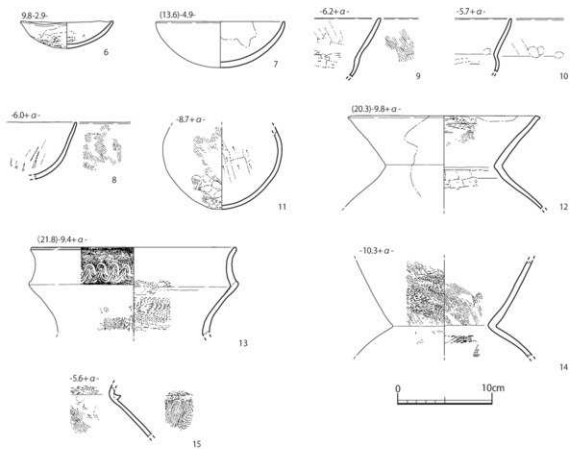


28-1SH059



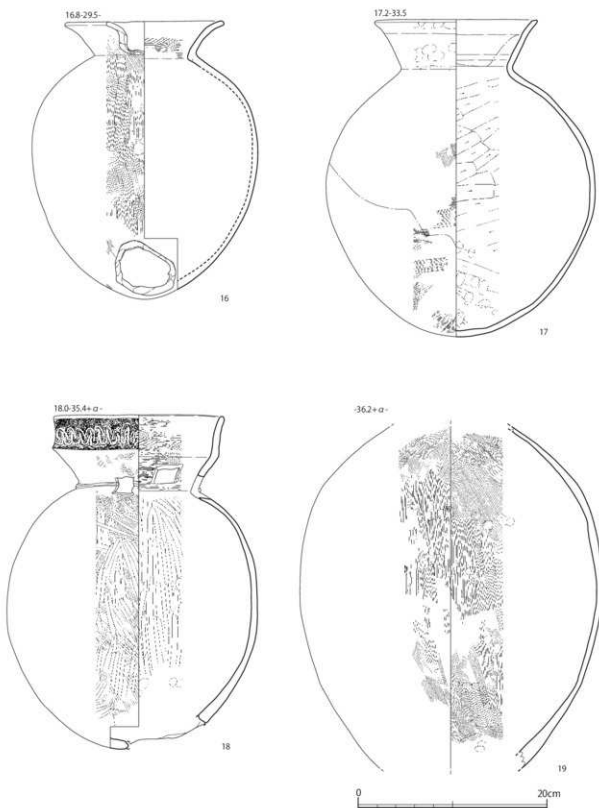
第 47 図 竪穴建物跡遺物実測図 (1/4)

28-1SE010

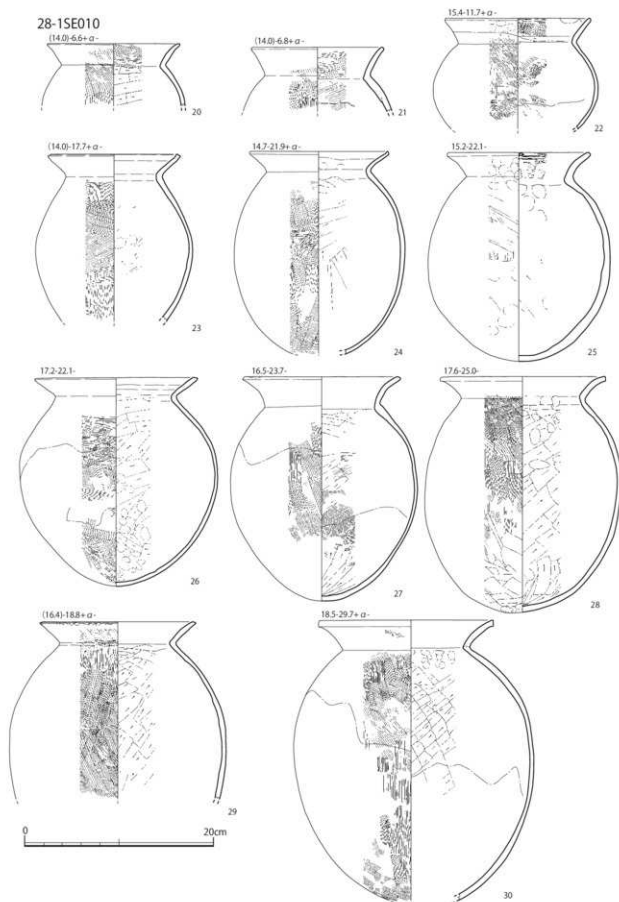


第 48 図 第 28 次井戸跡遺物実測図 1 (1/4)

28-15E010

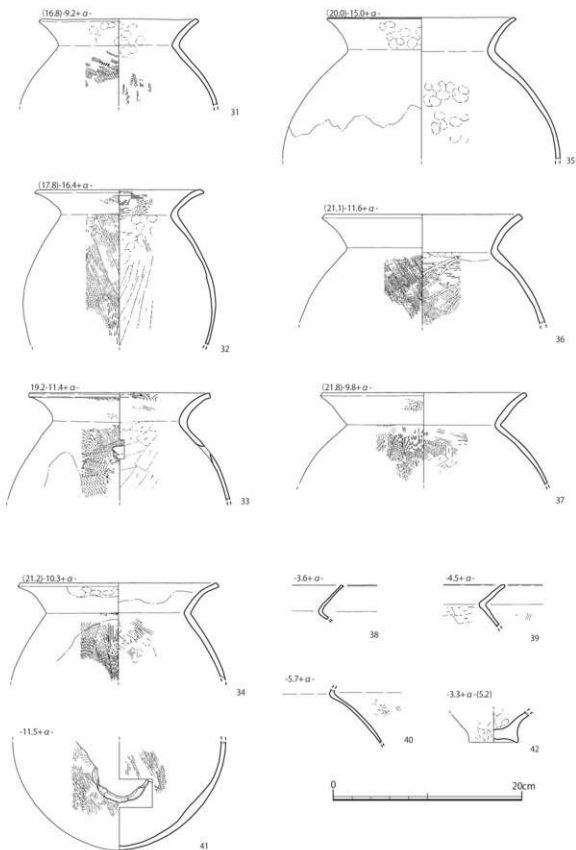


第 49 図 第 28 次井戸跡遺物実測図 2 (1/4)



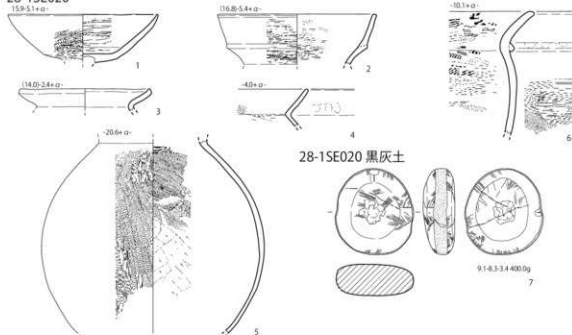
第50図 第28次井戸跡遺物実測図3 (1/4)

28-1SE010



第 51 図 第 28 次井戸跡遺物実測図 4 (1/4)

28-1SE020

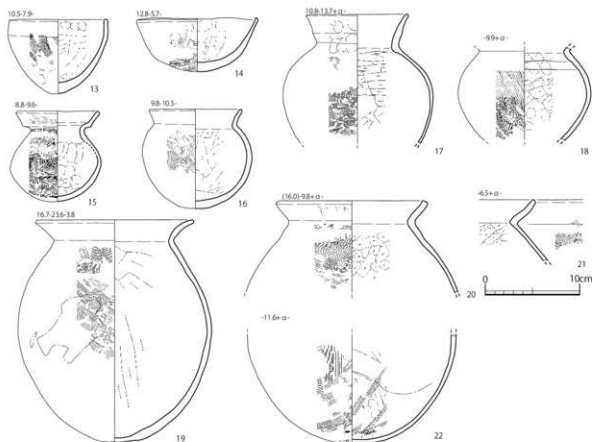


28-1SE020 黒灰土

28-2SE165

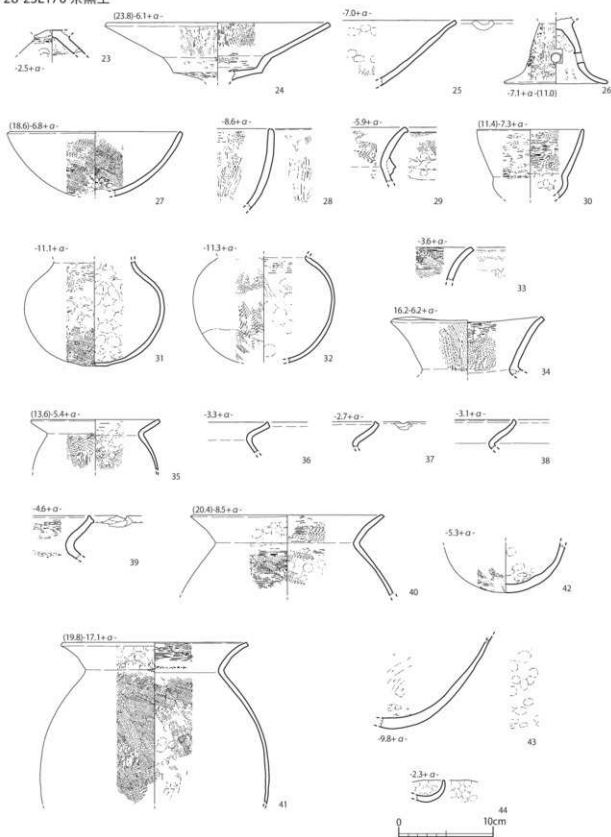


28-2SE170



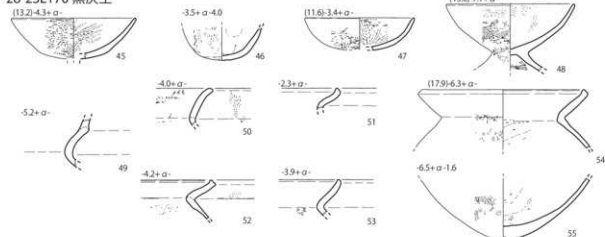
第52図 第28次井戸跡遺物実測図5 (1/4)

28-2SE170 茶黒土



第 53 図 第 28 次井戸跡遺物実測図 6 (1/4)

28-2SE170 黒灰土



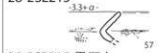
28-2SE175 灰色砂



28-2SE220



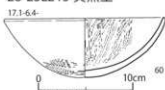
28-2SE215



28-2SE215 黒灰土



28-2SE215 黄黒土

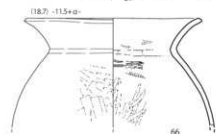
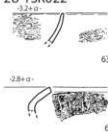


第54図 第28次井戸跡遺物実測図7 (1/4)

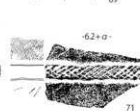
28-1SK018



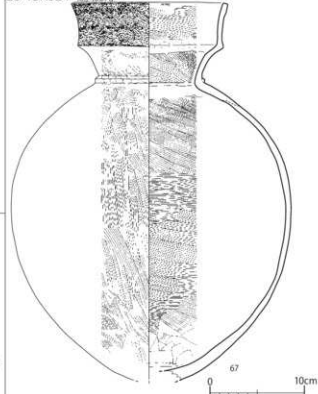
28-1SK022



28-1SK024 黒灰土

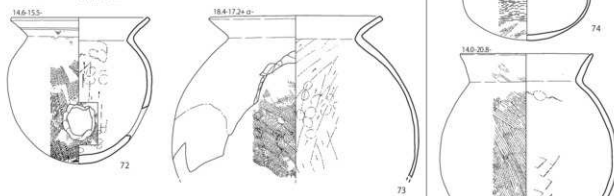


28-1SK024

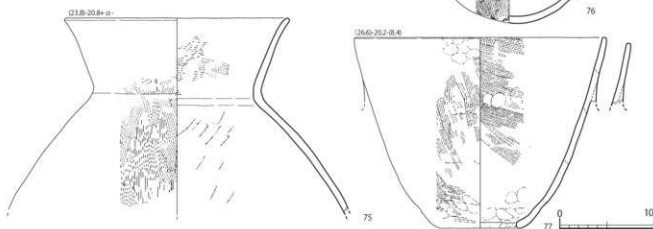


第55図 第28次土坑遺物実測図1 (1/4)

28-15K024 黒灰土

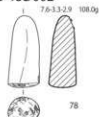


28-15K100



第56図 第28次土坑遺物実測図2 (1/4)

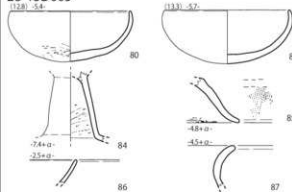
28-15D002



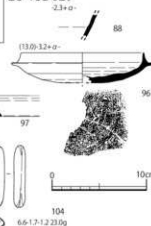
28-15D003



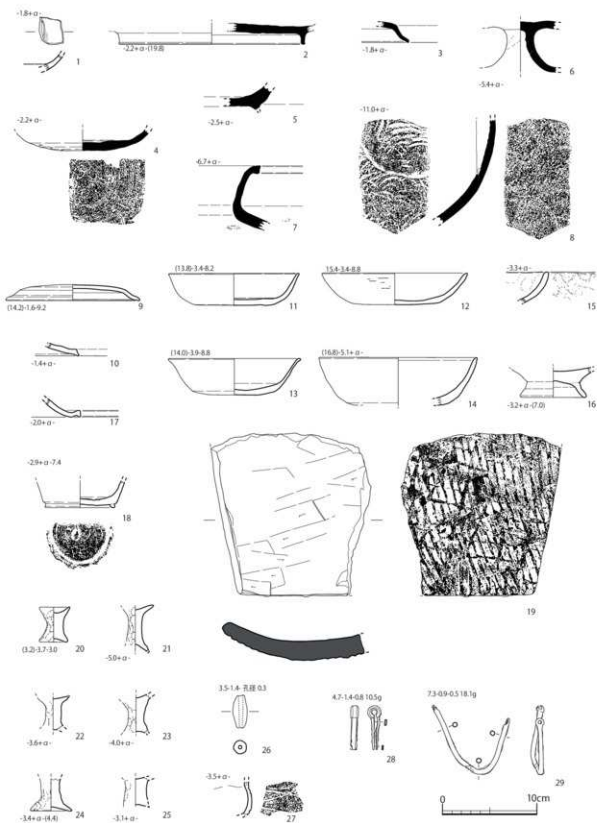
28-15D005



28-15D029

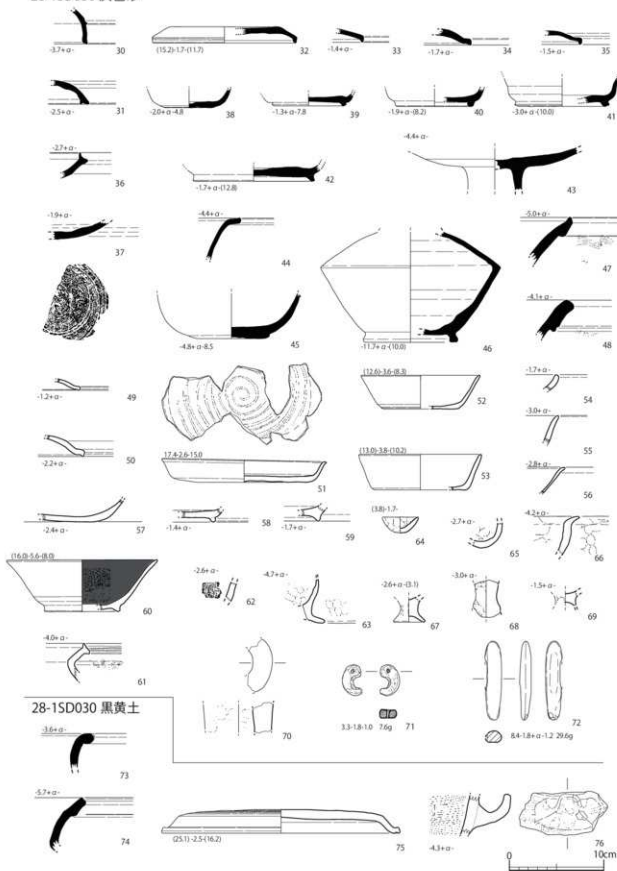


第57図 第28次溝跡遺物実測図1 (1/4)



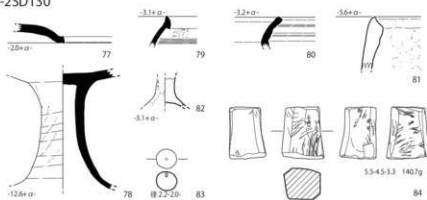
第 58 图 第 28 次满跡遺物実測図 2 (1/4)

28-1SD030 灰色砂

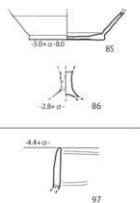


第 59 図 第 28 次調査遺物実測図 3 (1/4)

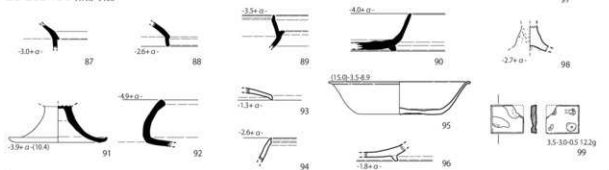
28-2SD130



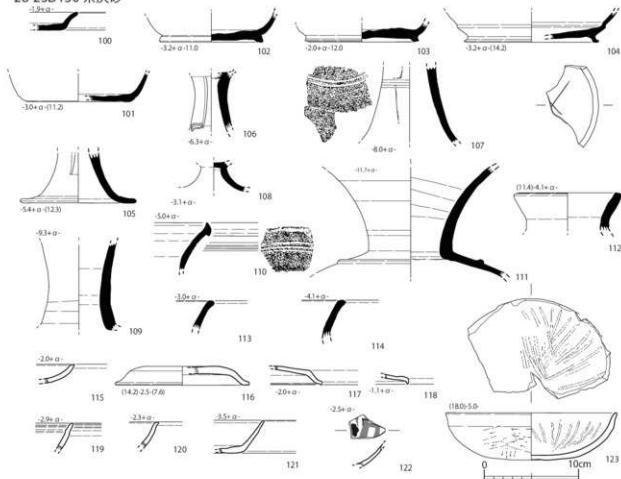
28-2SD130①



28-2SD130 黒灰粘

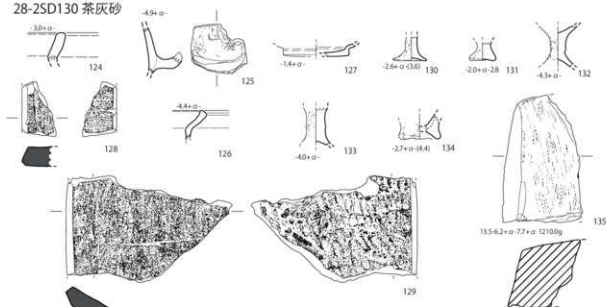


28-2SD130 茶灰砂

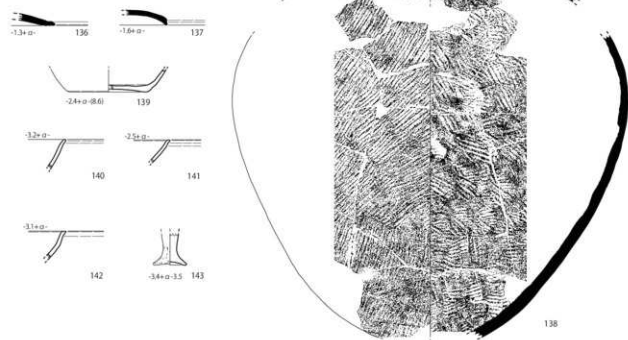


第60図 第28次溝跡遺物実測図4 (1/4)

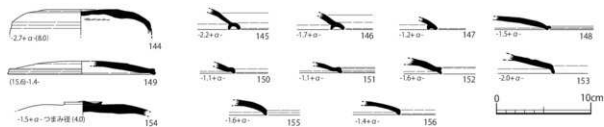
28-2SD130 茶灰砂



28-2SD130 灰色粘

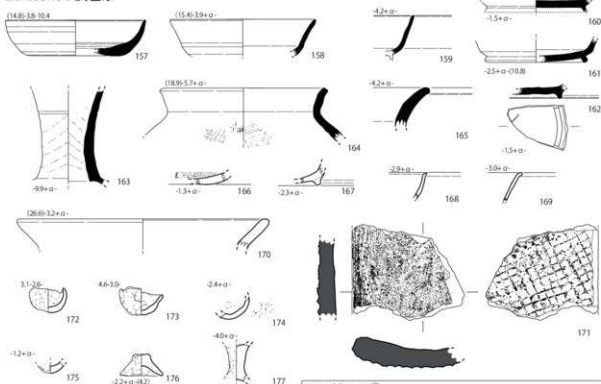


28-2SD130 灰色砂



第 61 図 第 28 次調査遺物実測図 5 (1/4)

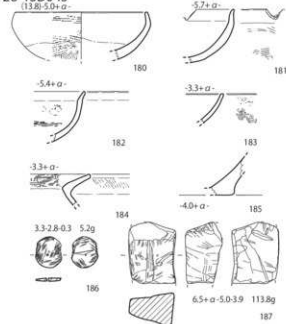
28-2SD130 灰色砂



28-1SD031



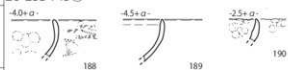
28-1SD045



28-2SD166



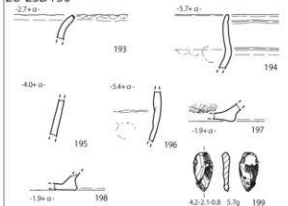
28-2SD145①



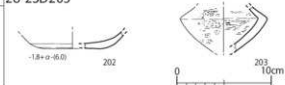
28-2SD145 淡黒土



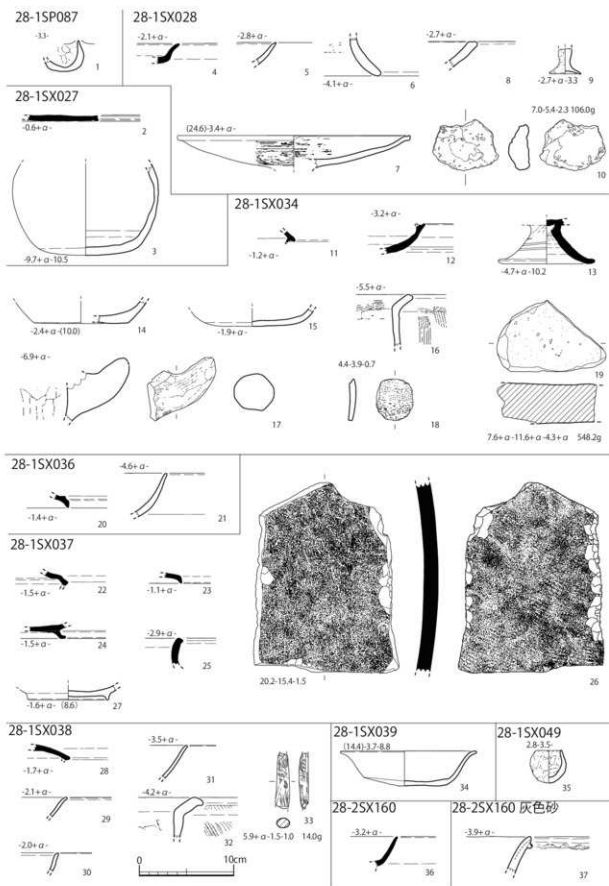
28-2SD150



28-2SD205



第 62 図 第 28 次満跡遺物実測図 6 (1/4)



第 63 図 第 28 次その他の遺構出土遺物実測図 (1/4)

第6表 大道遺跡群第28次調査遺構台帳1

S番号	遺構番号	種別	出土遺物	新旧関係	時期	地区重
1		溝		1→カクラン	近現代	N6
2	SD002	溝跡	磨り石?	22.8→2→3		T8
3		溝状遺構	ミニチュア土器器台×製土器	2→3		R7
4		溝状遺構	古式土器器破片 不明土製品			R7
5	SD005	溝跡	土器器柄B	5→90	8世紀後半～	L8
6		溝状遺構				N3
7		pit群	古式土器器破片			R8
8		溝状遺構?	弥生土器破片	8→2		T8
9		攪乱	(S10の遺物を多く含む)	10→9		M3
10	SE010	井戸跡	古式土器器(布置式系)・複合口縁壺・小型丸底壺	10→9	古墳時代前期	M3
11		溝状遺構	古式土器器破片	11→カクラン		R5
12		凹み S1残り	肥前染付碗 国産陶器破片		近世	O5
13		溝状遺構	古式土器器破片			T10
14		pit	古式土器器破片			R9
15	SK015	土坑	古式土器器破片			N3
16		溝状遺構	土器器台・須惠器破片 古式土器器破片		古代?	O8
17		pit群	土器器台(金校型)		古代?	O9
18		溝状遺構	須惠器破片 ミニチュア土器柄	18→カクラン	古墳時代後期?	N4
19		pit	古式土器器破片			N3
20	SE020	井戸跡	古式土器器高坪 二重口縁壺 磨り石		古墳時代前期	S6
21	SK021	土坑	古式土器器破片(波状文あり)		古墳時代前期?	P11
22	SK022	土坑	古式土器器鉢・壺		古墳時代前期	T8
23	SK023	土坑	ミニチュア土器・高坪脚			S12
24	SK024	土坑	古式土器複合口縁壺・小型丸底壺		古墳時代前期	O10
25	SD025	溝跡	古式土器器破片 弥生土器(割目突帯)	25→52		P8
26						
27	SK027	土坑状	土器器台・鉢 須惠器蓋?	27→30	古代	N17
28	S30		土器器台・鉢c・壺5・壺b 須惠器皿a 鉢澤		8世紀末～9世紀前半	N17
29	SD029	溝状遺構	須惠器壺b・坪c 壺(荒庵座)・転用碗 縁軸陶器	30→29	9世紀頃	O16
30	SD030 (=SD130)	溝跡	須惠器坪c・壺3・黒色土器A類碗 銅製品鉢	27.34.35→30→29	～9世紀前半頃	S13
31	SD031	溝状遺構	土器器台 ミニチュア土器柄	45→31	古代	R15
32		溝状遺構	古式土器器破片	44→32→カクラン		P17
33		溝状遺構	土器器壺5 須惠器高坪	25.36.39.49.92.145→33	8世紀末～9世紀前半	O13
34	SX034	溝状遺構	土器器台・坪a 須惠器壺1・高坪	34→30	8世紀末～9世紀前半	R13
35	SK035	土坑		35→30		R14
36		凹み	土器器台d 須惠器円面碗?	36→30		O14
37	SX037	方形プラン	須惠器壺面碗・壺・壺3 土器器柄	37→30	8世紀後半～	P15
38	SX038	S30関連遺構	土器器台・坪a・壺b 須惠器壺1・坪壺 棒状石製品	38→30	8世紀末～9世紀前半	O14
39	SK039	S30関連遺構	土器器坪a	39→30	～9世紀初頭	O14
40	SF040	道路状遺構				P15～
41	SF041	道路状遺構(波板凹凸面?)	獣骨(牛歯) 土器器坪 須惠器高坪脚・壺		古代	O16
42	SF042	道路状遺構(波板凹凸面?)				P17
43	SF043	道路状遺構	土器器坪c・高坪脚 須惠器坪H 玉砂利		古代	Q16
44		凹み 波板	土器器大形土器破片	44→32		P17
45	SD045 (=SD145)	溝跡	土器器坪B 須惠器坪H 円盤状石製品	31→45	6世紀後半頃	R16
46		波板?(新しい?)	土器器破片	46→攪乱		M16

第7表 大道遺跡群第28次調査遺構台帳2

S番号	遺構番号	種別	出土遺物	新旧関係	時期	地区番
47		凹み	古式土師器壺(布留式系) 不明石製品			O17
48		波板焼き?	土師器破片	48→攪乱		P16
49			須恵器 ミニチュア土器壺 フレーク(サヌカイ?)			
50	SH050	竪穴建物	古式土師器高坏・小型丸底壺・磨り石		古墳時代中期 初め頃	Q12
51		pit群	古式土師器破片			L4
52		凹み	古式土師器破片	25→52		O12
53		凹み	古式土師器破片			N16
54		pit				O13
55	SB055	掘立柱建物跡 竪 穴建物柱穴のみ	古式土師器壺破片			R11
56		pit	古式土師器壺破片			P18
57		攪乱	陶胎染付碗			R13
58	SH058	竪穴建物?	古式土師器壺破片	58→攪乱	古墳時代前期?	J10
59	SH059	竪穴建物	土師器甗B	59→145	古墳時代中期 ～後期	K12
60	SB060	掘立柱建物跡	土師器壺破片			S11
61		pit群	古式土師器破片			K12
62		溝状遺構				J7
63		溝状遺構				J7
64		溝状遺構				J7
65	SB065	掘立柱建物跡 竪 穴建物柱穴のみ	古式土師器破片			R10
66		pit群	土師器小・壺5 砂利		8世紀末～9世 紀前半	N12
67		へこみ	古式土師器小型丸底壺・壺破片			O12
68		凹み	土師器 須恵器壺破片		古代	O10
69		溝状遺構?				I9
70	SB070	掘立柱建物跡 竪 穴建物柱穴のみ	古式土師器壺破片			S9
71	SA071	柱列				S12
72	SA072	柱列				Q11
73		柱列	古式土師器壺口縁			Q11
74	SA074	柱列の建物?				R15
75	SB075	掘立柱建物跡 竪 穴建物柱穴のみ				V8
76		pit S-50関連か	古式土師器壺破片			P11
77		pit群	古式土師器壺破片			O12
78	SA078	pit群 かなり深い 2本柱の主柱穴か	古式土師器壺破片	78→25.54→52		O12
79		凹み伏土坑	古式土師器壺破片	79→145		N13
80	SB080	掘立柱建物跡	古式土師器破片	80→27		T8
81		土坑 凹み S30 関係	古式土師器壺破片	81→30		O15
82		pit群 しっかりした pitの竪穴主柱 穴?	古式土師器壺破片			L12
83		土坑	青花碗(小野分類D群)	84→83→攪乱	16世紀後半頃	K11
84		pit	羽口破片	84→83		K11
85	SB085	掘立柱建物跡 竪 穴建物柱穴のみ				O8
86		pit群	土師器破片			I10
87		pit群	古式土師器小形壺 ミニチュア土器鉢×碗			H12
88		pit群	肥前染付碗(ミニチュア)		近世	H9
89		pit群	古式土師器破片			K6

第8表 大道遺跡群第28次調査遺構台帳3

S番号	遺構番号	種別	出土遺物	新旧関係	時期	地区番
90	SB090	掘立柱建物跡 堅穴建物柱穴のみ	古式土師器破片			S8
91		pit群				M6
92		凹み?	古式土師器破片	92→33		O13
93						L10
94			古式土師器小形壺			
95	SB095	掘立柱建物跡				L4
96			古式土師器破片			
97		pit	古式土師器破片			J13
98						
99						
100	SK100	S85(土坑)関連か	土師器柄B・壺・甕・瓶?		古墳時代中期末後期初め頃	O9
28-2						
101		池	国産磁器破片 国産陶器破片 瓦(須恵質)	103→101→102	近代～	I16
102		丸形土坑	白色研磨土師器 黒色土器A類椀	103→101→102		G15
103		溝	陶器破片 瓦(須恵質・土師質)	103→101	近代	G14
104		溝状遺構		104→103		H13
105	SB105	掘立柱建物跡				K10
106		溝状遺構	国産陶磁器破片 土師器杯Bn	160→106	新しい	E17
107		攪乱?	古式土師器高坏部	160→107		F17
108		攪乱?	関西系陶器破片		新しい	F16
109		攪乱	須恵器破片			G20
110	SB110	掘立柱建物跡	土師器破片	5→110		I11
111		pit群	土師器破片			I18
112		pit群	土師器破片			G18
113		pit群	土師器破片			H18
114		pit群	土師器破片			G18
115	SB115	掘立柱建物跡				J12
116		pit群	土師器破片			G17
117		pit群	須恵器杯a			I18
118		pit群	土師器破片	135→118		F16
119		pit	土師器破片			F14
120	SB120	掘立柱建物跡	古式土師器柄 土師器破片	120→145.33		N12
121		土坑	瓦	145→121→101		G14
122		pit	弥生土器破片			E17
123		凹み	肥前磁器破片		近世	L25
124		pit群 灰褐色土	土師器破片	210→124		L24
125	SD125 (=SD025)	溝跡(SD025の延長)	土師器破片 剥片(埴屋黒曜石)	125→205		M21
126		超大型土坑	肥前磁器破 国産陶器破 玉冠 磨り石		近世?	J22
127		攪乱	国産磁器破片 弥生土器破片			I21
128		溝状の凹み	土師	131.195→128	新しい?	L21
129		攪乱	土師器杯d 国産陶器破		近世?	H13
130	SD130 (=SD030)	溝跡(SD030の延長)	須恵器杯c・壺a 漆付着土師器杯 石帯 製塩土器		8世紀末～9世紀前半	H21.L19
131		pit	古式土師器破片	131→128		L20
132		pit	古式土師器破片			K19
133		pit群	古式土師器破片	30→133		K18
134		pit群	古式土師器破片			K16
135		溝跡	弥生土器破片	135→118.101		F16
136		pit	古式土師器破片			I18

第9表 大道遺跡群第28次調査遺構台帳4

S番号	遺構番号	種別	出土遺物	新旧関係	時期	地区番
137		pit	古式土師器破片			D19
138		攪乱	国産陶器破片 瓦破片	138→カクラン		O21
139		pit	須恵器蓋	125→139		N19
140	SD140	溝跡	土師器壺4		9世紀後半～	F20
141		凹み 灰色シルト 灰板?	土師器破片	166→141		L16
142		凹み 灰色シルト 灰板?	須恵器壺破片			M16
143		波板関係	土器破片			L16
144		波板関係	土師器a	144→カクラン	8世紀後半～	L16
145	SD145 (=SD045)	溝跡	土師器aB	103,121→145→ 101	6世紀後半頃	J14
146		波板関係	須恵器盤		古代	L17
147		波板関係	土師器破片			L17
148		波板関係	土師器破片			L17
149		波板関係				L17
150	SD150	溝跡	土師器壺口 縄文土器深鉢 黒曜石(腰岳)		古墳時代	E19
151		pit	土師器破片			O18
152		pit	土師器破片			P19
153		pit				L18
154		波板関係				L17
155	SD155	溝跡	土師器壺4	155→160	8世紀末～9世紀前半	F18
156		波板関係	須恵器杯・皿		古代	L17
157		波板関係	土師器破片			L17
158		波板関係	土師器破片			K18
159		pit	土師器破片	185→159		N20
160	SX160	大形方形遺構	須恵器杯・縄文土器深鉢	155→160	～8世紀前半	F17
161		凹み S130内	須恵器蓋	130→161		L18
162		S130内下部横出土坑 凹み	土師器高杯(都城系)・杯d 須恵器杯 縄文土器深鉢	?	8世紀末～9世紀前半	J19
163		下層pit	国産磁器破片		近世	J17
164		S200関連	土器破片	200→164→166		M17
165	SE165	井戸跡	瓦器類 黒色土器A類碗		古代?	P20
166		S130最下層 凹み S200	土師器杯c・杯d 須恵器杯c・杯壺・杯H 割片(安山岩)	200→164→166→ 130		M18
167		攪乱 pit				L19
168						
169						
170	SE170	井戸跡	古式土師器壺・壺・有段高杯・小型丸底壺	125→170	古墳時代前期	N19
175	SE175	井戸跡	白色研磨土師器碗	溝(125?)→175	12世紀中頃	N20
180	SD180	溝跡	国産系陶器碗	166?130?→180	近世	J20
185	SD185	溝跡	土器破片	165→185→159		O20
190	SD190	溝跡	黒色土器A類碗 須恵器壺c 土師器壺4×5 縄文土器	125→190	～9世紀前半頃	O19
195	SD195	溝跡	黒色土器A類碗 須恵器高杯	195→128	～9世紀前半頃	K20
200	SF200	道路状遺構?	土師器破片 鉄滓 同家系青磁皿 縄文土器	200→ 140,142,144,146→ 149,156,158		L16
205	SD205	溝跡	土師器杯a 縄文土器壺(注口土器) 焼土塊	125→205	古代	N22
210	SD210	溝跡	国産陶器碗(器入?) 土師器壺b	215→210→124	古代	L23
215	SE215	井戸跡	古式土師器壺・鉢	215→210	古墳時代前期	L23
220	SE220	井戸跡	土師器杯c		古代	J19

第 4 節 大道遺跡群第 31 次調査

(1) はじめに

第 31 次調査区は文化交流機能の拠点として、平成 25 年度オープンをめざして建設中である「ホルトホール大分」の敷地の東側に該当する場所であり、平成 20 年度及び 21 年度に実施された第 28 次調査、第 36 次調査の東側に隣接する。

区画整理事業以前は遊興施設が存在しており、そのため調査区内の中央～北側にかけてはコンクリート基礎杭や撤去時の掘削による掘乱坑が顕著であった。

遊興施設が撤去後、客土・砂利で整地され長期間日数が経っていたことから埋土がかなりしっており、平成 21 年 3 月に行った本調査に係る事前の確認調査ではバックホーによる掘削は困難な状態であった。この確認調査では溝跡を中心にビットなどが検出されたが、分布が疎らであったことから遺構密度は低いと推測された。

平成 21 年 6 月 19 日～24 日に機械掘削を行い、終了後、受託業者による座標測量・調査グリッドの設定作業がなされ、同月 29 日より遺構検出作業を実施したが、6 月末～7 月前半にかけては梅雨終盤期間であったことから度重なる大雨により調査区が水没することもあった。

調査では、古代に位置づけられる東西方向の溝跡や L 字状に屈曲する溝跡、掘立柱建物跡、井戸跡のほか、古墳時代前期初め頃の土器廃棄遺構、古墳時代後期の竪穴建物跡、近世の水溜め状遺構、耕作に関わる溝跡などが検出された。後述するが東西溝 SD025 は第 28 次・第 36 次調査から延長するものであり、平面プランや立地環境・分布状況から考えると、古代の大道地域の様相を知る上で重要な遺構といえる。

調査面積は約 1119 m²を測り、遺構全体図作成に伴う空中写真測量・個別図面の作成作業を終えた後、埋め戻しを行い、平成 21 年 8 月 31 日に調査を終了した。

(2) 基本層序

調査区は、区画整理以前は遊興施設が存在していたことから、調査地内に分布する土層の大部分が建物解体後の処理土層であった。その解体処理土を除去すると炭化物やコークス等が含まれる層が認められた。その下位には削平されてはいるが耕作土が、調査区南エリアに分布しており、これらの層を取り除くと基盤層である黄褐色土が確認される。この黄褐色土を遺構検出面として調査を実施した。検出面の標高はおおむね 5.0 ～ 5.1 m である。

(3) 遺構

掘立柱建物跡 (SB)

掘立柱建物跡の復元については現場での検討を基本に行ったが、担当者の力量及び時間的制約から十分とは言えない結果となっている。報告書作成段階で図上で再度検討を試みたが、掘乱坑により遺構間が寸断されていることで建物構成する柱穴が部分的であり、そのため図上では柱穴が広範囲に規則的に配置されるように見え、どれが現実的な案か定かたではない状態となってしまった。今回報告するものは柱穴配置、規模、方位などを可能な限り考慮しているが、一つの復元案として提示するものも数例含まれていることを断っておきたい。

31SB005 (第 66 図)

調査区南東部の 15 グリッドで検出された。梁行 2 間、桁行 3 間以上、身舎面積 12.8 m² + α の掘立柱建物跡で、建物主軸方向 N-18° -W の南北棟である。柱穴は直径 0.4 ～ 0.6 m のおおむね円形を呈する。柱穴 b、f において柱痕が検出されており、直径 0.15 ～ 0.2 m の円形である。柱痕の位置において、柱筋はほぼ中軸線上に揃っており、ぶれは少ない。柱間は梁行 1.5 ～ 1.7 m、桁行 1.1 ～ 1.5 m で桁行の柱間がやや狭い。西側柱列は、近世の遺構により削平されていること、調査区外へと伸びるため確認することができなかった。柱穴 c ～ e では柱痕



第 64 図 大道遺跡群第 31 次調査遺構配置図 (1/250)



第 65 図 大道遺跡群第 31 次調査遺構全体図 (1/250)

が検出されなかったが、断面形状から柱が据えられたと推測される痕跡が認められる。柱穴底面において歪みは小さいものの、掘方は不整形で段掘り状を呈していることから、おそらく一度柱穴を掘り返してから柱を抜き取ったと考えられる。出土遺物には、都城系土師器皿があるが破片資料であることから時期を断定するには困難である。8世紀以降に建てられたものと推定される。

31SB010 (第67図)

調査区南東部のJ5グリッドで検出され、梁行2間、桁行1間以上、身舎面積14.8㎡+αの掘立柱建物跡で、建物主軸方向N-35°-Wの南北棟である。柱穴は直径0.5～0.6mのおおむね円形を呈する。柱穴a、d、e、fにおいて柱痕が確認されており、直径約0.2mの円形を呈する。柱痕の位置から柱筋は揃っており、ぶれは少ない。柱穴cでは底面に根石が置かれている。断面形状を見ると、柱穴d、eの柱痕は先細りであり杭の様な形をなしており、打ち込まれて据えられた感がある。柱穴c、fはフラットな底面からほぼ直角に直線的に立ち上がり、柱はほぼ中心付近に建てられる。柱間は梁行1.9～2.0m、桁行1.9mと各寸法に大差ないことから規格性をもって建てられたと推測される。柱穴a、cの間は近世に比定される遺構により掘削されており検出することができなかった。出土遺物は土師器破片であることから、詳細な時期については不明である。

31SB055 (第68図)

調査区中央G7グリッドで検出され、梁行は北側では1間、南側は2間、桁行2間の掘立柱建物跡で、建物主軸方向N-27°-Wの南北棟である。柱穴は直径0.3～0.8mの円形または不整形プランを呈する。特に柱穴c、fにおいては平面形状が歪であり、柱の抜き取り行為が行われたことにより生じた可能性が考えられる。柱痕は明確には検出されなかったが、底面で据えられていた痕跡を見ることができ、直径約0.15mに復元できる。柱間は南側梁行1.7～1.9m、北側梁行3.5m、桁行1.9～2.3mで、身舎面積15.1㎡を測る。

31SB055は北側に位置する31SB075と建物西筋を揃えるように配されており、両建物間にある31SP159により2棟は繋がっているような状況も想定される。この31SP159の対になる場所は掘乱坑で掘削されているため柱穴は検出できなかったが、ここに柱穴が存在したと仮定するならば31SB055～31SB075は南北方向に長い、梁行2間・桁行6間の規模を有した一つの建物となることと推測できる。そうであるとなると、現状でSB055の北側が1間であることの理解が可能となる。

柱穴の埋土から土師器坪aが出土していることから、時期については、おおむね9世紀前半頃に位置づけられる。

31SB060 (第68図)

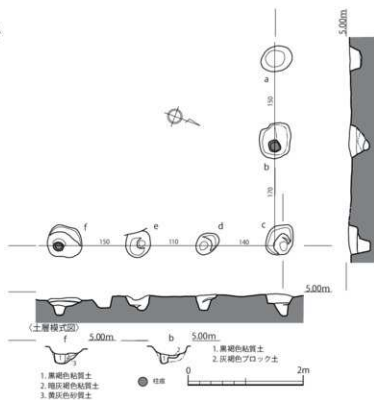
調査区中央G5グリッドで検出され、東側柱穴列が31SE035により削平される。南北2間、東西2間の総柱と推測される掘立柱建物跡で、建物主軸方向N-28°-Wをとる。各柱間は北辺で1.8m、西辺で1.6・1.65m、南辺は1.45・1.65m、中心辺1.65・1.55m、身舎面積約10㎡と柱間は近似する寸法であるが、小規模である。柱穴は直径0.45～0.6mのほぼ円形を呈し、深さ約0.15～0.3mを測る。柱穴a、b、c、e、iにおいて柱痕が確認され、直径約0.15～0.2mの円形である。柱穴の多くが段掘り状をなすが、おそらく柱の抜き取り行為によるものと考えられる。柱筋については南側及び西側は比較的揃っている。

出土遺物に土師器坪aが見られること及び31SE035との新旧関係から9世紀前半頃には機能を停止したものと考えられる。

31SB075 (第69図)

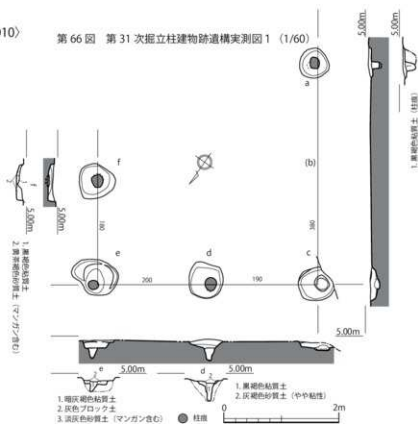
調査区西側中央F9グリッドで検出され、梁行2間、桁行2間+αの掘立柱建物跡である。建物の主軸方向はN-58°-Eをとる東西棟である。掘乱坑により一部を掘削されているが、これ以上柱穴列が東西方向に延長されないことから桁行は3間でおさまるものと推測される。柱間は北辺で1.9・4.1m、西辺で2.2・2.15m、南辺で

〈SB005〉



〈SB010〉

第 66 図 第 31 次掘立柱建物跡遺構実測図 1 (1/60)



第 67 図 第 31 次掘立柱建物跡遺構実測図 2 (1/60)

1.9×2.25 m、身舎面積 24.9 m²を測る。柱穴は約 0.5～0.7 m の不整円形もしくは隅丸長方形を呈す。柱穴 a、h では断面形状から柱の抜き取りが行われたと考えられる。その他の柱穴でも柱痕は確認できなかったが、柱穴 f や i の掘り方などから 0.15 m 程度であったと思われる。南側と西側の柱穴列は底面の掘削深度にムラがなく安定している。

出土遺物から 8 世紀後半以降に構築されたと考えられる。

31SB080 (第 69 図)

調査区北西付近 H10 グリッドで検出され、東西 1 間、南北 2 間の掘立柱建物跡で、建物主軸方向 N-22°-W をとる南北棟である。北側柱列については、西側に位置する 31SP189 まで延長する可能性もあるが、このビットに対して対になるものが見られなかったことから現状規模に留めておきたい。また南側柱列も東にある 31SP131・146 まで延長される可能性もある。柱間は 3.5 m と 4 m の 2 つの寸法が存在し、身舎面積は 32 m²である。柱穴は約 0.5～0.7 m の不整円形や隅丸長方形で、柱穴 e は複数重なり合っているため一部建替えが行われた可能性が考えられる。残存深度は約 0.2～0.5 m を測る。柱穴 b、c、e において柱痕は確認でき直径約 0.15～0.2 m の円形である。その配置については南北方向に揃っている状況である。

出土遺物には黒色土器 A 類椀・土師器環があることから、9 世紀前半頃に比定される。

31SB085 (第 70 図)

調査区北東部 K9 グリッドで検出され、現状東西 1 間、南北 3 間の掘立柱建物跡で、建物主軸方向 N-13°-W をとる南北棟である。但し、北側及び南側柱穴列は掘乱坑により削平されており、柱間寸法が 3.4 m、3.9 m と広いことから間に柱穴が存在した可能性もある。桁行は 1.3～2.0 m で規格的ではない。身舎面積約 20 m²である。柱痕は検出されなかったが、掘方の形状から柱が配された状況が推測でき、やや不揃いであり若干のずれがある。また、柱穴 a、g の断面形状を見ると柱の抜き取りが行われたと考えられる。

各柱穴からは土師器環 d 破片、手持ちへラケズリを施す環破片が出土しており、帰属年代から 8 世紀末～9 世紀初頭に位置づけられる。

棚状遺構 (SA)

31SA070 (第 71 図)

調査区中央東側 J7 グリッド、SB085 の南東部で検出された、柱穴 4 基からなる延長 5.6 m の棚状遺構である、主軸方向 N-24°-W をとり、南北方向を指向する。柱穴径は 0.5～0.8 m と規模が大きいこと、柱穴 a (SP096) の東にある 31SP109 との配置状況から掘立柱建物跡を構成する可能性もある。柱穴の掘方から、柱痕は 0.1～0.15 m と考えられ、比較的ぶれは少ない。

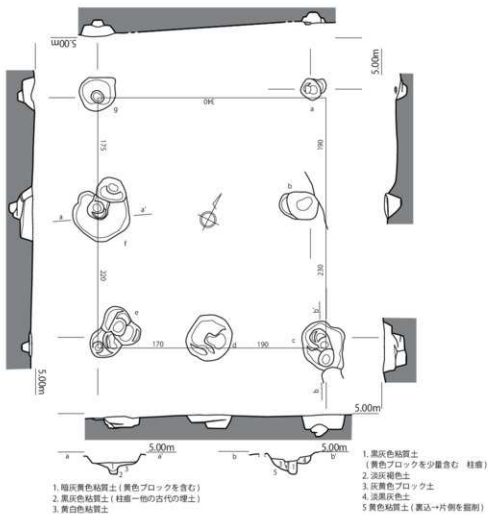
柱穴からは須恵器環破片、土師器環 a・甕破片が出土しており、その帰属年代から 8 世紀末～9 世紀前半頃に位置づけられる。

31SA090 (第 71 図)

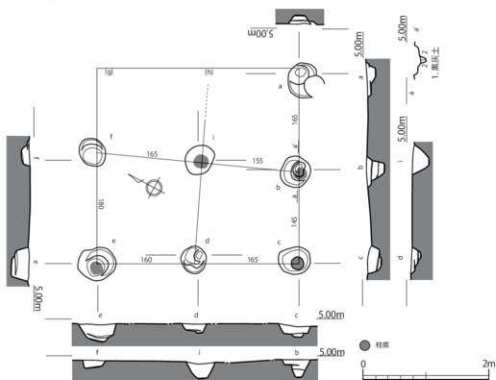
調査区北東部 K9 グリッドで 31SB085 と重なるように位置しており、南北方向に柱穴 4 基、全長 5.5 m の棚状遺構である。主軸方向は N-4°-W をとる。柱間寸法は 1.6～2.1 m であり不規則である。柱穴は直径 0.35～0.5 m の円形を呈する。柱痕は確認されていないが掘方から柱の配置が推測可能であり、やや不揃いである。

柱穴からは須恵器蓋破片が出土しており、その帰属年代から 8 世紀頃に位置づけられる。

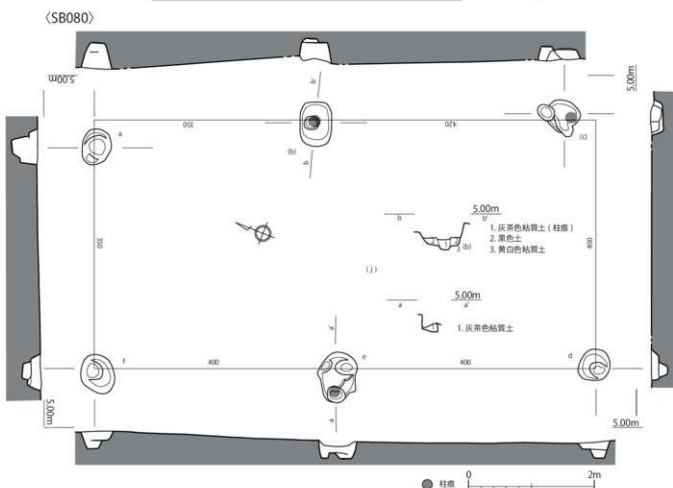
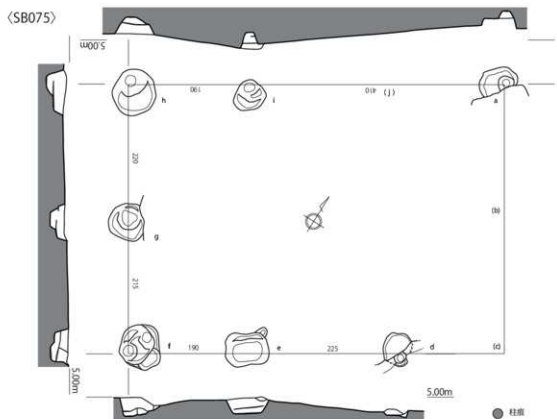
〈SB055〉



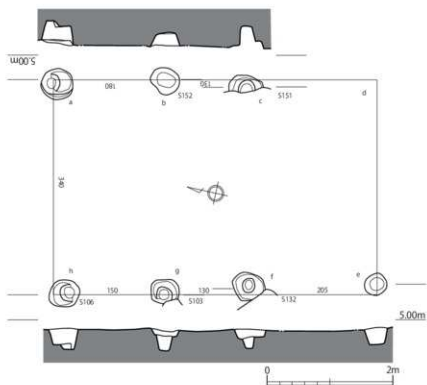
〈SB060〉



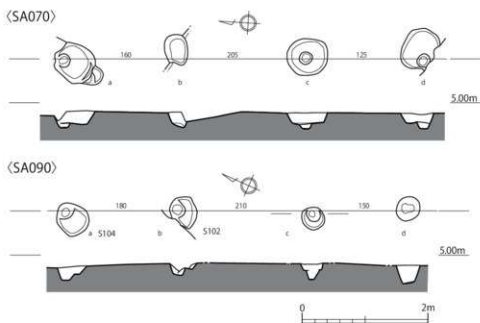
第 68 図 第 31 次掘立柱建物跡遺構実測図 3 (1/60)



第 69 図 第 31 次掘立柱建物跡遺構実測図 4 (1/60)



第 70 図 第 31 次掘立柱建物跡遺構実測図 5 (1/60)



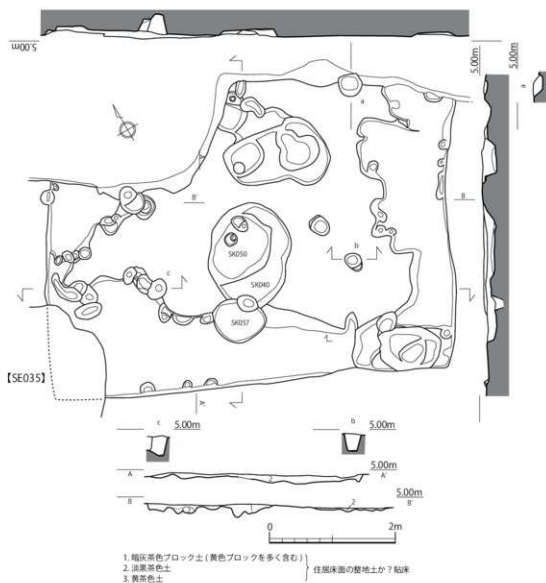
第 71 図 第 31 次櫓状遺構実測図 (1/60)

竪穴建物跡 (SH)

31SH030 (第 72 図)

調査区中央付近 16 グリッドで確認され、1 辺約 6.4 m の平面方形プランを呈す竪穴建物跡で、最大深度は 0.2 m である。検出段階から貼床面や基盤層が表出しており、このことから覆土は削平されていると考えられる。床面は、SH030 の縁辺沿いを溝状に浅く掘り窪め、その中に淡黒茶土を充填して形成している。その際棒状工具により突き固めたような痕跡が小穴となつて不規則に分布している状況が貼床面除去後の黄褐色土で確認できる。その痕跡は SH030 西辺にかけて比較的多く認められる。

内部施設としては、主柱穴 3 基 (a ~ c) が検出された。出土遺物は極めて少ないが、SH030 より古く位置づけられるピットから須恵器環 H の破片が出土していることから、おおむね古墳時代後期の範疇で捉えられる。



第 72 図 31SH030 遺構実測図 (1/60)

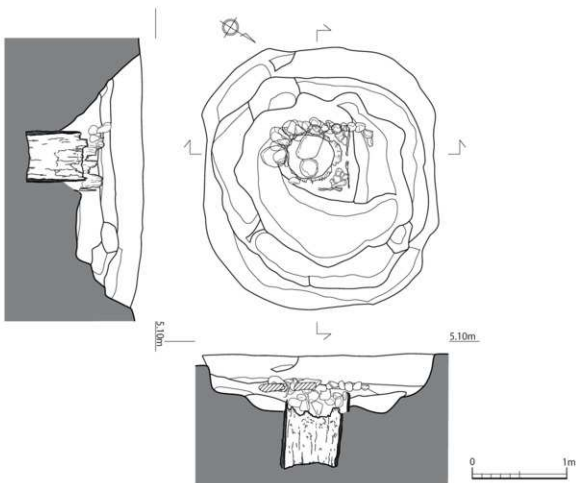
井戸跡 (SE)

31SE035 (第73図)

調査区中央 H6 グリッドで検出された。31SB060 と切り合い関係を有す。検出面での掘方は長軸 2.8 m、短軸 2.5 m の平面隅丸長方形を呈す。内部には木製の井筒部が設置されており、設置するための作業場と推測される幅 0.2 m 程の平坦部がつくられている。最深部の標高は 3.8 m である。埋土は大きく黒灰土と黒茶粘土、灰色砂に分けられる。黒灰土は検出時の土層で、黒茶粘土は井筒内部に溜まった土、灰色砂は最下層の湧水層である。灰色砂は井戸として機能段階、黒茶粘土と黒灰土は機能停止後の堆積土と考えられる。

検出段階から遺構の南側付近に礫が表出していた。掘り下げを行うと拳大から人頭程度の集石エリアが認められた。但し、石の配置が乱れて一部流れ落ちていることから現位置を保っていないと判断し、石を除去しながら掘り進めた。再び、拳大の礫による集石が表れ、やや不規則ながらも大きく 3 段の石積みが行われていた。石積みは南側が顕著であり、その他は石が点在する程度である。そして、石積みが無いまたは作りが無造作の部分は木製の板材が据え付けられていた。この石積みと板材の内側に木製の削り貫き材による井筒が確認された。井筒部は、厚さ約 5 cm、高さ約 80 cm を測り、水分を含んでいたためか取り上げる際は男性 3 ～ 4 名でやっと持ち上がるほどの重量を有していた。調査中、最下層の灰色砂は湧水が激しく、作業中は常時水中ポンプを可動しなければ瞬時に水が溜まる状態であった。灰色砂からは土器や木製品、木切れなどが出土したが、水の湧き上がりにより現位置を保っているものは少ない。

出土遺物には土師器の坏 a や坏 d、黒色土器 A 類碗などがあり、31SB060 との新旧関係及び土器の特徴から 9 世紀初め～9 世紀中頃までの範囲で捉えられる。



第73図 31SE035 遺構実測図 (1/40)

土坑 (SK)

31SK001 (第 74 図)

調査区南壁 F1 グリッドで掘乱坑を除去後に検出された土坑で、調査区外へと延び、第 31 次調査では遺構の 1/2 を検出した。現状長径 1.2 m の平面半円形を呈し、深さ 0.5 m を測る。埋土は暗黒褐色粘質土の単一層で、常に水が染み出るような状況であったことから粘性を多く含んでいた。底面はレンズ状をなし、壁面は比較的緩やかに立ち上がり、水の浸食作用などによる壁面の崩れは認められない。検出段階から複合口縁壺や壺の破片が表出しており、埋土の上面と下面に分かれるように分布していた。全て形状は把握できるものの破片資料であり、大道遺跡群で顕著にみられる完存資料が重なり合うような出土状態ではない。おそらく土と一緒に土器が廃棄されたものと考えられる。

出土遺物には安国寺式の複合口縁壺や在地系の甕・鉢の他に、布留式系甕、有段式の高坏といった外来系要素を有するものも多く含まれる。これら土器の特徴から、古墳時代前期前葉頃に埋没したと考えられる。

31SK053 (第 74 図)

調査区東側中央付近 J5 グリッドで検出され、調査区外へと延びる。現状で、長辺 1.5 m、短辺 1.2 m の平面隅丸長方形を呈し、深さは 0.5 m を測る。水平な底面から壁面は急傾斜で直線的に立ち上がる。埋土は黒黄色ブロック土の単一層である。大道遺跡群では、長方形プランを呈す大形の掘り込み遺構が多くの調査地点で確認されている。共通する特徴として、埋土がブロック土のほぼ単一層で埋められていることと出土遺物が極めて少ないといった点が挙げられる。用途は判然としませんが、耕作にともなう水溜め遺構といった可能性が指摘されており、31SK053 も同様の特徴を有す。

出土遺物中には手持ちヘラケズリを有す土師器環や古代の土師器蓋が見られるが、同特徴をもつ遺構は周辺の調査所見により中世段階に位置づけられていることから、時期については検討が必要である。

31SK065 (第 74 図)

調査区中央 H8 グリッドで検出され、遺構の北辺を掘乱坑に掘削される。東西 1.2 m、南北 0.9+α m の隅丸長方形を呈し、深さ 0.3 m を測る。底面の中央付近がやや膨らみ、壁面は緩やかに段を有しながら、西壁は直線的に、東壁は内湾気味に立ち上がる。埋土は、全体に炭・焼土を多く含み、その差異が平面では円弧上に広がるように確認された。また、土層観察では、焼土・炭層とこれらを含まない層が交互にレンズ状堆積をなしている。第 3 層では炭化物が帯状に堆積しており、第 4 層（灰茶褐色土）上面で何かを燃やしたと考えられる。その後、第 2 層（灰茶色土）で埋められるが、2 層上面でも第 3 層と同じような状況である。但し、壁面及び底面には焼成痕跡は認められない。31SK065 周辺にはビッドが数多く存在しており、掘乱坑により掘削されていなければ、建物が展開していたことが推測され、本遺構は建物に付属する施設であった可能性も指摘しておきたい。

出土遺物に土師器環 d・环蓋などが見られる。それらの特徴から 9 世紀前半頃には埋没していたと考えられる。

31SK112 (第 74 図)

調査区東側 K8 グリッドで検出され、南側を掘乱坑により掘削される。現状南北 1.6 m、東西 1.6 m の平面隅丸方形を呈し、深さは 0.8 m を測る。底面はややレンズ状で丸みをもち、西壁は屈曲しながら、東壁は直線的に立ち上がる。31SK053 と同じような特徴を有す。出土遺物が無いことから、時期については不明である。

31SK139 (第 74 図)

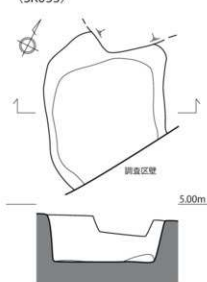
調査区北東部 K9 グリッドで検出され、31SK112 の北側に近接する。長辺 4.1 m、短辺 2.5 m の平面隅丸長方形を呈し、深さ 0.55+α m を測る。埋土は黄白色ブロック土の単一層である。大道遺跡群に共通して確認されるタイプの土坑である。

〈SK001〉

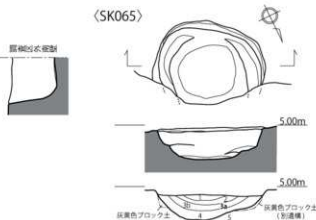


1. 暗黒褐色粘質土 (埋土 腐葉時の埋戻土か)

〈SK053〉

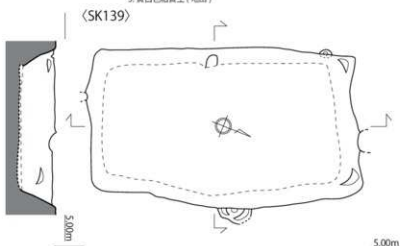


〈SK065〉

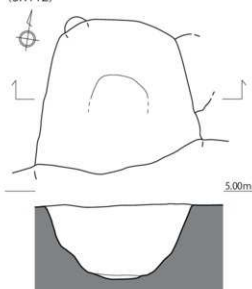


1. 灰茶色土 (焼土・灰の割合高い 骨片あり)
2. 灰茶色土 (焼土・灰をあまり含まない)
3a. 灰茶色土 (炭化物層 炭が層状に堆積)
3b. 灰茶色土 (焼土・灰の割合に変わる) → 灰茶色土
4. 灰茶褐色土 (黄色ブロックを含む 炭・焼土なし)
5. 黄白色粘質土 (地山)

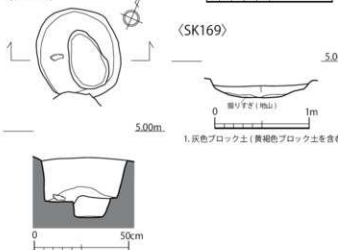
〈SK139〉



〈SK112〉



〈SK146〉



〈SK169〉



1. 灰茶ブロック土 (黄褐色ブロック土を含む)

第 74 図 第 31 次土坑道構実測図 (1/40 SK146 1/20-SK139 1/60)

出土遺物には、土師器環 a、須恵器環 c、黒色土器碗とともに緑釉陶器の皿または碗の高台部がみられる。遺物は 9 世紀代が主体であるが、周辺の調査状況からは同様の特徴を示す遺構が中世段階と推測されていることから時期を決定するには検討が必要である。

31SK146 (第 74 図)

調査区中央やや北寄り J10 グリッドで検出され、径 0.8 m を有す平面円形プランを呈し、深さ 0.6 m を測る。底面には長径 0.6 m、短径 0.4 m の不定形な楕円形をなすピット状の掘り込みが認められる。ピットが確認されるテラス部分には、須恵器環 a の破片が 1 点置かれるように出土している。

時期については、出土遺物から 9 世紀前後と考えられる。

31SK169 (第 74 図)

調査区中央やや北寄り J10 グリッドで検出された。長辺 1.2 m、短辺 1 m の平面隅丸長方形を呈し、深さ 0.18 m を測る。埋土中には基盤層である黄褐色土がブロック状に混入することから、人為的に埋め戻されたと推測される。

出土遺物は、全て土師器破片であり、時期を決定することはできなかった。

溝跡 (SD)

第 31 次調査では、主に調査区中央付近において古代及び近代の溝跡を確認した。これらの溝跡群は、ほぼ同一地点にあり、同一方向を指向している。

SD015・020 は粘質土、砂層を埋土とするものである。硬くしまっており、溝が埋没した後、道として使用された可能性がある。SD015 では木杭に木製板を横に据え付けた調水施設が確認された。肥前陶磁器が出土していることから江戸時代に位置づけられる。

31SD025 (第 65 図・第 75 図・第 76 図)

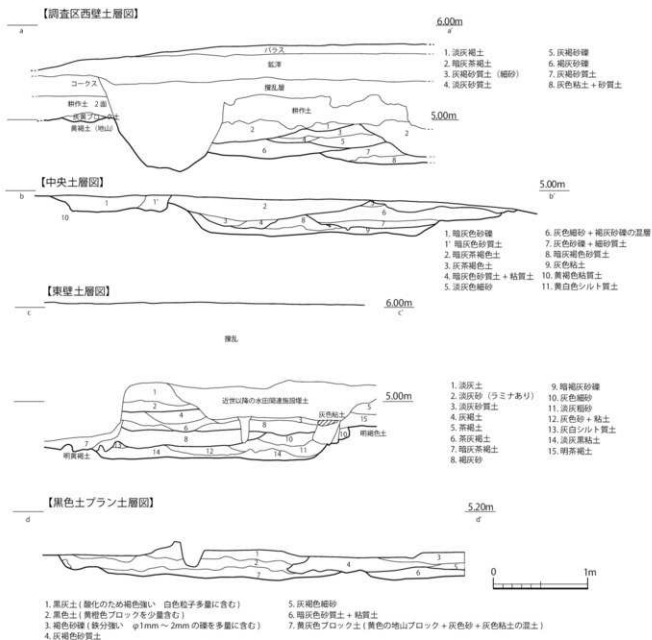
隣接する第 28 次調査 (SD030・130) からの延長部であり、調査区中央南側を東西方向に斜行する溝跡で、周辺の調査状況から総合すると、長さ 200 m 以上にわたって直線的に延伸している。

幅 4 m、検出面からの最大深度は 0.5 m、主軸方向 N-29° -W である。底面の標高は 4.5 ~ 4.6 m で、F6 グリッド付近がやや深く、東に向かって浅くなっていくが、全体的にほぼフラットな状態といえる。断面は安定した逆台形状で、北辺は急傾斜で直線的な壁面をなし、南辺は段掘り状をなしている。

土層の様子から一度掘り返しか行われている可能性がある。第 75 図調査区西壁土層図の第 3 ~ 6 層、第 75 図中央土層図の第 5 ~ 7 層が該当するものである。これらの層は、31SD025 の最も下位で表出する灰色粘土層の上位に堆積するものである。多量の粗砂が主体を占めていることから、かなりの水流があったと推測される。砂層群の上面には暗灰茶褐色土があり、焼土や炭化物が含まれることから、埋土と考えられる。31SD025 南辺沿いにおいては、底面に多数の小穴が分布している (写真図版参照)。これらは水流により動いた礫や砂により削られた痕跡と考えられ、その水流の方向は、縦断土層の観察により西から東へ流れていたと判断される。

E5 グリッド付近では一部分形状の張り出しプランが確認された。張り出し内の最下層である黄灰色ブロック土の上位に粗砂層群が堆積しており、31SD025 掘削時、少なくとも掘り返しが行われる段階には張り出し部が存在していたことになる。しかし、このプラン内では砂層の広がり看取されないことから、31SD025 で想定される程の水流は無かったと思われる。このような張り出しは第 28 次調査においても確認されており、機能については検討が必要である。

遺物は暗灰茶褐色土とその下位の砂層群から出土している。土師器、須恵器の供膳具が顕著であり、回転台利用



第75図 31SD025 土層断面実測図 (1/40)

の律令期的様相を有するものが多数であるが、その中に手持ちヘラケズリの土師器環・皿類も見られる。貯蔵具については、須恵器甕の破片が数としては多いが、個体数として捉えると少量といえる。また、感覚的ではあるものの須恵器長頸壺が多いことは特徴として挙げられる。その他、特筆するものとして土師器横瓶や瓦破片、石帯の金具である銅釦などがある。出土遺物から9世紀初め頃には埋没していたと考えられる。

31SD089 (第77図)

調査区北西端のI13グリッドからL9グリッドにかけて直線的に延び南側へ屈曲する平面逆L字状を呈す溝跡である。幅0.7～0.8m、検出面からの最大深度0.4m、直線部での主軸方向N29°Wである。断面は逆台形状で、底面には掘削時の痕跡と思われる凹凸が認められた。埋土には水流を示す痕跡はなく、区画的な機能を持っていたと推測される。遺物は全般に少ないが、古代の須恵器環破片が出土している。

(4) 出土遺物

出土遺物の概要

第 31 次調査区からは、コンテナ 28 箱分の遺物が出土している。第 28 次調査区に隣接することから、同様の遺物様相を示しており、古墳時代前期から古代に該当するものが大部分を占める。古墳時代前期の土器群は、第 28 次調査から出土したものより、やや古相に位置づけられる。古代の遺構に混入する状態で、古墳時代後期の遺物が少数ながらも確認される。古代については、第 28 次調査区から延長する大溝 (SD025) の埋土から 8 世紀末～9 世紀前半頃を中心とする遺物が数多く出土している。

以下では、主要遺構に絞って遺構の時期を示すものや特殊な遺物を中心に掲載・報告を行う。遺物の種類・名称・法量などについては、遺物観察表 (表 2・3 参照) にて報告している。遺構の時期認定に関わる遺物も表に掲載するのみとなっているものもあるが、出土遺物の全容についてはこれを参照していただきたい。ここでは、特に重要な遺物のみ詳述する。

掘立柱建物出土遺物 (第 78 図 1～20)

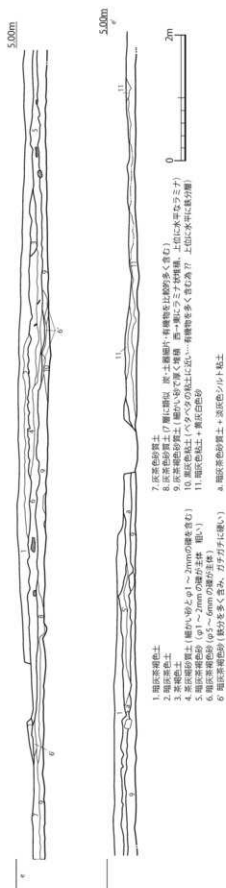
1 は 31SB005c から出土した土師器皿の破片である。内面に細く線描き状の暗文が数条確認できる。精製した胎土をもち、都城系土師器と考えられる。2～12 は 31SB055 から出土したものである。5 を除き全て土師器の破片である。坏 a・坏 d が混在している。5 は裏 b で、いわゆる企鵝型腰の口縁部である。14 は 31SB075 から出土した土師器小皿と思われる口縁部破片である。端部は断面三角形を呈し、面取り風に稜が形成される。16 は古手の土師器坏で、外面には横方向のミガキが確認される。20 は 31SB080f から出土した黒色土器 A 類碗口縁部である。直線的に開き、口縁端部は外反する。

棚状遺構出土遺物 (第 78 図 21～25)

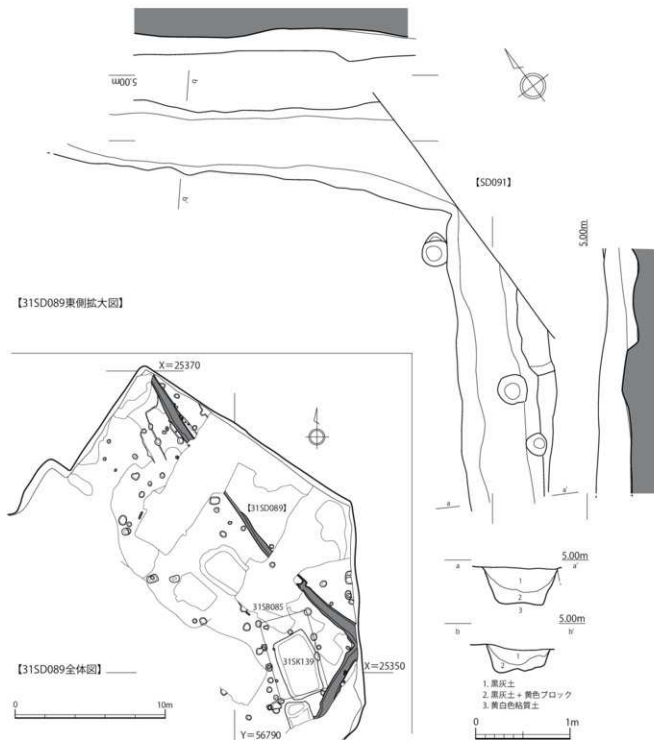
21、22 は 31SA070c から出土したものである。21 は須恵器の环蓋口縁部である。九州須恵器編年の III A 期に該当するものと思われる。22 は土師器碗 B で、外面にはハケ目が施される。23・24 は 31SA070d から出土した須恵器の蓋 1 と坏口縁部の破片である。25 は 31SA090b から出土した須恵器蓋 2 の口縁部である。

竪穴建物跡及び周辺遺構出土遺物 (第 78 図 26～28)

第 31 次調査で唯一検出された竪穴建物跡 31SH030 からは時期を確定できる遺物は出土しておらず、図示したものは、31SH030 を掘り込む溜まり状遺構 (26・27) 及び 31SH030



第 76 図 31SD025 土層断面実測図 (1/60)



第 77 図 31SD089 遺構実測図 (1/250・1/40)

の埋土除去後確認された柱穴から出土した遺物である。26 は器種不明の土製品の破片である。耳皿状に体部は曲がっており、外面にはユビオサエも認められる。27 は土師器環 a の口縁部～体部の破片である。28 は須恵器環 H の底部破片である。

31SE035 出土遺物（第 79 図 29～46）

SE035 からは図示した遺物の他に木製品が少数ながらも出土している。その中には、ツゲ製の木櫛が含まれていたが、諸般の事情により図化は今回行っていない。

上位層である黒灰土からは、土師器蓋 5（30・31）、皿 c（29）、環 d（36・37）、環 a（32・33）、黒色土器 A 類碗（39～41）などが出土している。38 は土師器小壺の高台部である。外面にはミガキ a2 が施される。39～41 は黒色土器 A 類碗の破片である。39 は外反しながら直線的に大きく開く形状をする。内外面には横方向を基調とする丁寧なミガキが行われる。40・41 は碗の高台部である。断面三角形形状をなし、体部との境目付近に接合される。丸みを有した椀部になると思われ、他の土器と比較するとやや新しく位置づけられる。42 は丸瓦の破片である。外面には格子目風のタタキが確認できる。43 は土師器蓋 a5 の完形資料である。端部は丸く退化傾向が窺える。44 は土師器環 a で、口縁端部は短く外反する。46 は黒色土器 A 類碗の高台部である。高台部と体部との接合部は打ち欠きが行われている。高台は高く、断面三角形形状を呈す。

31SK001 出土遺物（第 80 図・第 81 図 11～13）

1～10 は全て古式土師器である。2 は有段式の高環である。外面にはミガキが施される。形状・胎土から外來系のものである。3～5 は複合口縁壺である。全て口縁部は長く直立する。側面には 2～3 条の波状文が刻まれる。5 は胴部が球形をしており、内外面はミガキが密集している。6～9 は布留式系甕である。6 は口縁端部の形状は異なるが、大道遺跡群 7SK007 出土の甕に類似する。外面は縦方向後横方向のハゲが施される。7～9 はナデ肩で、胴部中位からやや下位に最大径が見られ、球形胴部を呈すものである。13 は大形の鉢で、頸部にユビで摘みながら整形された突帯が 1 条貼り付けられている。これらの土器群は、全体的には古墳時代前期前葉頃の所産に位置付けられるものである。

31SD020 出土遺物（第 82 図 1）

1 は片面視の脚部破片である。脚端部には嚙状に屈曲する。透かしの間に 1 条の沈線が認められる。類似資料が市内松岡古窯跡群出土事例にあることから、流通域を示す資料と考えられる。

31SD025 出土遺物（第 82 図 2～39・第 83 図～第 86 図 126～141）

31SD025 は第 28 次調査区で確認されている SD030・130 から延長する溝跡である。よって、時期や遺物構成は類似していることから、第 31 次調査区において発見された特徴的な遺物のみ詳細な報告を行う。その他の遺物については、遺物観察表を参照していただきたい。

2～6 は 31SD025 を検出後、切り合い関係や上位に堆積する耕作土等を除去するため一段下げを行った段階で出土した遺物である。6 は土師器の鍋口縁部と思われるが、他の遺物と時期差が看取される。内外面はユビオサエが顕著に見られ、鐙部は断面コ字状を呈す。全体的に内彎する器形をしている。

7～41 は現段階で最終埋没土である暗灰茶褐色土から出土したものである。7 は陶器皿の高台部である。底部外側は露胎で、その他は全て褐色釉がかけられる。胎土は淡灰白色である。混入品と考えられる。10 は須恵器環 c である。全体的に器壁は薄くシャープな器形をしており、金属器模倣を感じさせる。体部中位から口縁部は緩やかな S 字状をなしており、口縁端部は外反する。高台部は低く外側へ丸く突出する。16～18 は土師器皿である。全て手持ちヘラズリが行われ、17 はその痕跡が明瞭であり、体部下位は鋭く屈曲する。16、17 は平底、18 は丸底を呈し、内面は縦方向の細いミガキが確認される。20 は土師器椀 A で、外面には手持ちヘラズリが施

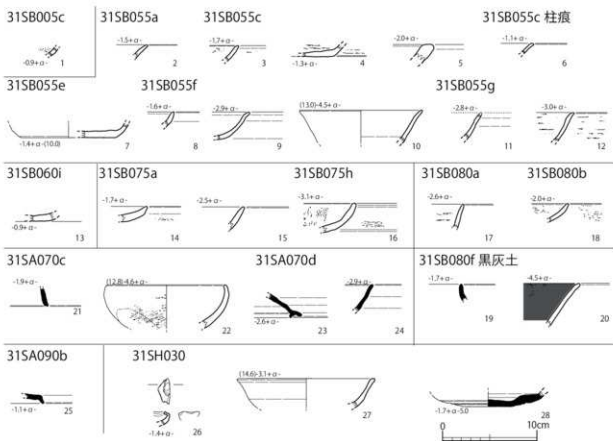
される。21 は土師器環 a で、内面には横方向のミガキが、外面体部下位においては回転台を利用したヘラケズリが行われる。22 は、土師器環であるが、丸底状を呈すと推測される。古手のタイプと考えられる。27 は土師器碗 A の系譜をもつものと思われ、体部下位には手持ちヘラケズリが認められる。24～26 は土師器環 d で、26 は精製土を使用して作られており、赤色を呈す。口縁端部が短く外反し、鉢状の体部を有する。28 は土師器の壺口縁部であるが、横瓶の可能性もある。31 は土師器甕又は鉢である。口縁端部上面は平坦で、外側に短く突出する。若干屈曲しながら胴部へと移行する。32 は白色をしており、焼成不良の態をなす甕 a である。外面にはタタキ痕が認められ、内外面にはユビオサエが顕著である。底部は平底に復元される。須恵器模倣と推測される。34 は丸瓦の破片で、凹面の布目痕、凸面には工具状ナデ痕が認められる。焼成堅緻である。39 は鉄製品で、木質が残る。錆びが付着しており器種は断定しづらいが、断面形が鋭利な三角形をしていることから刀子の可能性が高い。

42～108 は、水流痕跡を示す暗灰茶褐色砂質土から出土した遺物群である。42 は磁器で、花瓶もしくは壺の破片と判断される。外面には草文が貼り付けられる。釉調は淡緑黄灰色を、胎土は混入物が少なく淡灰黄色を呈しており、一見、龍泉窯系青磁に類似する。現段階では産地・時期ともに不明である。43～46 は須恵器環蓋である。九州須恵器編年のⅣ A～Ⅳ B 期に該当する。47 は須恵器蓋 c で、縁辺部を大きく打ち削って加工を施している。転用碗の可能性もある。49～51 は須恵器蓋 1 である。50 は一部に微細に連続した打ち欠きが行われており、碗として転用されたと考えられる。これらは九州須恵器編年のⅤ～Ⅵ期に位置づけられる。52～57 は須恵器蓋の破片で、それぞれ蓋 2～5 に分類される。58 は淡灰白色をしている須恵器環 c で、一見すると瓦質土器のように見え、胎土は白灰色をしており、還元不十分な焼成具合となっている。高台はやや高く、踏ん張るような形状をしており、端部は平坦面を有する。底部と体部の境付近は器壁が最も薄く、屈曲も強い。薄い体部から口縁端部は若干肥厚しながら丸くおさまられる。全体的にシャープな器形をしている。見込み部分は滑らかで、図示できていないが、剝離箇所は打ち欠き加工が行われており、碗として 2 次利用されたと推測される。63～66 は須恵器甕で、63 は口縁端部下位に段があり、端部上位は外方へと突出する。64 は端部が断面雪状をしている。65 は大甕の口縁部で、端部が短く上方へ突出する。66 は器高約 38 cm を有す甕 a である。

67 は土師器皿と考えられるが、全体的に器壁は厚く口縁部は短く直立する。69 は土師器環 a で、底部は手持ちヘラケズリが認められる。70 は土師器蓋 c で、天井部から体部にかけて 2 条の直線が刻まれる。76～80 は土師器環 d、78～80 は体部が内彎気味になる。82・83 は高環の脚柱状部で、82 は環部との接合部、83 は脚柱部に打ち欠きが施される。94 は軟質で茶白色をしており、成形具合から土師器と判断した。横瓶の体部で、頸部付近は横方向の細かいケズリが見られ、内面に 1 箇所閉塞部が認められる。外面は工具によるナデが行われる。95 は丸瓦で凸面は横方向の工具ナデ、凹面は布目痕が確認される。96 は凸面に格子目状のタタキが見られる。101 は球状を呈す金属品である。重量は 11.1g を量る。102 は銅製の簞である。厚さ 0.2～0.3 mm を測る。28-2SD130 からは石帯の巡方が出土していることから注目される。103 は用途不明の銅製品である。端部と思われる部分は尖り気味になっている。五徳のような脚か、又は銅製の破片と考えられる。106～108 は砥石である。全て小形で、仕上げ用として使用されたと考えられる。108 は使用面に細かい擦り痕が確認される。

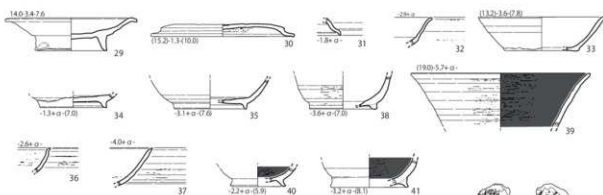
109～132 は 31SD025 の下部に堆積する灰茶褐色砂質土から出土したものである。109 は須恵器皿 c、110 は環 c で、ともに見込み部は滑らかで、高台接合部は打ち欠きにより整形されている。転用碗と判断される。111・112 は須恵器環 c で体部中位には 3 条の沈線が見られる。形状や調整から同一個体であろう。114 は須恵器高環で、環部と脚柱部は打ち欠きが施される。環部は碗として転用された可能性が高い。123 は、鉢状を呈す土師器環 d である。全体的に器壁は薄く、胎土中に混和材は少なく色調は暗橙色をなしている。内外面には横方向を基調とした細かいヘラミガキが施されている。精製品である。128～131 は瓦破片である。31SD025 からは、第 28 次地点と比較し、瓦の出土が多いといった特徴が挙げられる。また、第 31 次地点では凸面をハケ状のナデが施されているものが主体を占める。また、全て焼成堅緻といえるものである。

150 は台状の製品である。石製品のような表面色調・重量感であるが、ユビオサエのような窪みが見られることから断定できない。用途は不明であるが形状からトチン等の窯道具の可能性が考えられる。

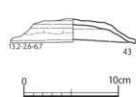


第 78 図 第 31 次建物跡・棚状遺構遺物実測図 (1/4)

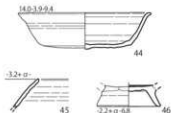
31SE035 黒灰土



31SE035 黒茶粘土

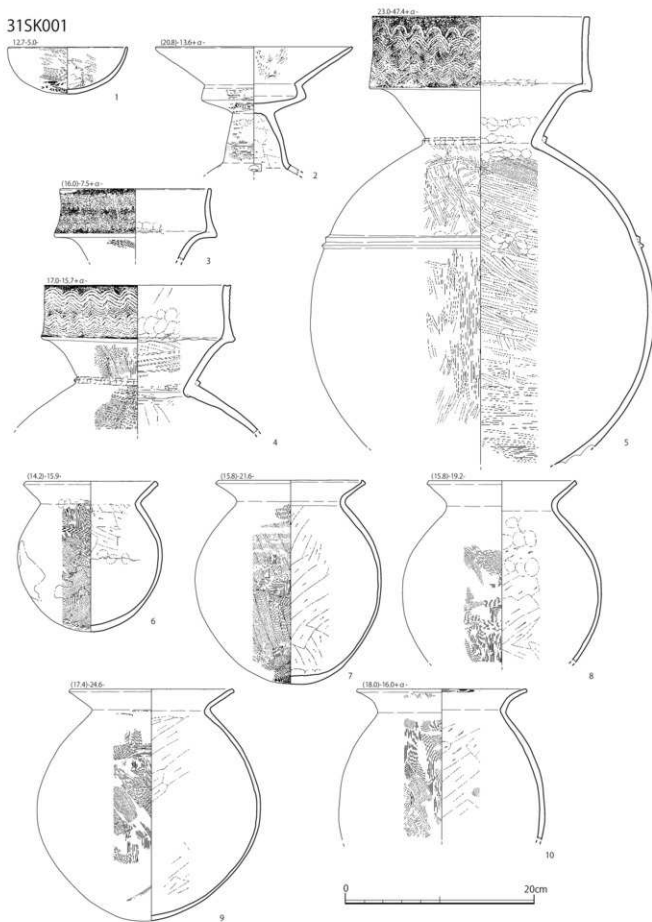


31SE035 灰色砂



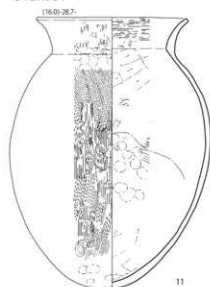
第 79 図 第 31 次井戸跡遺物実測図 (1/4)

315K001

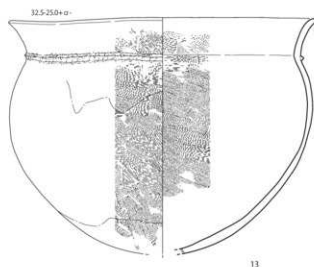


第 80 図 第 31 次土坑遺物実測図 1 (1/4)

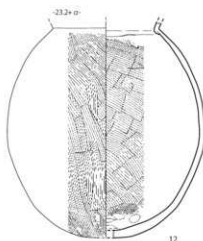
31SK001



11

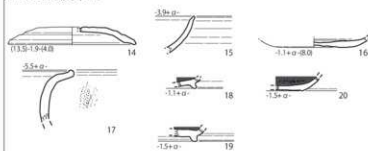


13

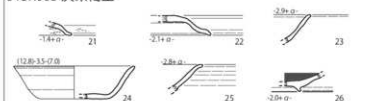


12

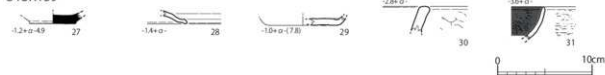
31SK065 灰茶土



31SK065 灰茶褐土



31SK139



0 10cm

第 81 図 第 31 次土坑遺物実測図 2 (1/4)

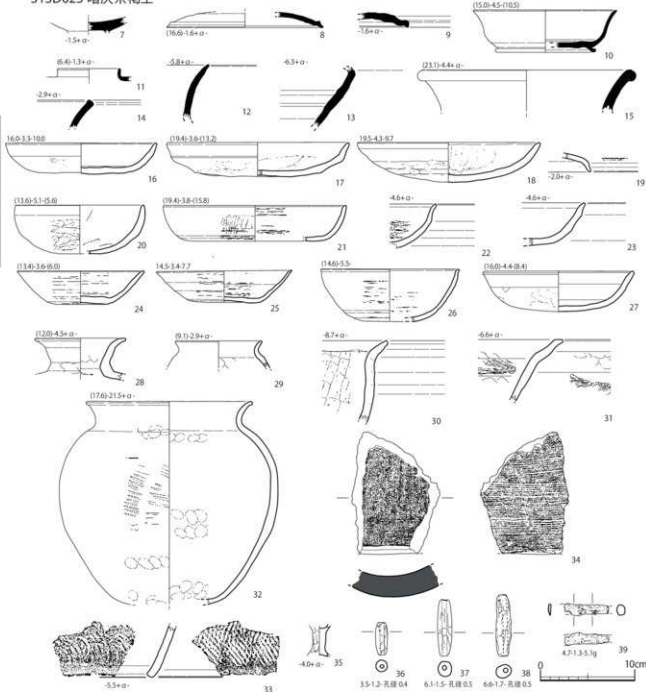
31SD020



31SD025



31SD025 暗灰茶褐土

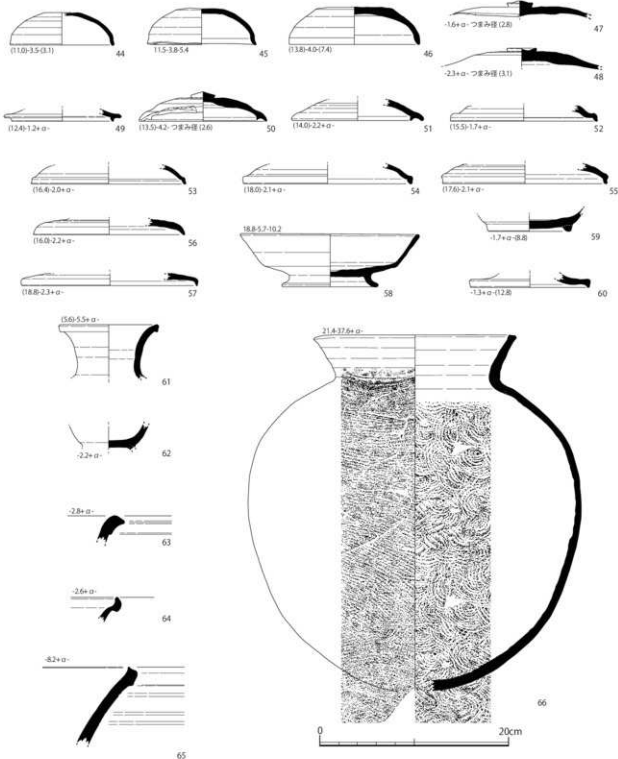
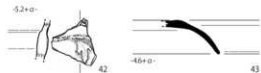


第82図 第31次満洞遺物実測図1 (1/4)

31SD025 暗灰茶褐土 (焼土プラン)

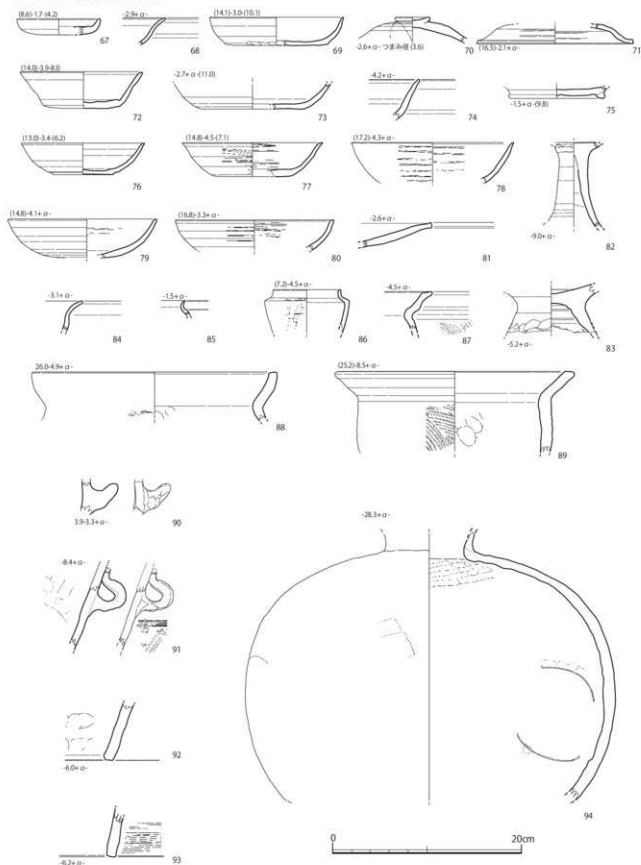


31SD025 暗灰茶褐砂質土



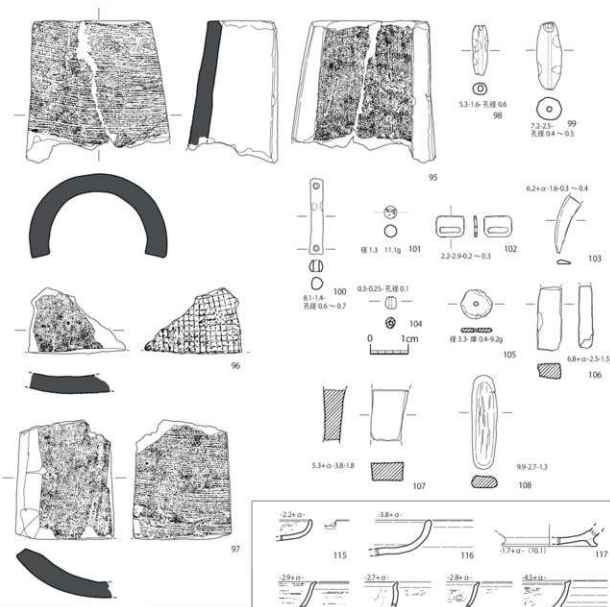
第 83 図 第 31 次調査遺物実測図 2 (1/4)

31SD025 暗灰茶褐砂質土

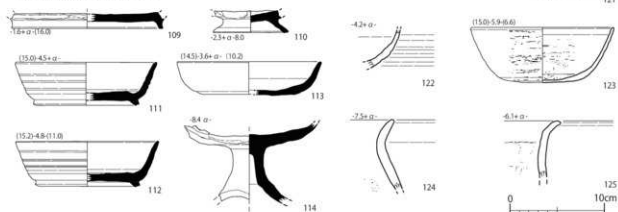


第84図 第31次溝跡遺物実測図3 (1/4)

31SD025 暗灰茶褐砂質土

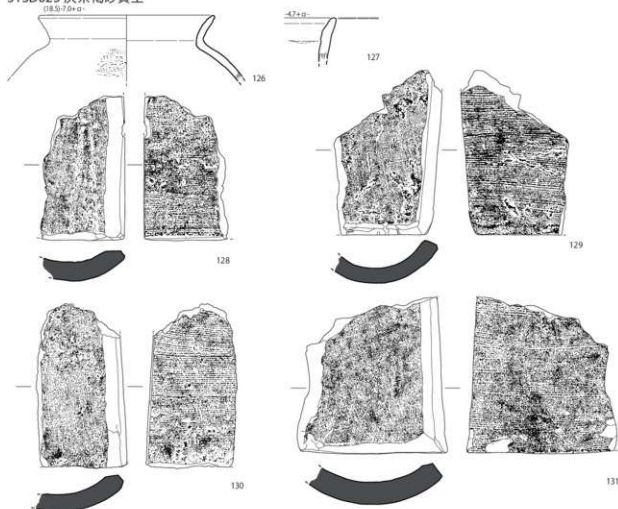


31SD025 灰茶褐砂質土

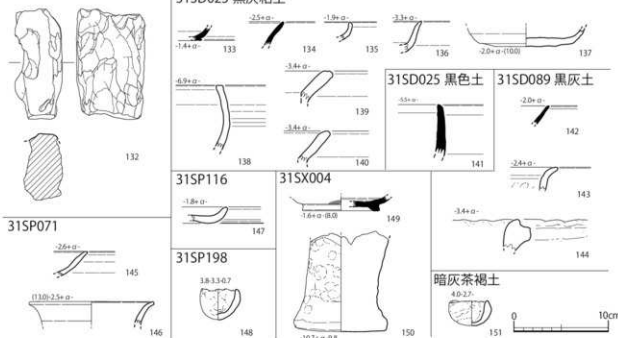


第 85 図 第 31 次満跡遺物実測図 4 (1/4-1/1)

31SD025 灰茶褐砂質土



31SD025 黒灰粘土



第 86 図 第 31 次調査・その他の遺構・遺物実測図 (1/4)

第10表 大道遺跡群第31次調査遺構台帳1

台帳番号	遺構番号	種別	主な出土遺物	新旧関係(古→新)	時期	地区番
1	SK001	供養土坑	古式土師器複合口縁壺 布雷式系甕 有段式高坏		古墳時代前期前葉	F2
2		土坑	関西系陶器破片 肥前染付碗		近世?	G2
3		ビット	弥生土器破片			E4
4	SX004	大型土坑	国産陶器破片(須・肥前) 唐洋皿(砂目) 陶胎染付碗 ミニチュア磁鉢 備前磁鉢(近世1期) 高取上野産 燧管		～近代	H4
5	SB005	掘立柱建物跡	都城系土師器皿?	5→27	8世紀代～	J5
6		土坑	土師器破片 斐波破片(金教型甕)		8世紀後半～	F3
7		ビット	肥前染付碗 瓦質土器破片		近世	H5
8		ビット	土師器破片			H5
9	SB005a	柱穴	弥生土器複合口縁壺		8世紀～	J5
10	SB010	掘立柱建物跡		10→27	古代	J5
11		大型土坑	肥前染付碗 関西系陶器破片 平瓦		18世紀代～	I3
12		ビット	弥生土器破片			F4
13		ビット群	白磁破片(近代)		近代～	F4
14		ビット	平瓦(格子目タタキ)			F4
15	SD015	溝跡	白磁碗(大宰府分類IV類) 不明金属製品(貝殻状) 肥前磁器地反碗 国産磁器鉢(プリント) 石碗 チャート製片		近代～	G4
16		ビット群	土師器破片			F5
17		ビット	弥生土器破片			F4
18		土坑	丸瓦 桶(石製)	18→19	近世?	H5
19		ビット	国産陶器破片		近世	H5
20	SD020	溝跡	肥前染付蓋碗 埴反小坏 皿C(京都系) 龍泉系系青磁碗 青磁破片(産地不明) ガラス製玉 銅製銅	20→32・44	19世紀代?	G3
21	SB010f	柱穴	土師器破片		古代	J5
22	SB010d	柱穴	土師器破片		古代	J5
23	SB005d	柱穴	土師器破片		8世紀代～	J5
24	SB005c	柱穴			8世紀代～	J5
25	SD025	溝跡	土師器破片・横瓶 須恵器破片 銅製銅 転用規 瓦	25→15・20・44	8世紀末～9世紀前半	F5
26	SB005b	柱穴	土師器甕×釜口縁部		8世紀代～	J5
27		大型土坑	レンガ 染付皿(近代)	27→4・36	～近代	H4
28	SB060c	柱穴	土師器破片		～9世紀前半	H6
29	SB060b	柱穴	須恵器甕 土師器破片		～9世紀前半	H5
30	SH030	竪穴建物	土師器破片	30→81・88・50・57・40・45・58・66・68・74・87	古墳時代中期～	H6
31	SB060a	柱穴	土師器破片		～9世紀前半	H6
32		土坑	肥前染付碗 仏像具 いぶし瓦		近代～	G3
33		ビット	弥生土器釜口・釜口			J4
34	SB010c	柱穴	土師器破片	34→27	古代	J5
35	SE035	井戸	土師器破片・蓋a・黒色土器A類碗 木桶(ツグ?)		～9世紀中頃	H6
36		溝状遺構	肥前染付碗	36→4	近世	H4
37		ビット	土師器破片			
38	SB060e	柱穴	弥生土器破片			G5
39	SB005e	柱穴	土師器破片	27→39		J4
40		土坑?	土師器破片・坏a 須恵器甕破片		8世紀後半～	I6
41	SB060c	柱穴	古式土師器破片			G5
42	SB060e	柱穴	土師器破片			G6
43		溝状遺構		43→15		F8
44		溝状遺構	白磁碗(肥前)	44→4	近世	F4
45		土坑?	土師器鉢 須恵器破片		古墳時代後期?	I7
46		溝状遺構				F7
47		ビット	弥生土器甕×甕			G7
48	SB055f	柱穴	土師器破片		8世紀後半～9世紀前半	G7

第11表 大道遺跡群第31次調査遺構台帳2

S番号	遺構番号	種別	主な出土遺物	新旧関係(古→新)	時期	地区番
49	SB055g	柱穴	土師器坪・皿		8世紀後半～9世紀前半	G8
50		土坑	土師器坪・皿×坪	50→40	8世紀後半～9世紀前半	B6
51	SB055e	柱穴	土師器坪			G7
52		ビツ		52→51		G7
53	SK053	土坑	土師器皿・坪a 須恵器坪c		8世紀後半～	K8
54		ビツ	土師器坪a・壺×壺破片	54→88	8世紀代～	J7
55	SB055	掘立柱建物跡			8世紀後半～9世紀前半	H7
56		ビツ	土師器壺破片		古代	K7
57		溜状遺構	土師器鉢破片	57→40	古墳時代	B6
58		溜状遺構	須恵器壺破片		古墳時代	I7
59		ビツ	土師器坪a底部 黒色土器A類破片		9世紀代？	J6
60	SB060	掘立柱建物跡			～9世紀前半	G5
61		ビツ	土師器坪破片		古代	H7
62		ビツ	土師器破片			G7
63	SB055b	柱穴			8世紀後半～9世紀前半	H7
64		ビツ	土師器坪口縁部 須恵器高坪脚部		古代	H7
65	SK065	土坑	土師器坪・坪a・壺・壺破片 須恵器坪c 黒色土器A類破片		～9世紀前半	H8
66		ビツ	弥生土器破片	66→58		I7
67	SA070d	溜状遺構	土師器坪口縁部・須恵器坪 須恵器壺I		8世紀後半～	K7
68		ビツ(柱痕あり)	弥生土器破片	68→58		I7
69		ビツ	弥生土器破片			K6
70	SA070	溜状遺構			8世紀後半～	J7
71		ビツ	土師器坪	71→48	古代	G7
72		ビツ	弥生土器破片			G8
73		ビツ	弥生土器破片			G8
74		ビツ	古式土師器高坪(外束系)・壺破片			I7
75	SB075	掘立柱建物跡			8世紀後半～	F9
76		ビツ	土師器皿×坪		古代	I7
77	SB055c	柱穴	土師器坪a・壺b(金匱型) 須恵器壺破片		8世紀後半～	H7
78	SB055d	柱穴				H7
79		ビツ	須恵器壺破片		古代	G7
80	SB080	掘立柱建物跡			9世紀前半～	H10
81		ビツ	土師器壺破片		古代	J6
82		ビツ	土師器壺破片	82→61	古代	G7
83		(欠番)				
84		ビツ	土師器坪a・皿	84→48	古代	F6
85	SB085	掘立柱建物跡			8世紀末～9世紀初頭	K9
86		溜状遺構？	須恵器壺a		古代	B6
87		ビツ	土師器壺×壺			I7
88		ビツ	弥生土器破片	88→54		J7
89	SD089	溝状跡	土師器壺a・坪d？ 須恵器壺・坪 黒曜石剥片・石核	89→91	古代	I13
90	SA090	溜状遺構			9世紀頃～	K9
91		溝状×溜状	土師器鉢a・皿 須恵器坪H	91	古代	L10
92		ビツ	弥生土器破片			
93		ビツ	黒色土器A類破片		9世紀代？	J9
94		ビツ	弥生土器破片			J9
95		(欠番)				
96	SA070a	柱穴	土師器坪a・壺口縁部		8世紀後半～	K8
97		ビツ	弥生土器破片			J8
98		ビツ	土師器坪 須恵器坪口縁部		古代	K8
99	SA070c	柱穴	土師器坪 須恵器坪		8世紀後半～	K8

第12表 大道遺跡群第31次調査遺構台帳3

S番号	遺構番号	種別	主な出土遺物	新旧関係(古→新)	時期	地区番
100		(欠番)				
101		ビット	弥生土器要破片			K8
102	SA090b	柱穴	須惠器蓋		古代	K9
103		ビット	土師器破片	103→102		K9
104	SA090a	柱穴	弥生土器破片			K10
105		(欠番)				
106	SB085h	ビット	土師器坏d 土師器坏(古墳)		古代	K10
107		ビット				H9
108		ビット				H9
109		ビット	土師器破片			K8
110		(欠番)				
111		ビット	弥生土器破片			K9
112	SK112	土坑	土師器坏a 須惠器蓋・壺		古代?	K8
113		ビット	土師器坏a 弥生土器破片		古代	J7
114	SB085d	柱穴	土師器要破片	114→89	古代	L9
115		(欠番)				
116		ビット	弥生土器壺口			J9
117		ビット	土師器坏a		古代	I9
118		ビット	須惠器要破片			I9
119		ビット	土師器坏a・坏c 須惠器蓋		8世紀後半～	I10
120		(欠番)				
121		ビット	土師器坏a	122→121	古代	I9
122		柱穴	土師器壺破片	122→121		I9
123		ビット	土師器坏a		古代	I9
124	SB080d	柱穴	土師器坏a・坏d		8世紀後半～9世紀前半	H9
125		(欠番)				
126		ビット	土師器破片		古代?	H9
127		ビット	土師器破片			I10
128		ビット	土師器瓶肥手		古代	L10
129	SB080e	ビット	土師器坏・壺破片 須惠器破片		8世紀後半～9世紀前半	H10
130		(欠番)				
131	SB080 c	柱穴	土師器要破片			I10
132	SA090	柱穴	土師器破片			K9
133		ビット	土師器破片			I8
134	SB075d	柱穴	土師器破片		古代	G9
135		(欠番)				
136	SB055a	柱穴	土師器坏a		8世紀後半～	H8
137		ビット	土師器破片	137→178		H8
138		ビット	土師器破片	157→138		I8
139	SK139	土坑	緑釉陶器碗 黒色土器A類碗 土師器坏d 須惠器坏c		9世紀代?	K9
140		(欠番)				
141	SB085e	柱穴	土師器壺口縁		8世紀末～9世紀初頭	K8
142		ビット	土師器破片			K8
143		ビット	土師器坏a		古代	I11
144	SB080b	柱穴	土師器皿a・坏×皿・壺 須惠器要破片	144→攪乱	9世紀前半～	I11
145		(欠番)				
146		ビット	須惠器坏a 土師器破片		古代?	J10
147		ビット	須惠器坏a 土師器破片	147→148	古代?	J12
148		層状遺構	土師器破片	147→148		J11
149		ビット	須惠器坏			J11
150		(欠番)				
151	SB085a?	柱穴	土師器破片 土師器坏a(手持ちヘラケズリ)		8世紀末～9世紀初頭	L9

第13表 大道遺跡群第31次調査遺構台帳4

S番号	遺構番号	種別	主な出土遺物	新田關係(古→新)	時期	地区番
152	SB085b	柱穴	土師器破片		8世紀末～9世紀初頭	L10
153		ビット	土師器要破片			
154		溜状遺構	土師器片・土師器要破片			B
155		(欠番)				H9
156		溜状遺構	土師器破片			H9
157		ビット	土師器破片	157→138		B
158		ビット	土師器片・要		古代	G9
159		溜状遺構	土師器片			G8
160		(欠番)				
161		ビット	土師器破片			B
162	SB075f	柱穴	土師器片		8世紀後半～	F8
163		ビット				F8
164	SB075g	柱穴	須恵器破片 土師器破片		8世紀後半～	F9
165		(欠番)				
166		溜状遺構	弥生土器破片			F9
167	SB075h	柱穴	土師器片(手持ちヘラケズリ)		8世紀後半～	F9
168	SB075i	柱穴				F9
169	SB075j	柱穴	土師器破片		8世紀後半～	J10
170		(欠番)				
171		柱穴	土師器破片			F8
172		柱穴	土師器破片			G8
173		柱穴	土師器破片	173→133		B
174		ビット	土師器	176→174		H13
175		(欠番)				
176		溜状遺構	土師器破片 須恵器破片	176→174		H13
177	SB080a	柱穴	土師器皿 須恵器片		9世紀前半～	H11
178		ビット	弥生土器破片	137→178		H8
179		ビット	土師器破片	89→179		J13
180		(欠番)				
181		ビット	弥生土器要(下城式)			L9
182		土坑	土師器破片	182→91		L11
183		ビット	土師器要頸部・片	183→91		L10
184		柱穴	土師器要	184→186		F8
185		(欠番)				
186		溜状遺構	土師器破片	184→186		F8
187		ビット				F9
188	SB075a	柱穴	土師器片・皿・碗		8世紀後半～	F9
189		ビット	土師器片			G10
190		(欠番)		189→攪乱		G11
191		柱穴	土師器片		古代	
192		ビット	土師器片	191→攪乱		H11
193		土坑	土師器破片	139→192		K9
194	SB075f	柱穴	土師器短頸壺 須恵器要×要 黒色土器A類碗		9世紀代?	J10
195		(欠番)				H10
196		柱穴	弥生土器破片			
197		ビット	土師器破片	196→攪乱		H11
198		ビット	ミニチュア土器	198→89?		J11
199		ビット	土師器要 須恵器片?			L9

第 5 節 大道遺跡群第 36 次調査

(1) はじめに

第 36 次調査区は第 28 次調査区と第 31 次調査区の間南北に延びる市道部分を調査したものである。調査対象範囲の中ほど～北側地点については、隣接調査区の状況により大規模な掘削坑が存在することが判明していることから遺跡は残存していないと判断した。そのため、調査の対象となる敷地の中ほどから南側部分を調査エリアとして設定し、実施している。調査では、隣接調査区で検出されている古代の大溝（36SD025）が、予想通り発見された。その他、南北方向に延びる掘立柱建物跡も確認されているが、全体としては遺構密度が低い状況であった。

調査面積は約 150 m²を測り、個別図面及び遺構全体図作成に伴う空中写真測量の撮影作業を終えた後、埋め戻しを行い、第 34・37 次を含め平成 22 年 3 月 16 日に調査を終了した。

(2) 基本層序

調査区は、旧市道敷であったことからアスファルト舗装されており、調査にあたっては対象エリアの舗装切断作業から開始した。アスファルト除去後、厚さ約 0.2 m の碎石整地層が表出し、碎石層を除去すると耕作土層が認められ、耕作土層を取り除くと基盤層である黄褐色土が確認される。遺構群は黄褐色土から掘り込まれていたことから、当該土層を遺構検出面とし調査を開始した。遺構検出面の標高はおおむね 5.0 ～ 5.1 m であり、周辺調査区とほぼ同様であった。

(3) 遺構

掘立柱建物跡 (SB)

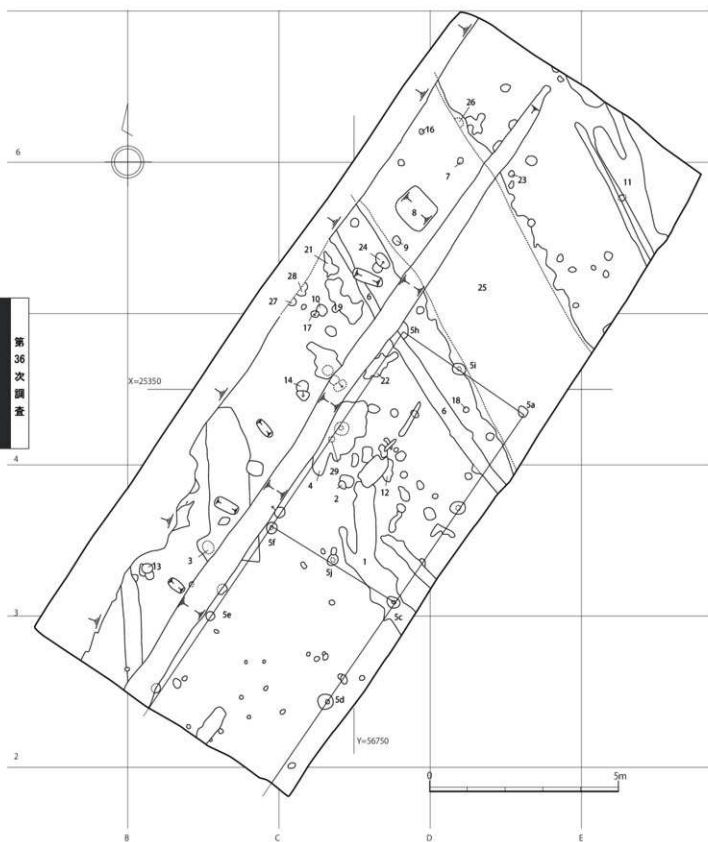
36SB005 (第 88 図)

調査区南部分 B1 グリッドから D3 グリッドで検出した梁行 2 間、桁行 3 間以上の掘立柱建物跡である。南側は調査区外のため、全体の規模は不明である。主軸方向は N-31° -E を指向する南北棟である。柱間は梁行 1.8 m ～ 0.9 m、桁行 3.08 m ～ 3.16 m を測る。柱間総距離は梁行 3.76 m、桁行 9.34 m + a である。身舎面積は現状で 35.1 m²である。柱穴の掘り方は不整形な円形を呈し、直径 0.2 m ～ 0.4 m、深さは 0.25 m ～ 0.4 m を測る。建物中央から柱穴 a・d にむけて傾斜しているが、柱穴の基底部の標高はおおよそ 5.0 m である。出土遺物は柱穴 b から土師器片と国産磁器稜花皿片が検出されている。

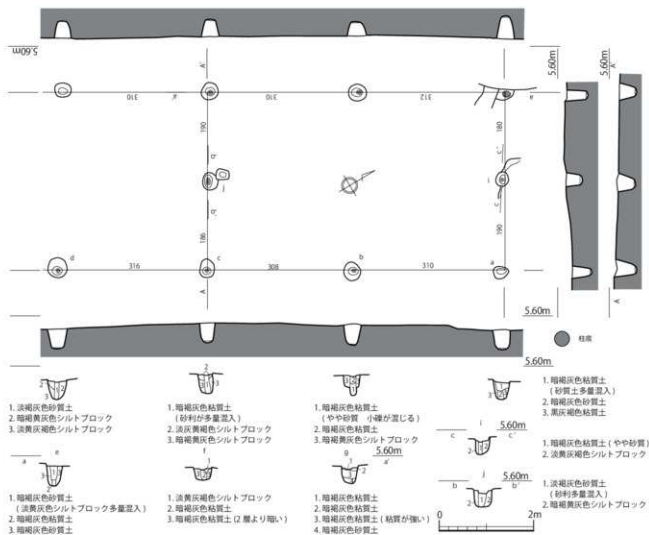
溝跡 (SD)

36SD025 (第 89 図)

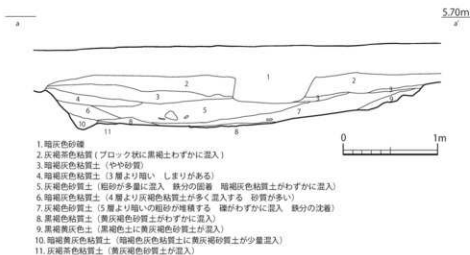
調査区中央北側 A6 グリッドから D3 グリッドにかけて検出した南北方向に斜行する大溝である。北西端は 28-2SD130 に接続し、南東端は 31SD025 に接続する。主軸方向は N-29° -W で、ほぼ直線的である。検出長約 8.0 m、幅約 4.0 m、深さ 0.6 m を測る。底面の標高は約 4.4 m である。断面形状は緩い逆台形を呈する。埋土の上位は褐灰色土を基調とした粘質土、第 5 ～ 7 層では褐灰色土で、砂質が強く粗い砂を多く含んでおり流水があったことが推定され、水路として機能していたと考えられる。土層観察から不整合が認められ、掘り返しが行われたと考えられる。他調査区と同様に 8 世紀後半から 9 世紀初頭を中心とした古代の遺物が検出されており、廃絶時期は当該期と推定される。



第 87 図 大道遺跡群第 36 次調査遺構配置図 (1/100)



第 88 図 36SB005 遺構実測図 (1/80)



第 89 図 36SD025 土層断面実測図 (1/40)

(4) 出土遺物

出土遺物の概要

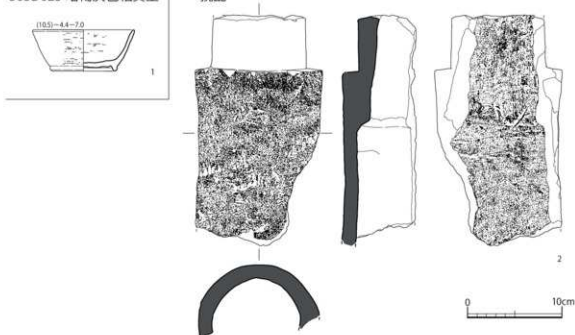
大道遺跡群第36次調査では、位置関係上、周辺調査地と同様の出土遺物の傾向が看取され、遺物の多くは古代の溝跡(36SD025)からである。よって、出土遺物の割合は8世紀末～9世紀前半代を所産とするものが多くを占める。また、少数ではあるが中世に該当する国産陶器破片が見られることから、当該時期の遺構も存在していた可能性がある。主な遺構から発見された遺物を概観すると、調査区の北東部に確認される36SD011は第31次調査で検出された31SD020の延長部であり、18世紀代以降を中心とする肥前陶磁器や福岡産の播磨等が出土している。調査区の中央付近にある掘立柱建物は構成する柱穴から国産磁器稜花皿が認められることから、近世期に位置づけられる。また、ピットなどからは古式土師器や土師器が出土しているが、いずれも破片資料であることから図示していない。

各遺構出土物については、限定的ではあるが遺構一覧表に掲載しているので参照していただきたい。

出土遺物(第90図)

1は36SD025から出土した土師器環cである。底部と体部の境に断面四角形を呈す高台が付けられる。体部中位で器壁は薄くなり、口縁部は先細り気味に尖る。体部内外面には横方向のミガキが施され、胎土も比較的精製土を使用しており、丁寧な作りである。8世紀末～9世紀前半に位置づけられる資料である。2は古代の所産の丸瓦である。攪乱坑からの出土であるが、遺跡の性格を述べる上で貴重な資料であることから図示している。凹面には布目を観察することができ、凸面は丁寧なナデが施される。側面はヘラ切り後ナデで仕上げられる。

36SD025 暗褐色粘質土



第90図 第36次調査出土遺物実測図(1/4)

第 6 節 大遺跡群第 37 次調査

(1) はじめに

第 37 次調査区は第 31 次調査区の市道を挟み南側に位置し、区画整理が始まる以前は、JR 九州の社宅が建てられていたエリアである。そのため、調査区内にはコンクリート製の基礎や規模の大きい掘乱坑が認められた。JR 九州の社宅が移転し宿舎が解体された後は、丁寧に整地が行われ、小さな区画ながらも地区の方々が利用できる広場として活用されていた。

今回、複合文化交流施設「ホルトホール大分」の建設工事開始が喫緊に迫り、当調査地点が建設予定地内に該当することから、事前に発掘調査を行った。敷地内は前述の通り社宅が建っていたことから、社宅基礎等で遺跡の大部分が残っていないことが想定されたため、建物が配されていない場所に調査地点を絞り実施している。調査では、第 28 次調査から延長すると考えられる南北溝 (SD001) やピット群が検出されている。出土遺物は近世期が主体であるが、ピットから古代の遺物も少数ながら出土していることから、当該時期の遺構が本地点にも展開していることが推定される。遺構密度は全体的に低く、特に調査区南側は希薄である。

調査面積は約 345 m²を測り、個別図面及び遺構全体図作成に伴う空中写真測量の撮影作業を終えた後、埋め戻しを行い、第 34・36 次調査を含め平成 22 年 3 月 16 日に調査を終了した。

(2) 基本層序

先述のとおり調査区には、社宅が存在していたことから建物基礎等が認められたが、調査区北側については建物が及んでいなかったため、調査区内の基本土層を観察することができた。

グラウンドとして使用されていた整地層の下位には厚さ約 0.3～0.7 m の砂利及び建物解体層が表出する。これらの層を除去すると、周辺の状況と同様近代～近世段階に比定される耕作土層が確認される。耕作土層を掘り除くと黄灰褐色シルト質土が認められ、遺構は本土層から検出されることから黄灰褐色シルト質土を遺構検出面とし、調査を実施した。検出標高はおおむね 5.0 m であり、周辺調査区とほぼ同様であった。

(3) 遺構

溝跡 (SD)

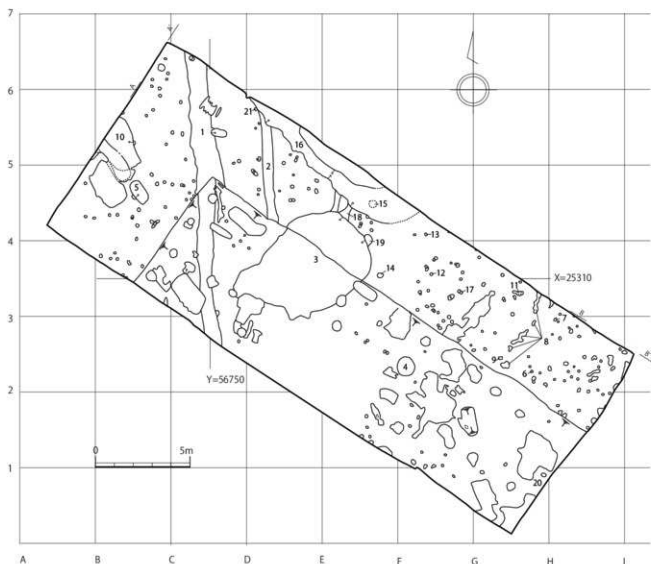
37SD001 (第 91 図)

調査区西側、C3～6 グリッドにかけて検出した南北溝である。検出長約 15 m、最大幅約 1.0 m、深さ約 0.2～0.3 m を測り、断面形状は緩やかな逆台形を呈する。埋土は、ほぼ黒茶褐色の単一土層であり、水流痕跡は認められない。溝底面は若干の起伏が認められるもののフラットな状態である。南北方向とも調査区外へと延伸するが、市道を挟んで確認された 28-SD150 と同一の溝跡となる可能性が高い。出土遺物は、古墳時代の土師器破片のみである。

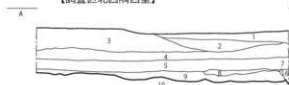
(4) 出土遺物

遺構密度が低いことから、出土遺物も全体的に少量である。遺物構成の主体は近世段階の陶磁器である。表土からであるが、肥前産陶磁器の瓶があり、形状から茶筌形瓶と呼ばれるものに該当し、府内城・城下町跡第 19 次調査 SK360 出土資料に類似する。古墳時代・古代の遺物は小破片だが、37SK010 から出土した土師器片 c は胎土中に金雲母を多く含んでおり、周辺から出土している土師器と様相が異なる。

今回の報告では、遺物実測図を掲載していないが、遺構一覧表において主な出土遺物を記述していることから、参照していただきたい。

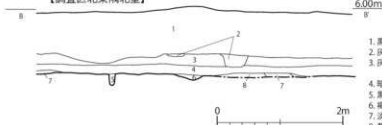


【調査区北西隅西壁】



1. 黄灰色砂礫 (複乱)
2. 暗褐色粘質土 (複乱)
3. 黄灰色砂礫土 (複乱)
4. 灰褐色粘質土 (小礫φ0.1cm 大と白色粒が少量に混入 北壁では消失)
5. 灰褐色粘質土 (小礫φ0.1cm 大か砂利、白色粒が少量に混入 鉄分の混入がわずかに見られる一北壁 3層と同じ)
6. 淡灰黄褐色ブロック (暗褐色土と灰褐色粘質土のブロック) - S010
7. 暗褐色土 - S010
8. 暗褐色土 (暗褐色土と灰褐色粘質土のブロック) - S010
9. 淡灰黄褐色砂質土 (わずかに黒褐色土が混入) - S010
10. 黄灰色シルト質土 (やや粘質 地山)

【調査区北東隅北壁】



1. 黄褐色砂土 (表土 礫混じり)
2. 灰褐色砂土 (複乱埋土)
3. 灰褐色粘質土 (φ0.1cm 小の礫や砂利、白色粒が少量に混入 鉄分の混入が見られる)
4. 暗褐色粘質土 (白色粒が混入)
5. 黄褐色土 (遺構埋土)
6. 暗褐色粘質土 (遺構埋土)
7. 淡灰黄褐色砂 (非常に硬質 粗砂と細砂で構成、白色粒・赤褐色粒を多く含む)
8. 黄灰色シルト質土 (やや粘質 地山)

第 91 図 大道遺跡群第 37 次調査遺構配置図 (1/200)・調査区壁土層図 (1/60)

第14表 大道遺跡群第36次調査遺構台帳

台帳号	遺構番号	種別	主な出土遺物	新田関係(古→新)	時期	地域層
	1	溝状遺構	土師器・高坪	1→5	古墳時代?	C4
	2	ビット	土師器破片			C4
	3	ビット	土師器・変形破片			B4
	4	溝状遺構	土師器・変・変口縁			C5
	5 SD005	掘立柱建物跡	国産磁器・花皿	5→6	近世後半期	C4
	6	溝状遺構	土師器破片		近世?	C6
	7	ビット	土師器・変		古代	C6
	8	土坑?	国産陶器(変・中世) 黒色土器A類破片 土師器・変			C6
	9	ビット	平瓦(近世) タイル		現代	C6
	10	ビット	土師器破片	10→17		C5
	11	溝状遺構	陶胎染付碗 国産陶器破片(福岡) 関西系陶器破片		18世紀以降	C6
	12	溝状遺構	土師器破片			C4
	13	ビット	土師器破片			B4
	14	ビット	古式土師器破片			C5
	15					
	16	ビット	土師器破片			C7
	17	ビット	土師器破片			C5
	18	ビット	土師器・高坪			D5
	19	溝状遺構	土師器破片			C5
	20					
	21	溝状遺構	土師器破片			C6
	22		土師器・変口			C5
	23	ビット	土師器・変・変底			C6
	24	ビット?	土師器破片			C6
	25 SD025	溝状遺構	土師器・変・変口・変底 須恵器・変・変口・変底 瓦・平瓦 玉砂利	25→1・5・7・8・16	8世紀末～9世紀前半	D6
	26	ビット	弥生土器破片	26→25		D7
	27	ビット	弥生土器破片			C6
	28	ビット	土師器(古墳)破片			C6
	29	ビット	弥生土器破片	29→4		C5

第15表 大道遺跡群第37次調査遺構台帳

台帳号	遺構番号	種別	主な出土遺物	新田関係	時期	地域層
	1 SD001	溝状遺構	土師器破片		古墳時代?	C7
	2 SD002	溝状遺構	古銭(寛永通宝)	2→16	17世紀後半以降	F8
	3	カクラン×大型土坑	陶胎染付碗 関西系陶器破片 青磁染付碗 平瓦(近世)	18.19→3	近世以降	E6
	4	土坑	土管		現代	D5
	5	土坑	土師器破片			F8
	6	ビット	土師器破片			D3
	7	ビット	土師器破片			D2
	8	ビット群	土師器破片			D3
	9	ビット	土師器破片			D3
	10	カクラン?	土師器・変			F9
	11	ビット	土師器破片			E3
	12	ビット	古式土師器(在地)			E4
	13	ビット	土師器破片			F4
	14	ビット	土師器破片			E5
	15	ビット(S16内)	肥前磁器皿(手造皿)	15→16	近世以降	F5
	16	溝状遺構	粉砕伊万里皿・肥前磁器皿・変・変口・変底 肥前磁器破片(中世) 弥生土器・変 弥生系土器破片 青磁破片(磨損不明)	2.15.18→16	19世紀代?	F6
	17	ビット	土師器破片			E4
	18	溝状遺構?	陶胎染付碗	18→3.15	18世紀後半以降	F5
	19	土坑?	陶胎染付碗	19→3	18世紀後半以降	F5
	20	ビット	土師器・変・変口(古墳)		古墳時代?	B3
	21	ビット				D6

第 16 表 大道遺跡群第 21 次調査遺物観察表 1

国名	資料 番号	通称番号	月番号	種別	面積	面積(㎡)			注意 事項	地土	作物	飼育・畜産		備考
						10/1 最大値	面積/10 最大値	面積/10 最大値				肉畜	乳畜	
第13回	1	50001 1層	001	衛生上層	畜	23.0	13.6	-	-	肉用畜	豚肉用畜	豚肉用畜	豚肉用畜	豚肉用畜
第13回	2	50001 1層	002	衛生上層	畜	3.0	4.7	12	-	-	-	-	-	養育用豚
第13回	4	50020 1層	020	衛生上層	畜	26.0	19.6	15.6	-	肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜
第13回	5	50020 1層	004	衛生上層	畜	29.0	89.4	-	-	肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜
第13回	6	50020 1層	010	衛生上層	豚	8.5	7.6	4.1	-	肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜
第13回	7	50020 1層	009	衛生上層	豚	14.6	8.6	14.0	-	肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜
第13回	8	50020 1層	003	衛生上層	加付種	-	100.0	5.7	-	肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜
第13回	9	50020 1層	018	衛生上層	加付種	18.6	15.2	10.2	-	肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜
第13回	10	50020 1層	007	衛生上層	畜	14.6	179.4	-	-	肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜
第13回	11	50020 1層	021	衛生上層	畜	14.8	14.1	4.0	-	肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜
第13回	12	50020 1層	005	衛生上層	畜	12.0	18.5	4.1	-	肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜
第13回	13	50020 1層	030	衛生上層	畜	-	102.0	3.8	-	肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜
第13回	14	50020 1層	006	衛生上層	畜	-	18.7	4.9	-	肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜
第13回	15	50020 1層	014	衛生上層	畜	-	17.5	14.7	-	肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜
第14回	16	50020 1層	002	衛生上層	畜	-	256.0	5.4	1.1	肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜
第14回	17	50020 1層	016	衛生上層	畜	15.2	35.0	4.9	-	肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜
第14回	18	50020 1層	011	衛生上層	畜	-	14.4	5.8	-	肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜
第14回	19	50020 1層	017	衛生上層	畜	10.0	24.0	4.8	-	肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜
第14回	20	50020 1層	025	衛生上層	衛生上層	16.1	42.8	19.1	-	肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜
第15回	21	50020 1層	024	衛生上層	衛生上層	17.0	33.8	5.4	-	肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜
第15回	22	50020 1層	023	衛生上層	衛生上層	17.0	58.4	7.6	-	肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜
第16回	23	50020 1層	022	衛生上層	豚	13.4	18.7	3.8	-	肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜
第16回	24	50020 1層	018	衛生上層	豚	15.0	20.9	3.1	-	肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜
第16回	25	50020 1層	013	衛生上層	豚	16.8	21.8	14.0	-	肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜
第16回	26	50020 1層	003	衛生上層	豚	16.5	22.2	4.7	-	肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜
第16回	27	50020 1層	008	衛生上層	豚	21.1	30.2	23	-	肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜
第16回	28	50020 1層	027	衛生上層	豚	29.0	101.0	-	-	肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜
第16回	29	50020 1層	028	衛生上層	豚	-	13.4	-	-	肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜
第16回	30	50020 1層	029	衛生上層	豚	-	73.0	4.2	-	肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜
第16回	29	50020 1層	011	衛生上層	豚	21.6	33.3	6.3	-	肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜・衛生上層	豚肉用畜

第 17 表 大道遺跡群第 21 次調査遺物觀察表 2

[illegible]

第 18 表 大道遺跡群第 34 次調査遺物觀察表

样品 编号	原始 序号	建群号	R值	类别	处理	法量(mm) (以度元数据)						泥土	色调	质构-质地		备注
						C厚/ 底壳长	前壳/ 盖板短	深度/ 磨刀宽	孔径 数量(g)							
第01组	8	S0001	001	圆珠内圈	砂打	47±α	32±α	17±α	-	-	白灰色	-	按图(二)左半部分: 上圈、下圈、中圈		颗粒-(粗)-粒粉	易剥落

第 19 表 大道遺跡群第 28 次調査遺物観察表 1

品名	規格	規格番号	検査項目	検査結果	品質検査結果			衛生検査結果	色調	成分検査結果		備考
					水分	糖度	酸度			内訳	外訳	
第47品	1	20-194500	001	古式工法製	高糖	-	17.0	-	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品1番
第47品	2	20-194500	010	古式工法製	高糖	-	53.0	-	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品2番
第47品	3	20-194500	013	古式工法製	高糖	-	54.0	-	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品3番
第47品	4	20-194500	030	古式工法製	高糖	-	58.0	-	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品4番
第47品	5	20-194500	012	古式工法製	高糖	10.8	14.3	13.6	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品5番
第47品	6	20-194500	008	古式工法製	高糖	10.6	72.0	-	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品6番
第47品	7	20-194500	007	古式工法製	高糖	21.8	63.0	-	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品7番
第47品	8	20-194500	009	古式工法製	高糖	13.9	42.0	-	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品8番
第47品	9	20-194500	016	古式工法製	高糖	-	47.0	12.8	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品9番
第47品	10	20-194500	027	古式工法製	高糖	-	78.0	02.6	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品10番
第47品	11	20-194500	004	古式工法製	高糖	-	64.0	12.5	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品11番
第47品	12	20-194500	005	古式工法製	高糖	-	84.0	03.0	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品12番
第47品	13	20-194500	019	古式工法製	高糖	-	83.0	-	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品13番
第47品	14	20-194500	025	古式工法製	高糖	-	66.0	-	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品14番
第47品	15	20-194500	014	古式工法製	高糖	-	78.0	-	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品15番
第47品	16	20-194500	022	古式工法製	糖	10.6	3.8	4.2	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品16番
第47品	17	20-194500	001	古式工法製	糖	10.3	57	5.0	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品17番
第47品	18	20-194500	021	古式工法製	糖	17.3	33.0	-	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品18番
第47品	19	20-194500	018	古式工法製	糖	-	32.0	-	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品19番
第47品	20	20-194500	015	古式工法製	小分け包装	-	27.0	-	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品20番
第47品	21	20-194500	001	古式工法製	小分け包装	11.9	10.2	-	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品21番
第47品	22	20-194500	014	古式工法製	小分け包装	10.6	8.0	-	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品22番
第47品	23	20-194500	018	古式工法製	糖	-	40.0	-	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品23番
第47品	24	20-194500	003	古式工法製	糖	10.3	43.0	-	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品24番
第47品	25	20-194500	020	古式工法製	糖	10.3	40.0	-	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品25番
第47品	26	20-194500	007	古式工法製	糖	-	83.0	-	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品26番
第47品	27	20-194500	016	古式工法製	糖	-	41.0	-	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品27番
第47品	28	20-194500	019	古式工法製	糖	10.3	57.0	-	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品28番
第47品	29	20-194500	002	ミニチュア工法製	糖	10.0	20	-	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品29番
第47品	30	20-194500	003	ミニチュア工法製	糖	10.0	20	-	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品30番
第47品	1	20-194500	006	古式工法製	糖	14.4	60	3.2	405.0g	-	-	-
第47品	2	20-194500	007	古式工法製	糖	13.9	58	4.1	600.0g	-	-	-
第47品	3	20-194500	001	古式工法製	糖	14.8	60	3.8	595.0g	-	-	-
第47品	4	20-194500	001	古式工法製	糖	14.2	53.0	-	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品4番
第47品	5	20-194500	002	古式工法製	糖	12.9	48	-	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品5番
第47品	6	20-194500	010	古式工法製	糖	8.8	28	-	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品6番
第47品	7	20-194500	012	古式工法製	糖	13.0	49	-	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品7番
第47品	8	20-194500	011	古式工法製	糖	-	60.0	-	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品8番
第47品	9	20-194500	013	古式工法製	糖	10.0	42.0	-	-	内訳検査結果 内訳検査結果	ナシ	第47品9番

第 20 表 大道遺跡群第 28 次調査遺物觀察表

[illegible]

第 21 表 大道遺跡群第 28 次調査遺物観察表 3

[illegible]

第 22 表 大道遺跡群第 28 次調査遺物觀察表 4

[illegible]

第24表 大道遺跡群第28次調査遺物観察表6

調査 番号	遺物 番号	遺物 番号	品名	種類	時期	測定値 (単位: mm)				出土 状況	材質	観察・画像		備考
						全長	最大径	最小径	重量			内面	外面	
第17回	98	28-15029	007	遺物群	群A層	-	18.0	-	-	白色粘土・黄褐色	黄褐色	白地に黒・赤・黄褐色	白地に黒・赤・黄褐色	
第17回	99	28-15029	017	土師器	群A	-	13.0	-	-	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	
第17回	100	28-15029	016	土師器	群A	-	13.0	-	-	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	
第17回	101	28-15029	015	土師器	群A	-	28.0	-	-	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	
第17回	102	28-15029	013	土師器	群A	-	23.0	8.0	-	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	
第17回	103	28-15029	014	土師器	群A	-	13.0	-	-	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	
第17回	104	28-15029	019	土師器	群A	-	13.0	-	-	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	
第17回	105	28-15029	018	土師器	群A	-	13.0	-	-	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	
第17回	106	28-15029	017	土師器	群A	-	13.0	-	-	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	
第17回	107	28-15029	001	遺物群	群A層	-	23.0	-	-	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	
第17回	108	28-15029	002	遺物群	群A層	-	23.0	-	-	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	
第17回	109	28-15029	004	遺物群	群A層	-	3.0	-	-	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	
第17回	110	28-15029	008	遺物群	群A層	-	6.0	-	-	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	
第17回	111	28-15029	005	遺物群	群A層	-	11.0	-	-	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	
第17回	112	28-15029	027	土師器	群A層	-	14.0	1.0	0.2	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	
第17回	113	28-15029	023	土師器	群A層	-	1.0	-	-	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	
第17回	114	28-15029	021	土師器	群A層	-	14.0	1.0	0.2	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	
第17回	115	28-15029	025	土師器	群A層	-	14.0	1.0	0.2	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	
第17回	116	28-15029	024	土師器	群A層	-	13.0	-	-	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	
第17回	117	28-15029	026	土師器	群A層	-	13.0	-	-	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	
第17回	118	28-15029	022	土師器	群A層	-	23.0	-	-	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	
第17回	119	28-15029	013	土師器	群A層	-	13.0	-	-	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	
第17回	120	28-15029	009	土師器	群A層	-	13.0	-	-	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	
第17回	121	28-15029	007	土師器	群A層	-	13.0	-	-	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	
第17回	122	28-15029	010	土師器	群A層	-	13.0	-	-	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	
第17回	123	28-15029	012	土師器	群A層	-	13.0	-	-	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	
第17回	124	28-15029	008	土師器	群A層	-	13.0	-	-	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	
第17回	125	28-15029	011	土師器	群A層	-	13.0	-	-	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	
第17回	126	28-15029	020	土師器	群A層	-	13.0	-	-	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	
第17回	127	28-15029	006	遺物群	群A層	-	13.0	-	-	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	
第17回	128	28-15029	015	土師器	群A層	-	13.0	-	-	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	
第17回	129	28-15029	014	土師器	群A層	-	13.0	-	-	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	
第17回	130	28-15029	016	土師器	群A層	-	13.0	-	-	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	
第17回	131	28-15029	017	土師器	群A層	-	13.0	-	-	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	赤褐色・黄褐色	

第 25 表 大道遺跡群第 28 次調査遺物観察表 7

[illegible]

第 26 表 大道遺跡群第 28 次調査遺物観察表 8

調査 番号	遺物 番号	遺物 名称	品名	種類	時期	1/2 最大長	幅 最大長	厚さ 最大長	重量 最大長	出土 位置	出所	調査・観察		備考
												内蔵	外蔵	
第1回	71	38-15000 瓦片	012	瓦片	縄文	8.4	1.8+0	1.2	29.6g	-	-	-	-	縄文中期
第1回	72	38-15000 瓦片	004	瓦片	縄文	-	2.6+0	-	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	73	38-15000 瓦片	003	瓦片	縄文	-	5.7+0	-	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	74	38-15000 瓦片	001	土師器	縄文	(25.1)	2.5	(16.2)	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	75	38-15000 瓦片	002	土師器	縄文	-	4.3+0	-	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	77	38-250100	006	遺跡群	縄文	-	2.0+0	-	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	78	38-250100	007	遺跡群	縄文	-	1.26+0	-	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	79	38-250100	005	遺跡群	縄文	-	3.1+0	-	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	80	38-250100	004	遺跡群	縄文	-	1.2+0	-	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	81	38-250100	003	遺跡群	縄文	-	3.6+0	-	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	82	38-250100	002	土師器	縄文	-	3.1+0	-	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	83	38-250100	001	土師器	縄文	2.2	2.2	-	0.2	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	84	38-250100	000	瓦片	縄文	3.5	4.5	3.3	140.7g	-	-	-	-	
第1回	85	38-250100	002	土師器	縄文	-	6.0+0	8.0	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	86	38-250100	001	土師器	縄文	-	2.8+0	-	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	87	38-250100	004	遺跡群	縄文	-	3.3+0	-	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	88	38-250100	005	遺跡群	縄文	-	2.8+0	-	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	89	38-250100	006	遺跡群	縄文	-	3.3+0	-	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	90	38-250100	007	遺跡群	縄文	-	4.0+0	-	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	91	38-250100	008	遺跡群	縄文	-	3.9+0	(10.4)	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	92	38-250100	009	遺跡群	縄文	-	4.9+0	-	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	93	38-250100	010	土師器	縄文	-	1.3+0	-	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	94	38-250100	009	土師器	縄文	-	2.6+0	-	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	95	38-250100	012	土師器	縄文	115.0	3.5	8.9	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	96	38-250100	010	土師器	縄文	-	1.8+0	-	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	97	38-250100	003	縄文土師	縄文	-	4.4+0	-	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	98	38-250100	002	土師器	縄文	-	2.7+0	-	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	99	38-250100	013	瓦片	縄文	5.5	5.5	5.5	12.9g	-	黄色	黄褐色・黄褐色	-	黄褐色・黄褐色
第1回	100	38-250100	014	遺跡群	縄文	-	1.8+0	-	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	101	38-250100	017	遺跡群	縄文	-	3.0+0	(11.2)	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	102	38-250100	015	遺跡群	縄文	-	3.2+0	11.0	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	103	38-250100	018	遺跡群	縄文	-	2.0+0	12.8	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	104	38-250100	016	遺跡群	縄文	-	3.2+0	(14.2)	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	105	38-250100	014	遺跡群	縄文	-	3.6+0	(12.1)	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	106	38-250100	020	遺跡群	縄文	-	6.3+0	-	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	107	38-250100	022	遺跡群	縄文	-	8.0+0	-	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	108	38-250100	001	遺跡群	縄文	-	3.1+0	-	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	109	38-250100	003	遺跡群	縄文	-	9.3+0	-	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	110	38-250100	004	遺跡群	縄文	-	5.0+0	-	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	111	38-250100	005	遺跡群	縄文	-	11.7+0	-	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	112	38-250100	022	遺跡群	縄文	(11.4)	4.1+0	-	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	113	38-250100	021	遺跡群	縄文	-	3.0+0	-	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	114	38-250100	020	遺跡群	縄文	-	4.1+0	-	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	115	38-250100	018	土師器	縄文	-	2.0+0	-	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	
第1回	116	38-250100	028	土師器	縄文	114.2	3.5	17.0	-	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	河内地区・東山 の遺跡	

第 29 表 大道遺跡群第 28 次調査遺物観察表 11

映画 番号	映画 題名	巻数 番号	年 番号	種 別	巻 数	画面・音声			尺 寸 (分)	配 役	色 調	演 者・声 優		備 考
						1/2 巻本 数	画面 形式	音 声				内 音	外 音	
第002	196	20-19201-50	001	戦国・土曜	泣顔?	-	54.4	-	-	佐藤・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	ナチ・森サキエ	森田の浅井町	
第002	197	20-19201-50	002	戦国・土曜	泣顔?	-	19.4	-	-	佐藤・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	森田・森田	ナチ	
第002	198	20-19201-50	006	戦国・土曜	泣顔?	-	19.4	-	-	佐藤・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	森田の浅井町	森田の浅井町	
第002	199	20-19201-50	007	戦国・土曜	泣顔?	42	2.1	6.8	57.9	-	-	-	-	森田・森田
第002	200	20-19201-50	001	漫画・新	泣顔?	-	30.4	-	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	泣顔?	泣顔? ナチ?	
第002	201	20-19201-50	002	土曜・新	森田	-	10.4	-	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	ナチ・森サキエ	ナチ	森田
第002	202	20-19201-50	001	土曜・新	森田	-	1.8	16.0	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	森田の浅井町	森田の浅井町	
第002	203	20-19201-50	002	戦国・土曜	泣顔?	-	46.4	-	-	佐藤・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	森田	ナチ・森サキエ	
第003	1	20-19307-01	001	ミステリー・新	森田	-	3.1	-	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	森サキエ	森サキエ	
第003	2	20-19307-02	002	漫画・新	第3・4	-	06.4	-	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	泣顔? ナチ	泣顔? ナチ	
第003	3	20-19307-03	001	土曜・新	森田	-	9.4	-	10.5	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	森田の浅井町	森田の浅井町	
第003	4	20-19307-04	001	漫画・新	森田	-	21.4	-	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	泣顔?	泣顔?	
第003	5	20-19307-05	006	土曜・新	森田	-	2.8	-	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	森田	森田	
第003	6	20-19307-06	007	土曜・新	森田	-	61.4	-	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	ナチ・森サキエ	ナチ・森サキエ	
第003	7	20-19307-07	001	土曜・新	森田	-	14.4	-	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	森田の浅井町	森田の浅井町	
第003	8	20-19307-08	002	土曜・新	森田	-	27.4	-	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	泣顔?	泣顔?	
第003	9	20-19307-09	004	戦国・土曜	森田	-	3.1	-	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	ナチ	ナチ・森サキエ	
第003	10	20-19307-10	005	漫画・新	森田	7.0	5.4	2.2	100.0	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	-	-	
第003	11	20-19307-11	003	漫画・新	森田	-	1.2	-	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	泣顔?	泣顔?	
第003	12	20-19307-12	002	漫画・新	森田	-	32.4	-	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	泣顔?	泣顔? ナチ	
第003	13	20-19307-13	001	漫画・新	森田	-	47.4	-	10.2	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	泣顔?	泣顔? ナチ	
第003	14	20-19307-14	005	土曜・新	森田	-	2.4	-	10.0	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	森田	森田	
第003	15	20-19307-15	004	土曜・新	森田	-	1.4	-	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	森田の浅井町	森田の浅井町	
第003	16	20-19307-16	006	土曜・新	森田	-	55.4	-	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	森田の浅井町	森田の浅井町	
第003	17	20-19307-17	007	土曜・新	森田	-	6.4	-	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	森田	森田	
第003	18	20-19307-18	006	土曜・新	森田	44	3.0	0.7	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	ナチ	ナチ・森サキエ	
第003	19	20-19307-19	009	戦国・土曜	森田	11.6	7.6	8.3	240.0	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	-	-	
第003	20	20-19307-20	002	漫画・新	森田	-	1.4	-	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	泣顔?	泣顔?	
第003	21	20-19307-21	001	土曜・新	森田	-	40.4	-	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	泣顔?	泣顔? ナチ	
第003	22	20-19307-22	003	漫画・新	森田	-	15.4	-	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	泣顔?	泣顔? ナチ	
第003	23	20-19307-23	004	漫画・新	森田	-	13.4	-	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	泣顔?	泣顔? ナチ	
第003	24	20-19307-24	002	漫画・新	森田	-	15.4	-	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	泣顔? ナチ	泣顔? ナチ	
第003	25	20-19307-25	001	漫画・新	森田	-	29.4	-	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	泣顔?	泣顔?	
第003	26	20-19307-26	006	漫画・新	森田	20.2	15.4	1.5	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	ナチ・森サキエ	ナチ・森サキエ	
第003	27	20-19307-27	001	土曜・新	森田	-	17.4	10.0	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	森田の浅井町	森田の浅井町	
第003	28	20-19307-28	001	漫画・新	森田	-	1.6	-	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	泣顔?	泣顔? ナチ	
第003	29	20-19307-29	005	土曜・新	森田	-	2.1	-	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	泣顔?	泣顔?	
第003	30	20-19307-30	004	土曜・新	森田	-	20.4	-	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	泣顔?	泣顔?	
第003	31	20-19307-31	003	土曜・新	森田	-	35.4	-	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	泣顔?	泣顔?	
第003	32	20-19307-32	002	土曜・新	森田	-	42.4	-	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	森サキエ	森サキエ	
第003	33	20-19307-33	006	土曜・新	森田	5.9	1.5	1.0	140.0	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	-	-	
第003	34	20-19307-34	001	土曜・新	森田	10.4	9.7	9.8	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	泣顔? ナチ	泣顔? ナチ	
第003	35	20-19307-35	001	ミステリー・新	森田	2.8	3.5	-	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	ナチ・森サキエ	ナチ・森サキエ	
第003	36	20-19307-36	001	漫画・新	森田	-	52.4	-	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	泣顔?	泣顔?	
第003	37	20-19307-37	001	戦国・土曜	森田	-	39.4	-	-	森田・森田・森田・佐藤・森田	内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹・内田直樹	ナチ	ナチ	

第30表 大道遺跡群第31次調査遺物観察表1

調査 番号	遺物 番号	遺物 名称	土層	種類	形状	寸法(単位:cm)				土質	状態	観察・備考		備考
						長さ	幅	厚さ	重量			内面	外面	
第30表	1	M001a	001	土師器	蓋	-	3.9+0	-	-	赤土・赤褐色	汚損部あり	面取りナシ	ナシ	024
第30表	2	M001a	001	土師器	埴	-	3.5+0	-	-	赤土・褐色粘土	汚損部あり	ナシ	ナシ	136
第30表	3	M001a	001	土師器	埴	-	1.7+0	-	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	107
第30表	4	M001a	001	土師器	埴	-	1.3+0	-	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	107
第30表	5	M001a	001	土師器	埴	-	2.0+0	-	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	107
第30表	6	M001a	001	土師器	埴	-	1.1+0	-	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	107
第30表	7	M001a	001	土師器	埴	-	1.8+0	(10)	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	107
第30表	8	M001a	001	土師器	小皿	-	1.8+0	-	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	108
第30表	9	M001a	001	土師器	埴	-	2.9+0	-	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	108
第30表	10	M001a	001	土師器	埴	(13)	4.3+0	-	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	108
第30表	11	M001a	001	土師器	埴	-	2.8+0	-	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	109
第30表	12	M001a	001	土師器	埴	-	1.0+0	-	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	109
第30表	13	M001a	001	土師器	埴	-	0.9+0	-	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	110
第30表	14	M001a	001	土師器	小皿	-	1.7+0	-	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	110
第30表	15	M001a	001	土師器	埴	-	2.5+0	-	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	111
第30表	16	M001a	001	土師器	埴	-	3.1+0	-	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	112
第30表	17	M001a	001	土師器	埴	-	2.8+0	-	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	113
第30表	18	M001a	001	土師器	埴	-	2.0+0	-	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	114
第30表	19	M001a	001	土師器	埴	-	1.7+0	-	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	115
第30表	20	M001a	001	土師器	埴	-	4.5+0	-	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	116
第30表	21	M001a	001	土師器	埴	-	1.9+0	-	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	117
第30表	22	M001a	001	土師器	埴	(13)	4.4+0	-	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	118
第30表	23	M001a	001	土師器	埴	-	2.6+0	-	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	119
第30表	24	M001a	001	土師器	埴	-	2.8+0	-	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	120
第30表	25	M001a	001	土師器	埴	-	1.1+0	-	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	121
第30表	26	M001a	001	土師器	埴	-	1.4+0	-	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	122
第30表	27	M001a	001	土師器	埴	(14)	5.1+0	-	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	123
第30表	28	M001a	001	土師器	埴	-	1.7+0	5.0	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	124
第30表	29	M001a	001	土師器	埴	(14)	5.4	7.6	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	125
第30表	30	M001a	001	土師器	埴	(15)	1.3	(10)	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	126
第30表	31	M001a	001	土師器	埴	-	1.8+0	-	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	127
第30表	32	M001a	001	土師器	埴	-	2.9+0	-	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	128
第30表	33	M001a	001	土師器	埴	(15)	3.0	(7)	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	129
第30表	34	M001a	001	土師器	埴	-	1.3+0	(7)	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	130
第30表	35	M001a	001	土師器	埴	-	3.1+0	(7)	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	131
第30表	36	M001a	001	土師器	埴	-	2.8+0	-	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	132
第30表	37	M001a	001	土師器	埴	-	4.0+0	-	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	133
第30表	38	M001a	001	土師器	小皿	-	1.8+0	(7)	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	134
第30表	39	M001a	001	土師器	埴	(17)	5.7+0	-	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	135
第30表	40	M001a	001	土師器	埴	-	2.2+0	(5)	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	136
第30表	41	M001a	001	土師器	埴	-	3.2+0	(8)	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	137
第30表	42	M001a	001	土師器	埴	-	1.2+0	(5)	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	138
第30表	43	M001a	001	土師器	埴	-	1.3+0	(5)	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	139
第30表	44	M001a	001	土師器	埴	-	1.3+0	(5)	-	赤土・赤褐色粘土	汚損部あり	面取りナシ	面取りナシ	140

第 31 表 大道遺跡群第 31 次調査遺物観察表 2

[illegible]

第 32 表 大道遺跡群第 31 次調査遺物観察表 3

調査 番号	遺物 番号	遺物 番号	4層目	種類	数量	調査範囲内(10m×10m)の調査範囲				出土	位置	調査・観察		備考
						2層目 出土数	3層目 出土数	4層目 出土数	5層目 出土数			内容	外観	
第32表	2	50025	307	土師器	瓶	1	21+0	-	-	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	3	50025	308	土師器	瓶	1	115	3+0+0	-	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	4	50025	309	土師器	瓶	1	170	20	115	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	5	50025	310	土師器	片断	1	140	3	10	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	6	50025	311	土師器	瓶	1	83+0	-	-	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	7	50025	312	土師器	瓶	1	150	10+0	-	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	8	50025	313	土師器	瓶	1	160	10+0	-	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	9	50025	314	土師器	瓶	1	10+0	-	-	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	10	50025	315	土師器	瓶	1	170	45	100	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	11	50025	316	土師器	瓶	1	8+0	3+0+0	-	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	12	50025	317	土師器	瓶	1	5+0+0	-	-	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	13	50025	318	土師器	瓶	1	83+0	-	-	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	14	50025	319	土師器	瓶	1	20+0	-	-	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	15	50025	320	土師器	瓶	1	121	4+0+0	-	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	16	50025	321	土師器	瓶	1	160	3	100	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	17	50025	322	土師器	瓶	1	150	10	115	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	18	50025	323	土師器	瓶	1	115	43	97	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	19	50025	324	土師器	瓶	1	20+0	-	-	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	20	50025	325	土師器	瓶	1	130	5	10	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	21	50025	326	土師器	瓶	1	170	30	170	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	22	50025	327	土師器	瓶	1	8+0+0	-	-	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	23	50025	328	土師器	瓶	1	8+0+0	-	-	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	24	50025	329	土師器	瓶	1	150	35	100	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	25	50025	330	土師器	瓶	1	145	54	77	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	26	50025	331	土師器	瓶	1	140	55	-	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	27	50025	332	土師器	瓶	1	160	44	10	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	28	50025	333	土師器	瓶	1	120	45+0	-	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	29	50025	334	土師器	瓶	1	170	20+0	-	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	30	50025	335	土師器	瓶	1	87+0	-	-	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	31	50025	336	土師器	瓶	1	50+0	-	-	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	32	50025	337	土師器	瓶	1	170	25+0	-	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	33	50025	338	土師器	瓶	1	55+0	-	-	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	34	50025	339	土師器	瓶	1	120+0	93+0	33+0	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	35	50025	340	土師器	瓶	1	40+0	-	-	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	36	50025	341	土師器	瓶	1	35	12	-	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	37	50025	342	土師器	瓶	1	61	15	-	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	38	50025	343	土師器	瓶	1	60	17	-	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	39	50025	344	土師器	瓶	1	47	13	-	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面
第32表	40	50025	345	土師器	瓶	1	21+0	-	-	赤褐色 土師器	内側面	内面	内面	内面

第 33 表 大道遺跡群第 31 次調査遺物觀察表 4

[illegible]

第 34 表 大道遺跡群第 31 次調査遺物観察表 5

調査 番号	遺物 番号	遺物 名称	1層目	種類	形状	測定値(単位: 1/10mm)			出土 状況	位置	観察 結果		備考
						長さ	幅	厚さ			内面	外面	
第34-02	85	10025 灰土層の出土	027	土師器	小壺	-	1.3+0	-	-	灰土・赤褐色土	凹状ナデ	凹状ナデ	
第34-02	86	10025 灰土層の出土	028	土師器	小壺	172	4.3+0	-	-	灰土・赤褐色土・赤褐色土・赤褐色土	凹状ナデ	凹状ナデ	灰土・赤褐色土・赤褐色土・赤褐色土
第34-02	87	10025 灰土層の出土	029	土師器	壺	-	4.3+0	-	-	凹状ナデ	凹状ナデ	凹状ナデ	10025灰土層の出土
第34-02	88	10025 灰土層の出土	034	土師器	壺	1202	4.9+0	-	-	灰土・赤褐色土	凹状ナデ	凹状ナデ	10025灰土層の出土
第34-02	89	10025 灰土層の出土	033	土師器	壺	125.3	5.3+0	-	-	灰土・赤褐色土	凹状ナデ	凹状ナデ	10025灰土層の出土
第34-02	90	10025 灰土層の出土	032	土師器	壺	33	3.3+0	-	-	灰土・赤褐色土	凹状ナデ	凹状ナデ	10025灰土層の出土
第34-02	91	10025 灰土層の出土	050	土師器	壺	-	8.8+0	-	-	灰土・赤褐色土	凹状ナデ	凹状ナデ	10025灰土層の出土
第34-02	92	10025 灰土層の出土	040	土師器	壺	-	6.0+0	-	-	灰土・赤褐色土	凹状ナデ	凹状ナデ	10025灰土層の出土
第34-02	93	10025 灰土層の出土	031	土師器	壺	-	6.2+0	-	-	灰土・赤褐色土	凹状ナデ	凹状ナデ	10025灰土層の出土
第34-02	94	10025 灰土層の出土	027	土師器	壺	-	16.3+0	-	-	灰土・赤褐色土	凹状ナデ	凹状ナデ	10025灰土層の出土
第34-02	95	10025 灰土層の出土	063	瓦	瓦	13.1+0	13.3+0	9.3	-	灰土・赤褐色土	凹状ナデ	凹状ナデ	10025灰土層の出土
第34-02	96	10025 灰土層の出土	067	瓦	瓦	13.1+0	7.0+0	22+0	-	灰土・赤褐色土	凹状ナデ	凹状ナデ	10025灰土層の出土
第34-02	97	10025 灰土層の出土	068	瓦	瓦	12.7+0	16.4+0	12+0	-	灰土・赤褐色土	凹状ナデ	凹状ナデ	10025灰土層の出土
第34-02	98	10025 灰土層の出土	061	土師器	土師	5.3	1.6	-	0.6-11.6	灰土・赤褐色土	凹状ナデ	凹状ナデ	10025灰土層の出土
第34-02	99	10025 灰土層の出土	062	土師器	土師	7.2	2.3	-	0.6-0.3-0.3	灰土・赤褐色土	凹状ナデ	凹状ナデ	10025灰土層の出土
第34-02	100	10025 灰土層の出土	061	土師器	土師	8.1	1.4	-	0.6-0.3-18.3	灰土・赤褐色土	凹状ナデ	凹状ナデ	10025灰土層の出土
第34-02	101	10025 灰土層の出土	070	赤銅土	玉	1.3	-	-	11.3	-	-	-	-
第34-02	102	10025 灰土層の出土	068	銅製品	銅製品	2.2	2.9	0.2+0.3	7.6	-	-	-	銅製品?
第34-02	103	10025 灰土層の出土	067	銅製品	銅製品	6.2+0	1.6+0	0.3+0.3	11.3	-	-	-	銅製品?
第34-02	104	10025 灰土層の出土	074	銅製品	玉	0.3	0.25	-	0.3	-	-	-	銅製品?
第34-02	105	10025 灰土層の出土	073	銅製品	銅製品	3.3	-	0.4	9.3	-	-	-	銅製品?
第34-02	106	10025 灰土層の出土	071	銅製品	銅製品	6.8+0	2.5	1.5	44.3	-	-	-	銅製品?
第34-02	107	10025 灰土層の出土	072	銅製品	銅製品	5.3+0	3.8	1.8	78.3	-	-	-	銅製品?
第34-02	108	10025 灰土層の出土	073	銅製品	銅製品	9.9	2.7	1.3	36.3	-	-	-	銅製品?
第34-02	109	10025 灰土層の出土	025	銅製品	銅製品	-	1.6+0	1.6	-	灰土・赤褐色土	凹状ナデ	凹状ナデ	10025灰土層の出土
第34-02	110	10025 灰土層の出土	016	銅製品	銅製品	-	2.3+0	3.3	-	灰土・赤褐色土	凹状ナデ	凹状ナデ	10025灰土層の出土
第34-02	111	10025 灰土層の出土	022	銅製品	銅製品	-	11.0	4.3	11.3	灰土・赤褐色土	凹状ナデ	凹状ナデ	10025灰土層の出土
第34-02	112	10025 灰土層の出土	017	銅製品	銅製品	-	11.3	4.8	11.0	灰土・赤褐色土	凹状ナデ	凹状ナデ	10025灰土層の出土
第34-02	113	10025 灰土層の出土	066	銅製品	銅製品	-	11.3	5.8	11.0	灰土・赤褐色土	凹状ナデ	凹状ナデ	10025灰土層の出土
第34-02	114	10025 灰土層の出土	126	銅製品	銅製品	-	8.8+0	-	-	灰土・赤褐色土	凹状ナデ	凹状ナデ	10025灰土層の出土
第34-02	115	10025 灰土層の出土	018	土師器	壺	-	2.3+0	-	-	灰土・赤褐色土	凹状ナデ	凹状ナデ	10025灰土層の出土
第34-02	116	10025 灰土層の出土	061	土師器	壺	-	1.6+0	-	-	灰土・赤褐色土	凹状ナデ	凹状ナデ	10025灰土層の出土
第34-02	117	10025 灰土層の出土	027	土師器	壺	-	1.7+0	1.0	-	灰土・赤褐色土	凹状ナデ	凹状ナデ	10025灰土層の出土
第34-02	118	10025 灰土層の出土	061	土師器	壺	-	2.3+0	-	-	灰土・赤褐色土	凹状ナデ	凹状ナデ	10025灰土層の出土
第34-02	119	10025 灰土層の出土	060	土師器	壺	-	2.7+0	-	-	灰土・赤褐色土	凹状ナデ	凹状ナデ	10025灰土層の出土
第34-02	120	10025 灰土層の出土	068	土師器	壺	-	2.3+0	-	-	灰土・赤褐色土	凹状ナデ	凹状ナデ	10025灰土層の出土
第34-02	121	10025 灰土層の出土	063	土師器	壺	-	4.3+0	-	-	灰土・赤褐色土	凹状ナデ	凹状ナデ	10025灰土層の出土
第34-02	122	10025 灰土層の出土	063	土師器	壺	-	4.3+0	-	-	灰土・赤褐色土	凹状ナデ	凹状ナデ	10025灰土層の出土
第34-02	123	10025 灰土層の出土	029	土師器	壺	115.0	5.9	8.0	-	灰土・赤褐色土	凹状ナデ	凹状ナデ	10025灰土層の出土
第34-02	124	10025 灰土層の出土	013	土師器	壺	-	7.3+0	-	-	灰土・赤褐色土	凹状ナデ	凹状ナデ	10025灰土層の出土
第34-02	125	10025 灰土層の出土	012	土師器	壺	-	6.1+0	-	-	灰土・赤褐色土	凹状ナデ	凹状ナデ	10025灰土層の出土
第34-02	126	10025 灰土層の出土	011	土師器	壺	11.3	7.0+0	-	-	灰土・赤褐色土	凹状ナデ	凹状ナデ	10025灰土層の出土

第 35 表 大道遺跡群第 31 次調査遺物観察表 6

調査 番号	遺物 番号	遺跡 番号	R番号	層位	距離	位置(㎡) (31年度調査)				出土	色調	調査・記録		備考
						1区画 敷地面積	2区画 敷地面積	3区画 敷地面積	4区画 敷地面積			内容	外周	
第35区	127	S2023	014	土耕層	溝	-	4.7+0	-	-	黒色・灰黒・黄褐色・赤褐色・白褐色・赤褐色	内周褐色・内周褐色	灰黒サビサビ	灰黒サビ	
第35区	128	S2023	017	瓦	平瓦	15.1+0	8.0+0	3.3+0	-	黒色・灰黒・黄褐色・赤褐色	内周褐色	灰黒サビ	灰黒サビ	
第35区	129	S2023	020	瓦	平瓦	12.4+0	15.4+0	4.5+0	-	黒色・灰黒・黄褐色・赤褐色	内周褐色	灰黒サビ	灰黒サビ	
第35区	130	S2023	003	瓦	平瓦	17.4+0	16.0+0	3.0+0	-	赤褐色・赤褐色	内周褐色	灰黒サビ	灰黒サビ	
第35区	131	S2023	004	瓦	平瓦	16.0+0	15.0+0	4.3	-	赤褐色・赤褐色	内周褐色	灰黒サビ	灰黒サビ	
第35区	132	S2023	010	石製品	石臼	11.7	7.2	5.0	157.4kg	-	-	-	-	
第35区	133	S2023	009	灰土層	溝	-	1.4+0	-	-	黒色・灰黒	内周褐色	灰黒サビ	灰黒サビ	
第35区	134	S2023	008	灰土層	溝	-	2.3+0	-	-	黒色・灰黒	内周褐色	灰黒サビ	灰黒サビ	
第35区	135	S2023	007	土耕層	溝	-	1.9+0	-	-	黒色・灰黒	内周褐色	灰黒サビ	灰黒サビ	
第35区	136	S2023	002	土耕層	溝	-	3.3+0	-	-	黒色・灰黒	内周褐色	灰黒サビ	灰黒サビ	
第35区	137	S2023	001	土耕層	溝	-	3.0+0	10.0	-	黒色・灰黒	内周褐色	灰黒サビ	灰黒サビ	
第35区	138	S2023	004	土耕層	溝	-	6.3+0	-	-	黒色・灰黒	内周褐色	灰黒サビ	灰黒サビ	
第35区	139	S2023	003	土耕層	溝	-	3.4+0	-	-	黒色・灰黒	内周褐色	灰黒サビ	灰黒サビ	
第35区	140	S2023	005	土耕層	溝	-	1.4+0	-	-	黒色・灰黒	内周褐色	灰黒サビ	灰黒サビ	
第35区	141	S2023	001	灰土層	溝	-	3.3+0	-	-	黒色・灰黒	内周褐色	灰黒サビ	灰黒サビ	
第35区	142	S2023	001	灰土層	溝	-	2.0+0	-	-	黒色・灰黒	内周褐色	灰黒サビ	灰黒サビ	
第35区	143	S2023	002	土耕層	溝	-	2.4+0	-	-	黒色・灰黒	内周褐色	灰黒サビ	灰黒サビ	
第35区	144	S2023	003	土耕層	溝	-	3.4+0	-	-	黒色・灰黒	内周褐色	灰黒サビ	灰黒サビ	
第35区	145	S2023	001	土耕層	溝	-	2.0+0	-	-	黒色・灰黒	内周褐色	灰黒サビ	灰黒サビ	
第35区	146	S2023	002	土耕層	溝	11.0	2.3+0	-	-	黒色・灰黒	内周褐色	灰黒サビ	灰黒サビ	
第35区	147	S2023	001	土耕層	溝	-	1.0+0	-	-	黒色・灰黒	内周褐色	灰黒サビ	灰黒サビ	
第35区	148	S2023	001	土耕層	溝	1.3	1.3	0.7	-	黒色・灰黒	内周褐色	灰黒サビ	灰黒サビ	
第35区	149	S2023	001	土耕層	溝	-	1.0+0	-	-	黒色・灰黒	内周褐色	灰黒サビ	灰黒サビ	
第35区	150	S2023	002	土耕層	溝	-	1.0+0	-	-	黒色・灰黒	内周褐色	灰黒サビ	灰黒サビ	
第35区	151	S2023	001	土耕層	溝	4.0	2.7	-	-	黒色・灰黒	内周褐色	灰黒サビ	灰黒サビ	

第 36 表 大道遺跡群第 36 次調査遺物観察表

調査 番号	遺物 番号	遺跡 番号	R番号	層位	距離	位置(㎡) (36年度調査)				出土	色調	調査・記録		備考
						1区画 敷地面積	2区画 敷地面積	3区画 敷地面積	4区画 敷地面積			内容	外周	
第36区	1	S2023	001	土耕層	溝	10.0	4.4	7.0	-	黒色・灰黒・黄褐色・赤褐色・白褐色・赤褐色	内周褐色	灰黒サビ	灰黒サビ	
第36区	2	溝	001	瓦	瓦	24.4+0	1.4	6.9	-	黒色・灰黒	内周褐色	灰黒サビ	灰黒サビ	

第IV章 総括

第1節 調査成果の時代別整理

1 はじめに

今回、『大道遺跡群 6』に所収した調査成果は、平成 25 年 7 月竣工予定の「ホルトホール大分」建設に伴う事前調査として実施したものである。敷地面積は約 19,000 m²に及ぶが、確認調査を行い遺跡の分布状況を把握した結果、本調査の面積は約 8700 m²となった。

遺跡地の様相は、調査対象全域において建物跡や井戸跡、溝跡及びピット群が広範囲に多数展開しており、一部を現代の建物基礎等により削平されているものの、良好に遺存していた。確認された遺構は、弥生時代後期～平安時代初め頃までに該当し、その中でも、古墳時代前期及び 8 世紀後半～9 世紀前半頃を中心とする古代の遺構に特筆すべき成果を得ることができた。以下、各調査地点の成果を総合的に捉え、時代別に整理を行い、主要遺構を中心として略述する。

2 時代別の調査成果

【縄文時代】

これまでの大道遺跡群における調査状況と同様、明確に縄文時代と位置づけられる遺構は検出されていない。但し、28-2SD150 や 28-2SD205 より縄文時代後期～晩期に該当する破片資料が出土している。

【弥生時代】

弥生時代の遺構分布は希薄である中で、第 21 次調査地で遺物が大量廃棄された遺構が検出されている(21SK020)。弥生時代後期前葉～中葉頃の特徴を有した大・中・小の各タイプの甕や安国寺式複合口縁壺、短頸甕が完形復元可能な良好な状態で出土している。また、瀬戸内系の様相を呈した土器も共伴しており、大分平野を含めた瀬戸内地域の土器編年を検証する上で、重要な資料になるものと考えられる。同調査地点では、21SK040・050、21SP008 からは、弥生時代後期後葉頃の所産である甕や脚付鉢等が出土している。その他の調査地点からは弥生時代の遺構は発見されておらず、第 21 次調査地に限定される。今回の報告書に所収している調査地よりやや北に位置する第 20・23 次調査地では弥生時代後期後葉～終末期に該当する遺構が確認されている。しかしながら、この時期の遺構は極めて少数であり、点的な分布でしか認められない。

【古墳時代】

調査地全域に遺構が分布しており、大道遺跡群全体において最も遺構の確認事例が多い時期である。古墳時代の遺構は、竪穴建物跡・井戸跡・溝跡・廃棄土坑といった多様な内容である。竪穴建物跡は、第 28 次調査地に 3 基(28-1SH050・058・059)、第 31 次調査地点に 1 基(31SH030)がある。28-1SH050 は古墳時代中期初頭頃、28-1SH059 と 31SH030 はやや距離が離れるが主軸方向が近似しており、古墳時代後期に比定される。その他、削平により主柱だけが残ったと思われる竪穴建物跡も複数存在している。井戸跡は第 28 次調査地で 4 基(28SE010・020・170・215)確認されている。何れも素掘り構造である。28SE010 からは完形に近い甕・壺がまとまって出土している。土器には打ち欠きが施されており、廃絶にあたり祭祀が行われたものと判断される。大道遺跡群内では、このような事例が複数確認されていることから、今後、該当する遺構の抽出を行い、共通性を見出し、当該時期の井戸祭祀の行為についての検証が必要である。廃棄土坑は第 31 次調査地で 1 基(31SK001)発見されている。溝跡は、古墳時代前期と後期の二つの時期のものが存在する。第 21 次～第 28 次調査地へと東西方向に延びる溝(21SD035・025・125)は、第 23 次調査地にある 23SD170 と並行するような配置をしている。28SD025 は 21SD015 と結節するように見えるが、仮に同一溝と認定した場合、第 23 次調査地で確認された推定環濠と考えられる溝跡と同様な形状を呈し、2 重環濠であった可能性も示唆される。

古墳時代後期の遺構は、第28次調査地で南から弓なりに北へと延びる溝(28SD045・145)がある。水流痕跡が認められており、水路の機能を有していたと考えられる。

これまで大道遺跡群では、古墳時代中期～後期の様相は明確ではなかった。しかし、今回の成果により、遺跡群内の北～北東側に当該時期の遺構が展開していることが判明した。また、古代の大溝より九州須恵期編年Ⅲ～Ⅳ期に該当する土蓋・坏身が出土していることも、調査地周辺に古墳時代中期～後期の遺構が存在した証左となる。

古墳時代前期の土器について概観すると、古墳時代前期に該当する資料の大部分は布留式系、若しくはその影響を受けたものが占めている。壺・甕の胴部形状を見るとナデ肩・球形化が進んでいる。また、壺の内面にはヘラケズリが施されるものも認められる。複合口縁壺には胴部にベルト状突帯を持たないものばかりである。高坏は布留式系とともに、有段式のいわゆる庄内系高坏が認められ、在地系のものは極めて少ない。

上記の土器群は、これらの特徴から、概ね古墳時代前期中葉～後葉頃(坪根編年古墳時代土器Ⅱb～Ⅲ期)と捉えることができる。主な遺構の時期については以下のとおりである。

28SE010・31SK001	古墳時代前期前葉～中葉頃	28SE170	古墳時代前期中葉～後葉頃
28SE020	古墳時代前期後葉頃		

【古代：8世紀末～9世紀前半頃】

古代の遺構は、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、道路状遺構と多様である。掘立柱建物跡は主に第31次調査地に集中している。周辺の調査から主軸方位がN-25°-W前後のグループとN-15°-W前後の大きく2つ区分される。第31次調査地においては31SB055・060・075・080が前者に、31SB005・013が後者に該当し、身舎面積は概ね20～30㎡の範囲で、比較的小規模な掘立柱建物跡群である。前者の主軸方位は、周辺調査地を東西方向に縦断する大溝と近似していることから、立地や建物配置に影響を与えていると考えられる。井戸跡は第31次調査地で1基認められている。周辺調査全体を合わせると5基存在し、掘立柱建物跡群の分布に合致するように1～2基配置されている。素掘り構造が多数を占めるが、5SE140では板材を井桁状に組んだ井筒構造を、31SE035の井筒は丸太列り貫きの井筒を有している。古代の遺構群の中で特筆されるものは、各調査地を横断する大溝が挙げられる。幅約4mから最大で7mを有し、全長200m以上にわたって、さながら官道のように直線的に延びる。溝底面の標高は約4.5～4.6mで、北西部(第8次付近)、中央部(第28-1次)が約4.3mと深くなる。水流方向は第31次調査地では北西方向(海側)から、第28次調査地では南東方向(台地側)であったことが看取され、砂礫層も厚く堆積していることから、かなりの水流があったものと推測される。規模や全体プランから、単なる水路とは言いがたい。掘削に際しては計画的に土木工事が施工されたことが想定される。大溝は海～国衙推定地である上野台地方面へと延びており、海(港・津)からの物資を運ぶための人口河川・運河とも考えられる。ただ、現状では仮説の一つでしかなく、大溝の性格を判明するには、大溝の始点・終点にあたる遺跡の様相を検討することが重要である。

第28次調査では、大溝の北と南の両岸に、近接して波板状連続土坑(28SF040・041・042・043)、不定形プランを呈する連続土坑(28SX037～039)、底面に小穴が多数残る溝状遺構などが遺作され、この地点の大溝の底面は他と比べ約0.2～0.3m深くなっている。このような遺構群は道路又は通路としての機能が想定されており、北岸に配される波板状連続土坑を辿ると空閑地とも思える遺構密度の希薄なエリアにいたり、第23次調査の掘立柱建物跡群の方向へと違ふ。南岸側にも大溝から南東方向、南方へと分岐するように波板状連続土坑が配されている。28SF040をはじめとするこれら遺構群が形成される場所は、水路から陸地への接岸地点の一つであったと認識することができる。

その他、第31次調査地から第5次調査地へと延伸する溝(31SD089)が、北東部で円弧状に回っている。一部、掘立柱建物跡と重複関係が生じるが、大溝北側エリアで別区画が存在した可能性が高い。

古代の遺構分布は、ほぼ大溝を境にして北側に限定されていることから、土地利用について規制がなされてい

たとえられる。

【中世以降】

この段階で、最も古く位置づけられる遺構は28SE165である。白色研磨土師器が出土しており、その形態から12世紀中頃の所産と判断される。第28-1次調査区では掘立柱建物跡が2棟(28SB080・090)あるが、出土遺物が無いため、時期は明確ではない。近世以降になると、溝が多数構築されるようになる。初瀬井路の開削に伴い耕地化が進化したことが要因として挙げられる。但し、溝跡群は古代の大溝や古墳時代の推定環壕跡と伸展方向が類似し、北西から南東に向かって斜行するものが大半を占める。地形的な要因があるのか、古代以降、土地利用について規制が生じているかは定かではないが、留意する必要がある。

第2節 古代の建物配置及び遺物について

今回の報告対象地点を中心に既報告地点も含めて概略すると、確認された古代の建物跡は出土遺物等より8世紀末～9世紀前半頃に該当し、全て掘立柱建物跡に限定される。これは小田氏(1996)の言うところの「掘立柱単独型」に該当し、分類項目ではE類集落に分類される。小田氏はE類集落を更にa～d類に細分しており、大道遺跡群は建物配置状況から「比較的大規模な建物群が規則的に配される遺跡-Ec類」にあたると考えられる。大道遺跡群で確認されている掘立柱建物跡は、規模が確定されているものに限定すると、2間×3間→7棟、2間×2間・2間×4間・1間×3間→3棟、2間×5間・1間×5間・1間×4間・3間×5間・1間×2間→各1棟で構成されている。身舎面積については、15～20㎡→6棟、25～30㎡・30～35㎡→4棟、20～25㎡→3棟、50㎡以上→2棟、40～45㎡→1棟、5～10㎡→1棟となっている。30㎡前後が8棟、40㎡以上が3棟と中規模～大規模な建物が比較的多いことが窺える。建物配置を見ると、大部分が大溝と併行するように南北棟を基本とし、整然と配されているが、北西から南東方向に展開するに従い、大溝との距離が縮まり、建物規模も縮小化する状況が看取される。建物跡群は主軸方位から2つのグループに分けられるが、配置の上でも、大きく第23次調査地と第5・28・31次調査地の2つに区分される。また、これら建物跡群は直接的な重複関係を生じる部分が少ないという点も特徴として挙げられる。

次に出土遺物について概観すると、遺物の構成主体は須恵器・土師器の供膳具が占め、須恵器の量が顕著である。供膳具のうち、土師器では精製土を使用し、赤褐色を呈し、内外にミガキ痕が顕著に施されるものが破片を含め多く見られ、深碗のようなタイプも複数ある。供膳具に次ぐのが須恵器の甕・長頸壺といった貯蔵具と企救型甕を代表とする土師器の煮炊き具である。特殊製品については、輸入磁器である越州窯系青磁、奈良三彩、灰釉陶器、緑釉陶器、黒色土器、漆付土師器、刻書土器、円面碗、猿面碗、転用碗、石帯(巡方)、銅甕、銅鐘、瓦、刀子、製塩土器、小形稜状磁石などがある。中でも注目される資料は「厨」と刻書された土師器壺cが挙げられる。具体的に施設名称が刻まれていることも勿論であるが、刻まれた土器が小壺という点に留意する必要がある。周辺に厨の施設が存在したとも思えるが、内容物の伴う容器として持ち込まれた可能性もあり、掘立柱建物跡群=厨と認定するには慎重を期さなければならない。その他、石帯(巡方)であるが、石帯=官人と判断しがちであるが、石帯は袴帯が禁止されたことにより普及するようになったとされ、『衣服令』『制服条』からは官位が無い者でも袴帯を身に着ることができた旨が読み取れ、竪穴建物跡からも発見される事例もあり、地方の末端役人クラスでも十分持ち得ることができるとの指摘がある。本遺跡群から出土したものは黒色の蛇紋岩を丁寧に磨いて作り上げたものであり、『衣服令』『制服条』にある「烏油腹帯」を意識してのものだと推測される。碗に関しては、須恵器を再加工した転用碗が7点あり、これらは割れ口若しくは割れた形状に作爲性が看取されるもので、今後供膳具の破片資料においては十分観察が必要であり、転用碗の認定に注意しなければならない。

第3節 結語

以上、古代の遺構や出土遺物について略述してきたが、図中に示す遺物は、掘立柱建物跡からの出土も若干見られるが、その大部分は大溝から出土したものである。遺物組成から官衙の極相があることを読み取ることができ、文字関連遺物や石帯は地方の末端役人クラスでも有することが可能であるため、遺物のみで官衙遺跡と認定することは注意しなければならない。

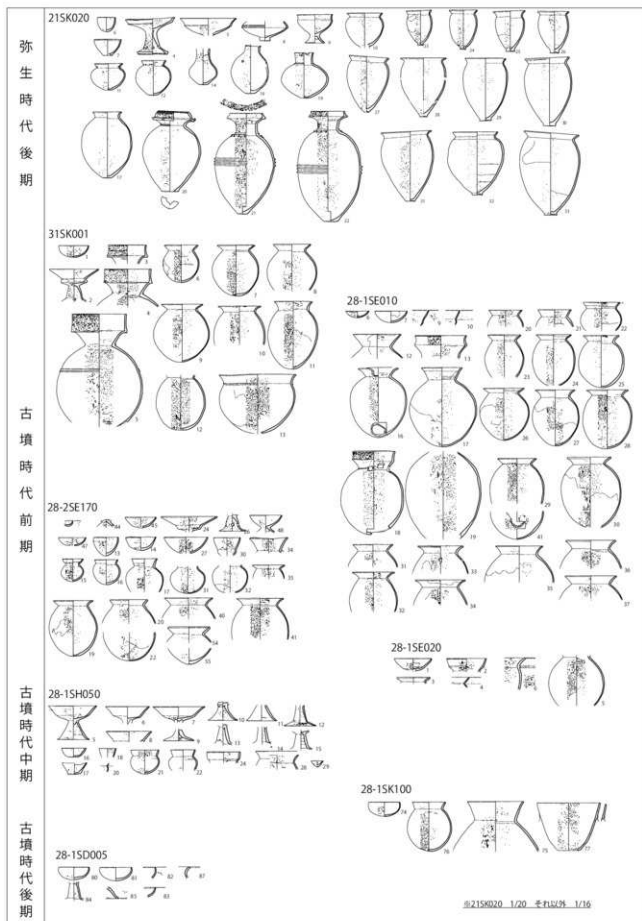
掘立柱建物跡群は、身舎面積 50 m²以上を有す建物を中心に複数の付属施設が規則的に配置されるといった状況や規格・重複関係の少なさといった点から判断すると、官衙の要素を十分示している。古代（8世紀末～9世紀前半頃）に該当する遺構を種別すると掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡で構成され、廃棄土坑が認められないという点が特色として挙げられる。また、これら遺構群は南に位置する大溝と関連性を有することは明白である。

掘立柱建物跡群の機能であるが、掘立柱建物は「倉」と「屋」に区別することができ、「倉」は束柱を持つ高床式の総柱構造を呈すものであり、倉庫としての機能を有したとされ、「屋」は建物の周囲にだけ柱を配置し、住居として利用されるものとされる。

大分市東部に位置する地蔵原遺跡における後藤氏の研究では、まず検出された掘立柱建物跡群の構造に着目し、総柱建物跡が極めて少ないことを指摘している。そして、文献史料の解釈から「倉」を租税として長期間保管するための高床の板屋、「屋」は頒給などを短期保管するため、倉庫として代用された建物である可能性を導き出した。さらに、地蔵原遺跡において古代の遺構が急速に展開するまさにその段階の時代背景を示唆するものとして「類従三代格」所収の延暦 15 年（796）11 月 21 日付の太政官符に言及している。この太政官符に引用された天平 18 年（746）の官符によれば、「このころ、官人・百姓・商旅の徒が、調綿などの国物を、豊前国草津津や豊後国埴津、同坂門津から積み出し、ほしいままに往還していた。」とあり、政府は直ちにこの不法行為を禁じ、大宰府も重ねて禁令を出したものの、「上件の三津高軒徒多し」という有様で、これら三津からの官物、私物の京への積み出しという不法行為はやむことがなかった。結果的には、豊前・豊後の三津における公私の船の往来を許すことになるのである。このような状況下、大野川河口部に位置し、大野川を介して後背する豊後国の諸郡とつながり、諸郡の調や庸などの官物を集め、あわせて種々の農作物、手工業製品などを集散させることが可能となる場所が当該地であると解く。そして、地蔵原遺跡こそ、まさに郡司層に相当する有力百姓・商旅の徒が構築した拠点基地であり、ここでもって、公私の物資の集散と京への搬送が行われたとする、極めて注目される見解が提示されている。

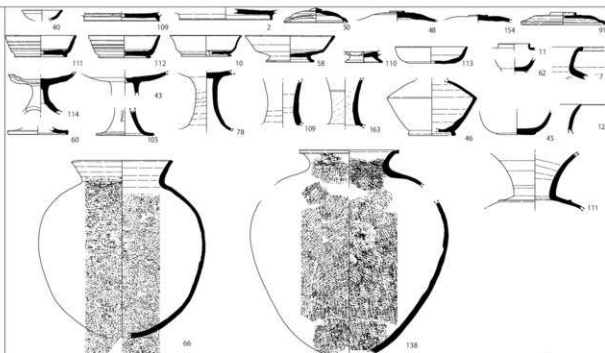
大道遺跡群の掘立柱建物跡についても同様な状況が看取され、「屋」構造を呈すが倉庫の機能を有していた可能性が高く、分布状況から 2 つの倉庫エリアがあったと想定することができる。掘立柱建物跡群が形成される時期は上記の様な不法行為が活発化している段階に合致しており、海岸線付近の沖積地に掘削される人口河川とも言える大溝に近接して構築されるという立地的環境を有している。掘立柱建物跡群の配置、廃棄土坑が認められない点、供膳具を主体とする遺物構成といった状況を総合すると、掘立柱建物跡群＝倉庫群は、大溝を利用した水上交通に關係する公的施設と位置づけることができる。また、大溝の展開状況から、確認された遺構群は国衙に關係する可能性が高い。ちなみに大道遺跡群が所在する地域は、字郷ノ本という地名を残していた。郷という地名＝郷衙と判断するには、郷衙とされている他事例と詳細な比較・検証した上で、郷衙と認識できる必要十分条件を提示する必要があると思われる。

今回所収する調査地点及び周辺の遺跡状況から判断して、これらの掘立柱建物跡群は官衙施設と考えられ、大溝の北側を区画エリアとして展開していることが判明した。また、確認された掘立柱建物跡群は施設群の一部に該当し、未調査区域に性格が異なる遺構が広がっている可能性を示唆するものである。

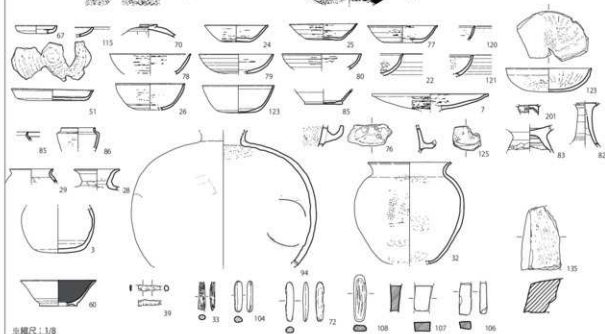


第 92 図 大道遺跡群第 21・28・31 次主要遺構出土遺物 (弥生時代後期～古墳時代)(1/20・1/16)

須恵器

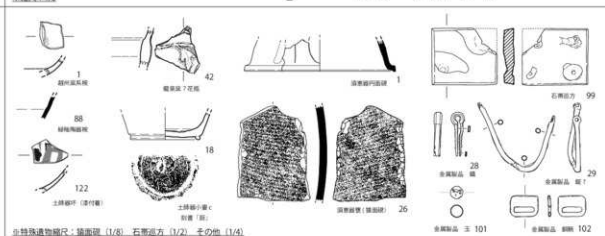


土師器

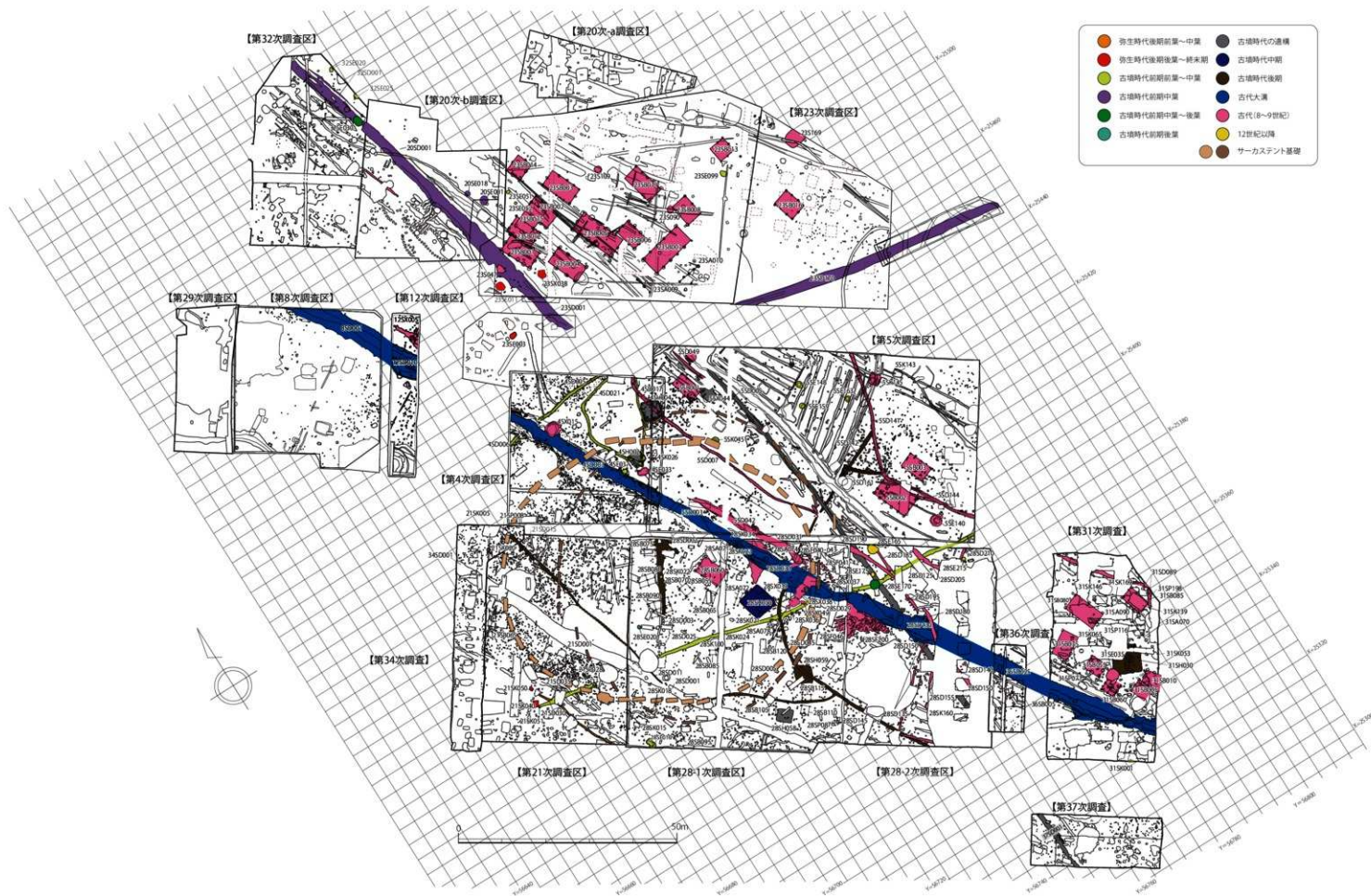


その他出土遺物

特殊遺物



第 93 図 大道遺跡群第 28・31 次主要遺構出土遺物 (古代) (1/8・1/4・1/2)



第94図 大道道跡群北部主要遺構遺構変遷図 (1/800)

参考文献

- ・久住 猛 1999 「庄内式併行期の土器生産とその動き」『庄内式土器研究』X 1 X 庄内式土器研究会
- ・大分市教育委員会 2008『大道遺跡群 1』大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 4
- ・大分市教育委員会 2009『大道遺跡群 2』大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 5
- ・大分市教育委員会 2010『大道遺跡群 3』大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 6
- ・大分市教育委員会 2011『大道遺跡群 4』大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 7
- ・大分市教育委員会 2012『大道遺跡群 5』大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 8
- ・重藤輝行 2010「北部九州における古墳時代中期の土師器編年」『古文化談叢』第 63 集 九州古文化研究会
- ・中西武尚・服部真和 2002「古墳時代中・後期の土師器—大分県—」
- 『第 5 回九州前方後円墳研究会発表要旨資料古墳時代中・後期の土師器—その編年と地域性—九州前方後円墳研究会
- ・岡山県教育委員会・国土交通省岡山河川事務所 2008「百間川原屋島遺跡 7 百間川二の荒手遺跡」
旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査 X VII
- ・大分市教育委員会 2005『下部遺跡群 III』—大分市下部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2—
- ・大分市教育委員会 2007『下部遺跡群 V』—大分市下部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 4—
- ・大分市教育委員会 2008『下部遺跡群 VI』—大分市下部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 5—
- ・坪根伸也「弥生時代後期から古墳時代前期の土器による時期区分」『下部遺跡群 VII』大分市教育委員会
- ・佐藤良子「古墳時代中期から後期の遺物」『下部遺跡群 VII』大分市教育委員会
- ・坪根伸也 2010「古代の土師器について」『下部遺跡群 VII』大分市教育委員会
- ・神田智美 2010「第 III 章第 5 節（4）古代の土師器について」『下部遺跡群 VII』
- ・神田智美 2010「第 III 章第 5 節（5）豊後における古代前期の煮炊具について」『下部遺跡群 VII』
- ・坪根伸也・塩田潤一 2001「豊後国の土器編年」『大分・大友土器研究会論集』
- ・森隆 1995「III 土器・陶磁器 2. 黒色土器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- ・神田智美 2012「第 V 章 第 2 節 羽田遺跡出土の白色研磨土師器について」『羽田遺跡 3』大分市教育委員会
- ・坪根伸也 1999「大分市下部遺跡群の古代道路状遺構について」大分県地方史 第 173 号 抜刷
- ・山村信榮 2001「古代道路の構造」古代文通史 第 10 号 抜刷
- ・大分市教育委員会 2005『海部の遺跡 1』都市計画道路横塚久土線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- ・小田和利 1996「製塩土器からみた律令期集落の様相」『研究論集 21』九州歴史資料館
- ・山中正敏 1994『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房
- ・塩田潤一 2006「豊後国における 8・9 世紀の遺跡動向～乙津川流域を中心として～」
- 『第 8 回西海道古代官衙研究会資料集』西海道古代官衙研究会 中四国古代史研究会合同研究会
- ・大分市史編さん委員会 1987『大分市史 上』
- ・大分県 1982『大分県史』古代 I
- ・大分県 1984『大分県史』古代 II
- ・太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡 X IV』

写真図版



大道道跡群全景（下が北）



第 21 次調査区全景（上が北）



第 28-1 次調査区全景（上が北）



第 28-2 次調査区全景（上が北）



28-15H050 検出状況（南より）



28-15H050 土層観察時（南東より）



28-15H050 土層観察時（詳細）



28-15H050 壁溝検出状況（東より）



28-15H050 壁溝検出状況（詳細）



28-15H050 作業風景



28-15H050 完掘状況（南西より）



28-15K010 検出状況（北より）

写真図版 4



28-1SK010 遺物出土状況（北より）



28-1SK010 遺物出土状況（詳細）



28-1SK010 土層観察時（北より）



28-1SD045 検出状況（南東より）



28-1SD045 土層観察時（北より）



28-1SD045 完掘状況（北より）



28-1SD030 土層観察時（東より）



28-1SD030 刻書土器出土状況（西より）



28-1SD030 刻書土器出土状況（詳細）



28-1SD030・041・042・043 遠景（南より）



28-1SD030 作業風景（北より）



28-1SF041・042 検出状況（南より）



28-1SF041・042 検出状況（北より）



28-1SF041・042 完掘状況（北より）



28-1SF043 完掘状況（北より）



28-1SX037・038・039 検出状況（南より）

写真図版 6



28-1SX034 土層観察時（南より）



28-1 次調査区北壁土層（南より）



月に照らされる調査区



28-2 次調査区北西部検出時（北より）



28-2SE170 検出状況（南より）



28-2SE170 遺物出土状況（南より）



28-2SE170 土層観察時（南より）



28-2SE170 完掘状況（南より）



第31次調査区全景（上が北）



31SB005 検出時（北より）



31SB010 検出状況（南より）



31SB010c 根石出土状況（東より）



31SH030 検出状況（南より）

写真図版 8



31SH030 黄茶土検出状況 (東より)



31SH030 土層 (南より)



31SH030 完掘時 (南より)



31SE035 検出状況 (南より)



31SE035 検出土状況 (東より)



31SE035 遺物出土状況 (南より)



31SE035 木櫛出土状況 (北より)



31SE035 完掘時 (南より)



31SE035 完掘時詳細 (北より)



31SE35 井戸枠取り出し状況



31SK001 遺物出土状況 (北より)



31SK001 遺物出土詳細 (北より)



31SK001 完掘時 (北より)



31SK065 検出状況 (東より)



31SK065 土層 (北より)



31SK065 完掘時 (北より)

写真図版 10



第31次溝群検出状況（北より）



31SD025 検出状況（南東より）



31SD025 焼石出土状況（北より）



31SD025 遺物出土状況（西から）



31SD025 黒色土プラン土層（南東より）



31SD025 縦断土層遠景（南より）



31SD025 縦断土層詳細（南より）



31SD025 縦断土層西部（南より）



31SD025 縦断土層中央部（南より）



31SD025 縦断土層東部（南より）



31SD025 土層（西より）



31SD025 完掘時（南より）



31SD025 東壁土層（西より）



31SD025 西壁土層（東より）



31SD025 完掘時（東より）



SD025 作業風景（南東より）

写真図版 12



31SD089 完掘時（東より）



31SD089 南側土層（南より）



31SD089 北側土層（西より）



34SK020 遺物出土状況（南東より）



34SK020 完掘時（南東より）



37SD001 完掘時（南より）



第 37 次調査区北西隅土層（南東より）



第 37 次調査区全景（南東より）

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおみらいせきでん						
書 名	大道遺跡群6						
副 書 名	大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書9						
シ リ ー ズ 名	大分市埋蔵文化財発掘調査報告書						
シ リ ー ズ 番 号	第125集						
編 著 者 名	佐藤道文・倉増美千代・古閑健一(株式会社埋蔵文化財サポートシステム)						
編 纂 機 関	大分市教育委員会						
所 在 地	〒870-8504 大分市荷揚町2番31号 TEL(097)534-6111 FAX(097)536-0435						
発 行 年 月 日	西暦2013年3月15日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 道路番号	北 緯	東 経	発掘期間	発掘面積(m ²)	発掘原因
おおみらいせきでん 大道遺跡第21次	おおみらいせきでん 大分市金魚南1丁目	44201 201325	33° 13' 39"	131° 36' 28"	20061225～20070328	1628	区画整理事業
大道遺跡群第28次	〃	〃 〃	33° 13' 39"	131° 36' 30"	20080901～20090316	5000	区画整理事業
大道遺跡群第31次	〃	〃 〃	33° 13' 37"	131° 36' 33"	20090618～20090831	1119	区画整理事業
大道遺跡群第34次	〃	〃 〃	33° 13' 39"	131° 36' 28"	20100204～20100316	430	区画整理事業
大道遺跡群第36次	〃	〃 〃	33° 13' 37"	131° 36' 33"	20100204～20100316	160	区画整理事業
大道遺跡群第37次	〃	〃 〃	33° 13' 36"	131° 36' 32"	20100221～20100316	352	区画整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
大道遺跡群第21次	集落	弥生・古墳	廃棄土坑・溝跡		弥生土器		
大道遺跡群第28次	集落	古墳・古代	竪穴建物跡・掘立柱建物跡・溝跡		古式土師器・土師器・須恵器・輸入陶磁器・刻書土器・石帯(部材)		
大道遺跡群第31次	集落	古墳・古代	掘立柱建物跡・溝跡・廃棄土坑		古式土師器・土師器・須恵器・転用礎		
大道遺跡群第34次	集落	弥生・古墳	廃棄土坑		弥生土器		
大道遺跡群第36次	集落	古代	溝跡		土師器・須恵器		
大道遺跡群第37次	集落	古墳	溝跡		土師器		
要 約	今回の調査では、弥生時代から奈良・平安時代の遺構が確認された。第21次調査では、弥生時代後期後葉に比定される弥生土器が主とあって状態で出土しており、土器編年を検証する上で良好な資料を得ることができた。第28・31次調査では、8世紀末～9世紀前半頃の土溝及び掘立柱建物跡群を検出した。大溝は約4m～最大で7mの幅を有し、直線的に200m以上に渡って延伸しており、土層観察から水流痕跡が認められることから大溝として機能していたと考えられる。その北側に規則的に配置する掘立柱建物跡群は倉としての機能していたことが推測され、建物配置及び出土遺物から判断すると官舎的様相が極めて高いことが指摘される。その他、大道遺跡群では調査事例が少ない古墳時代中～後期の遺構も確認され、当該時期の集落が展開していることが可能性が示唆される。						

大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 第125集

大道遺跡群 6

—大分市駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書9—

2013年3月15日

発行 大分市教育委員会
大分市荷揚町2-31